

**BigFix プラットフォーム
Web レポート・ガイド**



第 1 章 Web レポートの構成

Web レポートは、ユーザー環境内の複数のデータベースに分散している BigFix データを表示するときに使用されます。データ集計のメリットに加えて、BigFix コンソールに直接アクセスできない場合にリアルタイム情報がすぐに必要なときにも便利です。Web レポートを使用するために必要なものは、ブラウザーのみです。


多数のプリパッケージされたレポートのセットを使用して、一覧およびグラフを即時に生成できます。また、特定のネットワークに固有の課題またはポリシーに対処するためのカスタム・レポートも簡単に作成できます。

本書では、Web レポート・インターフェースのすべての独自機能について説明します。関連言語および低水準レポート言語に関する詳細なトピックは、本書の対象範囲外です。

要件


Web レポートは、スタンドアロン・サーバー上または BigFix® データベースをホストするマシンと同じマシン上で実行できます。

V9.2 パッチ 3 以降、Windows システムへの BigFix Web レポート・コンポーネントのインストールには、64 ビット・アーキテクチャーのみがサポートされています。

 **注:** BigFix コンソールなどの Web レポート・コンポーネントについて、接続先の BigFix サーバーのバージョンがすべて同じであることを確認してください。

Web レポート・サーバーの要件は、追跡するデータベース、コンピューター、アクション、および取得プロパティの数によって異なります。

Web レポートの主要なリソース要件を検討するときには中心になるのは、高速アクセスのために必要なメモリー・サイズおよび高速レポート処理のために必要な CPU 速度です。ディスクは、読み込み時間を短くするためにローカル・キャッシュを保管しますが、ディスク速度が Web レポートに与える影響は、メモリー・サイズおよび CPU 速度ほど大きくありません。

 **注:** Web レポート・サーバーは、Server Core for Windows Server 2008 R2 ではサポートされません。

BigFix 環境では、30,000 個を超えるエージェントがある場合、別個の Web レポート・サーバーをセットアップすると、メインの BigFix サーバーがそのリソースを共有しなくて済むというメリットが得られます。複数の Web レポート・サーバーをセットアップすると、メイン・サーバーのパフォーマンスへの影響を最小限に抑えられます。

Web レポート・サーバー要件:

エージェントの数	CPU	メモリー
< 10,000	2ghz	1 GB
10,001-30,000	2ghz (デュアル・コア)	2 GB
30,000-100,000	2ghz (デュアル・コア)	3 GB
100,000-200,000	2ghz (クワッド・コア)	4 GB

サポートされるブラウザ

承認済みのクライアント・ブラウザは以下のとおりです。

- Internet Explorer (Windows)
- Firefox (Windows)
- Safari (Mac)
- Google Chrome (Windows、Mac)

サポートされるバージョンは、「[システム要件](#)」を参照してください。

Web レポートを使用するには、ブラウザで JavaScript を有効にする必要があります。


表示するグラフのタイプによっては、Adobe Flash Player をインストールすることも必要です。

スタンドアロン Web レポート・サーバーのデプロイ

スタンドアロン Web レポート・サーバーのデプロイ方法です。

BigFix から専用システムに BESInstallersServer ディレクトリーをコピーできます。スタンドアロン Web レポート・サーバーをデプロイするために実行するステップを以下に示します。

1. 「データベースの選択」ウィンドウで「**リモート・データベースを使用**」を選択し、「**次へ**」をクリックします。
2. 「データベース・サーバー」ウィンドウで、任意の認証方式を選択します。Windows 認証を選択した場合は、Windows 認証ユーザー・ログオンを使用するように、Web レポートのサービス・ログオンを後で変更する必要があります。ユーザーのパスワードを変更する方法については、[BESReporting データベースにアクセスするための資格情報の更新 \(##### 5\)](#)を参照してください。
3. 「機能の選択」ウィンドウで、「**BES サーバー**」オプションと「**BES サーバーのコア・コンポーネント**」オプションをクリアします。選択しなければならないオプションは「**Web レポート**」のみです。[**次へ**]をクリックします。
4. 適切なインストール先を選択し、「**次へ**」をクリックします。
5. Web レポート・サーバーのルートディレクトリーにする必要のある場所を選択し、「**次へ**」をクリックします。
6. 「**次へ**」をクリックしてインストールを開始します。
7. サーバー・コンポーネントのデータベース・ログインと認証方式を指定し、「**次へ**」をクリックします。
8. スタンドアロンのワークステーションのレジストリー・ファイルに、この新しいキーを作成します。HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\BigFix\Enterprise Server \Installer: Hostname=<hostname>、ここで、<hostname> は、スタンドアロン・サーバーの完全修飾ドメイン名 (FQDN) です。

 **注:** バージョン 9.2 以降の場合、Web レポート・サーバーに新しいデータベース・ソース名項目を作成する必要はありません。Web レポートの設定ページで追加されたデータ・ソースは、コンソールを開く際と同一のルート・サーバー・ワークステーションを指している必要があります。これは、データベース・サーバーとは異なる場合があります。

BESReporting データベースにアクセスするための資格情報の更新

BESReporting データベースに接続するためのユーザーのパスワードを更新する方法を。

Web レポート・コンポーネントと BESReporting データベースの間の接続を管理するユーザーのパスワードは、選択した認証のタイプに応じて変更できます。

NT 認証方式を選択した場合


Web レポート・サービスを実行するユーザーのパスワードを更新します。

SQL 認証方式を選択した場合

以下のステップを実行します。

1. Windows レジストリー内の以下のキーにアクセスします。

```
HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\WOW6432Node\BigFix\Enterprise  
Server\FillAggregateDB
```

 **注:** 表示するレジストリー・キーに対するアクセス許可の変更が必要になる場合があります。

2. 「パスワード」キーの値を新規パスワードに変更します。
3. Web レポートを再始動します。再始動すると、Web レポート・サービスが新規パスワードを暗号化します。

セッションの非アクティブ・タイムアウトの設定

ユーザー・インターフェースのセッションの期間に制限を設定します。

非アクティブなユーザー・インターフェース・セッションの長さを制限するには、Web レポートのプロパティ `InactivityTimeoutLength` を、ユーザー・インターフェース・セッションの期限が切れるまでの非アクティブ分数に設定しなければなりません。デフォルト値は 120 分です。異なる値を挿入するには、以下のステップを実行します。

Windows オペレーティング・システムの場合:

1. コマンド・プロンプトを表示して、`Regedit` を実行します。


2. 「レジストリ エディター」 ウィンドウで、HKEY_LOCAL_MACHINE\Software\BigFix\Enterprise Server\BESReports キー (32 ビットの Windows オペレーティング・システムの場合) または HKEY_LOCAL_MACHINE\Software\Wow6432Node\BigFix\Enterprise Server\BESReports (64 ビットの Windows オペレーティング・システムの場合) の下で、REG_SZ キーワード InactivityTimeoutLength を作成し、それをユーザー・インターフェース・セッションの期限が切れるまでの最長非アクティブ分数を設定します。
3. 「レジストリ エディター」 ウィンドウを閉じて BES Web Report Server サービスを再始動し、新しい InactivityTimeoutLength 値を適用します。

Linux オペレーティング・システムの場合:

1. /var/opt/BESWebReportsServer/beswebreports.config 構成ファイルを開きます。
2. 以下のように、[Software\BigFix\Enterprise Server\BESReports] セクションに InactivityTimeoutLength プロパティを追加します。

```
InactivityTimeoutLength = <max_timeout_minutes>
```

ここで、<max_timeout_minutes> は、ユーザー・インターフェース・セッションの期限が切れるまでの最長非アクティブ分数です。

 **注:** InactivityTimeoutLength の新しい値は、次回 Web レポート・アプリケーションを起動した際に適用されます。

レポート・ファイルへのアクセスの制限

Web レポート・コンポーネントで、「ReportFilesCheck」という名前の新規オプションを使用して、レポート・ファイルの保護を切り替えることができます。

このオプションを「1」に設定すると、「ReportFiles」の下のコンテンツにアクセスできるのは、ログイン済みで、かつファイルを「所有する」レポートへのアクセス権限がある場合のみです。このコンテンツにアクセス可能なのは、既にセッションが存在する場合 (セッション Cookie が既に設定済みの場合など) のみのため、失敗した場合はログイン・ページは表示されません。

BigFix バージョン 9.5 パッチ 6 のフレッシュ・インストールでは、「ReportFilesCheck」オプションはデフォルトで「1」に設定されます。

バージョン 9.5 パッチ 5 以前のバージョンからアップグレードする場合、この検査は有効になりません。

有効にするには、以下の手順を実行します。

Windows システムの場合:

1. BES Web ##### ・サービスを停止します。
2. Regedit を実行します。
3. Windows レジストリーの以下の下にオプション

```
ReportFilesCheck = 1
```

を追加します。

```
HKLM\SOFTWARE\BigFix\Enterprise Server\BESReports
```

4. BES Web ##### ・サービスを再始動します。

Linux システムの場合:

1. コマンド `service beswebreports stop` を実行してサービスを停止します。
2. `/var/opt/BESWebReportsServer/beswebreports.config` ファイルを開きます。
3. `[Software\BigFix\Enterprise Server\BESReports]` セクションに、以下のように `ReportFilesCheck` オプションを追加します。

```
ReportFilesCheck = 1
```

4. コマンド `service beswebreports start` を実行してサービスを再始動します。

LDAP と Web レポートとの統合

LDAP と Web レポート・サーバーを統合するための 2 つのソリューションが用意されています。以下に示すように、この 2 つのソリューションは、Windows 上では相互に排他的な方法です。

- 最初のソリューションでは、Windows システムと Linux システムの両方で稼働している Web レポート・サーバーに LDAP (Tivoli Directory Server と Active Directory の両方) を統合します。V9.1 以降では、これが、新規インストールのデフォルト・ソリューションです。
- 2 つ目のソリューションでは、Windows 上でのみ稼働している Web レポート・サーバーに Active Directory を統合します。このソリューションは、Web レポート・サーバーが稼働しているコンピューターが AD ドメインに参加している場合のみ有効です。このソリューションは、以前のバージョンとの互換性のために保持されています。

BigFix を V9.5 にアップグレードしても、既存の環境との互換性のために Endpoint Manager 9.1 の Active Directory ソリューションは保持されます。LDAP ソリューションに切り替えるには、[Windows アップグレード後の LDAP 統合 \(\(ページ\) 14\)](#)を参照してください。

LDAP との統合

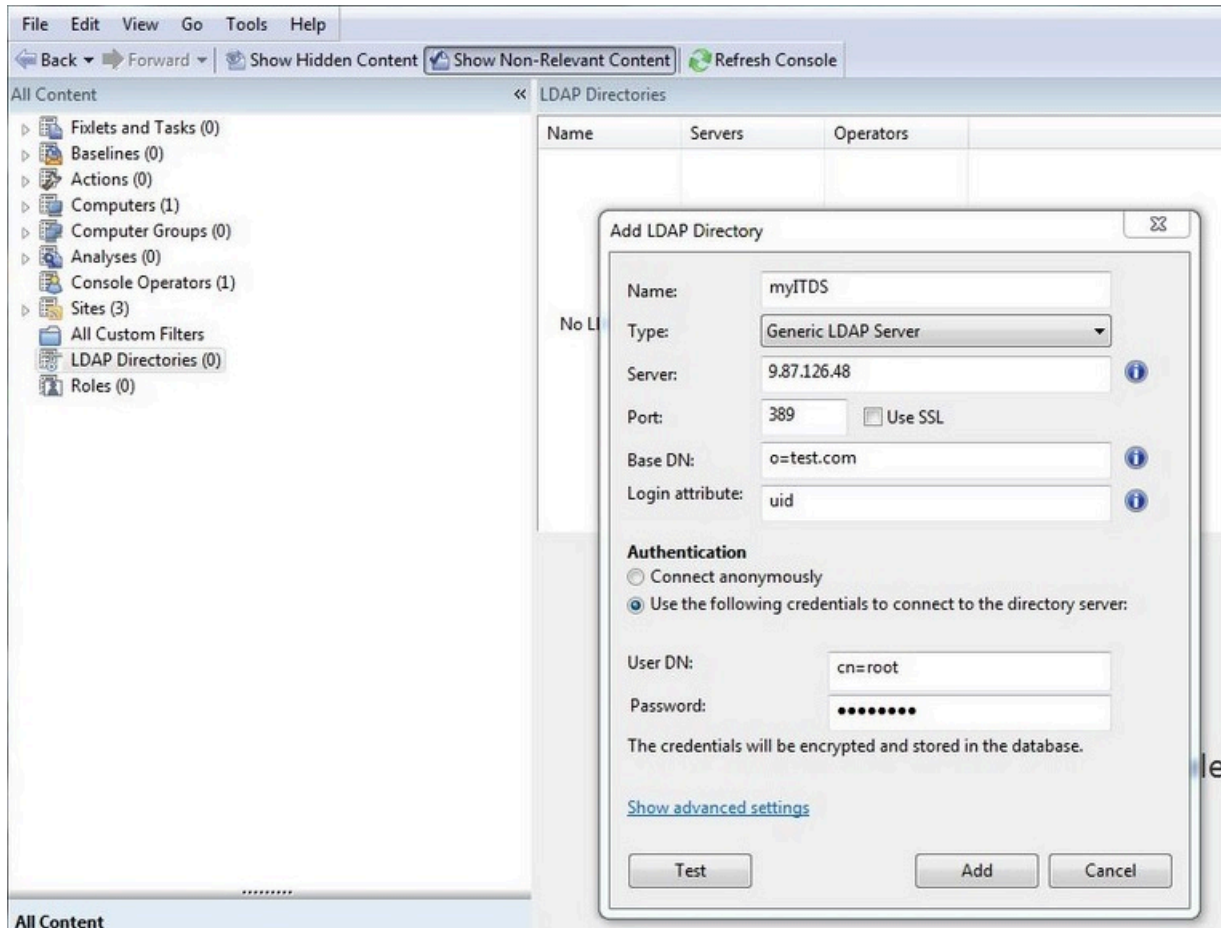
Windows 環境または Linux 環境で Web レポートを LDAP に統合するには、以下の手順を実行します。

- [ステップ 1: LDAP ディレクトリーを BigFix サーバーに追加する \(##### 8\)](#)
- [ステップ 2: Web レポートの役割を LDAP ユーザーまたはグループに割り当てる \(### ## 9\)](#)
- [ステップ 3: LDAP ユーザーとしてログインする \(##### 11\)](#)

ステップ 1: LDAP ディレクトリーを BigFix サーバーに追加する

Web レポートで LDAP 機能を使用するには、BigFix サーバーで LDAP ディレクトリーを定義する必要があります。この方法では、BigFix コンソールを使用して表示できる LDAP オブジェクト詳細レベルと同じレベルを Web レポートで表示することができます。

LDAP ディレクトリーを現在の適用環境に追加するには、BigFix コンソールを使用します。このコンソールでは、「Microsoft Active Directory」と「一般 LDAP サーバー」の間でディレクトリーのタイプを選択できます。



この時点では、LDAP コンソール・オペレーターを追加する必要はありません。

ステップ 2: Web レポートの役割を LDAP ユーザーまたはグループに割り当てる

1. 管理者特権を持っているユーザーとして Web レポートにログインし、「**管理**」 > 「**ユーザーの管理**」にナビゲートします。

The screenshot shows the IBM Web Reports Administration interface. The breadcrumb trail is: Administration > User Management. The 'User Management' section is active, and the 'LDAP Group permissions' link is highlighted in yellow. Below this, there are buttons for 'Assign roles' and 'Delete', and a search input field. A table lists the current user 'master' with login 'me', role 'Administrator', and account type 'Local'.

	Login	Name	Assigned roles	Account Type
<input type="checkbox"/>	master	me	Administrator	Local

2. 「LDAP グループのアクセス許可」をクリックして、既知のデータ・ソースにおける使用可能なディレクトリーのリストを表示します。

The screenshot shows the IBM Web Reports Administration interface with the 'LDAP Group Permissions' page selected. The breadcrumb trail is: Administration > User Management >> LDAP Group Permissions. The 'Search under current container: Connected datasources' section is active, with radio buttons for 'Names' (selected) and 'Assigned web reports roles'. A search input field and a 'Search' button are present. Below this, there are buttons for 'Assign roles' and 'Select: All, None'. A table lists the directory 'myITDS' with assigned roles, inherited roles, and type 'Directory'.

	Name	Assigned roles	Inherited roles	Type
<input type="checkbox"/>	myITDS			Directory

3. 以前のソリューションでは、AD コンテナが表示されていました。いずれかのディレクトリーをクリックして、そのディレクトリー内のユーザーとグループを表示します。

IBM. Web Reports

Explore Data | Report List | Administration

Scheduled Activities | Filter Management | Address Book | User Management | Datasource Settings

User Management >> LDAP Group Permissions >> myITDS

Search under current container: myITDS
 Names Assigned web reports roles

Assign roles ▼

Select: All, None

	Name	Assigned roles	Inherited roles	Type
<input type="checkbox"/>	TEMGroup			Security Group
<input type="checkbox"/>	MOgroup			Security Group
<input type="checkbox"/>	JutaaMOG			Security Group
<input type="checkbox"/>	JutaaNMOG			Security Group
<input type="checkbox"/>	Daniele Rossi			User
<input type="checkbox"/>	Diana Rossi			User
<input type="checkbox"/>	Francy			User

4. ユーザーまたはグループを選択し、以下のように Web レポートの役割を割り当てます。

IBM. Web Reports

Explore Data | Report List | Administration

Scheduled Activities | Filter Management | Address Book | User Management | Datasource Settings

User Management >> LDAP Group Permissions >> myITDS

Search under current container: myITDS
 Names Assigned web reports roles

Assign roles ▼

All Roles

Administrator

Normal

Read-only

Assigned Roles

Administrator

	Name	Assigned roles	Inherited roles	Type
<input type="checkbox"/>	TEMGroup			Security Group
<input type="checkbox"/>	MOgroup			Security Group
<input type="checkbox"/>	JutaaMOG			Security Group
<input type="checkbox"/>	JutaaNMOG			Security Group
<input type="checkbox"/>	Daniele Rossi			User
<input type="checkbox"/>	Diana Rossi			User
<input type="checkbox"/>	Francy			User
<input type="checkbox"/>	Paperino Paolino			User
<input type="checkbox"/>	Luca	Administrator		User

このユーザーが初めてログインすると、新しい LDAP ユーザーが Web レポートのデータベース内に作成されます。

ステップ 3: LDAP ユーザーとしてログインする

これで、管理者役割に関連付けられたグループに属する LDAP ユーザーとしてログインできるようになりました。Web レポート・ログイン資格情報を入力するには、コンソールから Active Directory ユーザーおよび 汎用 LDAP ユーザーを入力するために使用した構文に従います。



The image shows a screenshot of the IBM BigFix login interface. At the top, it says "IBM BigFix". Below that is a "Login" section with the text "Please enter your username and password to connect to Web Reports." There are two input fields: "Username:" and "Password:". At the bottom of the form is a "Login" button.

最初のログイン操作の実行時に、Web レポートは BigFix サーバーを使用して、ログイン資格情報を LDAP サーバーに送信します。この資格情報が受け入れられると、Web レポートはデータベース上にエントリーを作成し、LDAP ユーザーのログイン操作を実行します。

Active Directory との統合


Active Directory ユーザーが BigFix **Web レポート**・サーバーにアクセスできるようにすることが可能です。

注: この構成は、Linux 上で実行される BigFix **Web レポート**・サーバーではサポートされません。後方互換性のためにのみ保持されます。


Active Directory を、Windows 上で実行されている **Web レポート**・サーバーと統合するには、以下の手順を実行します。

1. ユーザー Active Directory 資格情報を保護するために、Web レポート内の SSL サポートを有効にします。
2. 一部のユーザーのみ Active Directory データを閲覧できるように Active Directory 上の権限が設定されている場合、または **Web レポート**・サーバーが Active Directory ドメインに属していない場合、Active Directory を照会する権限を持つドメイン・ユーザーとして実行されるように Web レポート・サーバー・サービスを構成する必要があります。

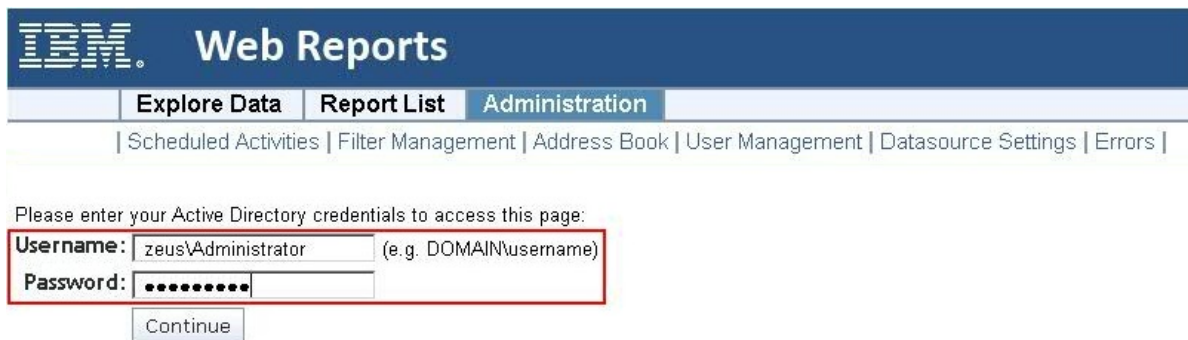
す。このユーザーは、ドメイン管理者または Active Directory を変更するアクセス許可を持つユーザーである必要はありません。

 **注:** Fixlet の自動アップグレードが有効化されるのは、Web レポート・サービスが Local System アカウント を使用して実行される場合のみです。

3. Web レポートに Web レポート管理者としてログインします。
4. 「管理」 > 「ユーザーの管理」 にナビゲートします。
5. 「Active Directory 権限」 リンクをクリックします。

 **注:** このリンクを表示し、Web レポート用の LDAP 経由で Active Directory 認証の構成を開始するには、BigFix コンソールで LDAP ユーザー認証を有効にする必要があります。

6. Active Directory ユーザー名およびパスワードを入力します。ユーザー名の形式は、以下に示すように、DOMAIN\username または username@DOMAIN でなければなりません。



The screenshot shows the IBM Web Reports Administration interface. The 'Administration' tab is selected. Below the navigation bar, there is a login form with the following fields:

Please enter your Active Directory credentials to access this page:

Username: zeus\Administrator (e.g. DOMAIN\username)

Password: [masked]

Continue

7. ドメイン名を選択します。



The screenshot shows the IBM Web Reports Administration interface, specifically the 'Active Directory Permissions' page. The 'Administration' tab is selected. The page title is 'User Management >> Active Directory Permissions'. The search container is 'Active Directory Forest'. The search criteria are 'Names' and 'Assigned web reports roles'. The search results table is as follows:

	Name	Assigned roles	Inherited roles	Type	Location
<input type="checkbox"/>	zeus			Domain	

At the bottom of the table, there is a red arrow pointing to the 'zeus' entry. The page also shows navigation controls: '<< first < prev Showing items 1 - 1 of 1 next > last >>'. There is also an 'Assign roles' dropdown menu and a 'Select: All, None' option above the table.

8. 「ユーザー」 コンテナを選択し、アクセス権を付与する、Active Directory 内の使用可能なユーザーをリストします。

The screenshot shows the IBM Web Reports Administration interface. The breadcrumb path is **User Management >> Active Directory Permissions >> zeus.com**. The search scope is set to **Search under current container: zeus.com** with the **Names** radio button selected. Below the search bar, there is an **Assign roles** dropdown menu and a **Select: All, None** option. A table lists containers with columns: **Name**, **Assigned roles**, **Inherited roles**, **Type**, and **Location**. The **Users** container is highlighted with a red arrow pointing to its checkbox.

	Name	Assigned roles	Inherited roles	Type	Location
<input type="checkbox"/>	Builtin			Container	zeus.com
<input type="checkbox"/>	Computers			Container	zeus.com
<input type="checkbox"/>	Domain Controllers			Container	zeus.com
<input type="checkbox"/>	ForeignSecurityPrincipals			Container	zeus.com
<input type="checkbox"/>	Program Data			Container	zeus.com
<input type="checkbox"/>	System			Container	zeus.com
<input type="checkbox"/>	Users			Container	zeus.com

Navigation: << first < prev Showing items 1 - 7 of 7 next > last >>

9. ドメイン・グループまたはドメイン・ユーザーを選択し、「役割の割り当て」をクリックして、グループまたはユーザーに割り当てる役割または権限を選択します。

The screenshot shows the IBM Web Reports Administration interface for **Users**. The breadcrumb path is **User Management >> Active Directory Permissions >> zeus.com >> Users**. The search scope is **Search under current container: Users** with the **Names** radio button selected. Below the search bar, there is an **Assign roles** dropdown menu. A modal window titled **All Roles** is open, showing a list of roles with checkboxes. The **Normal** role is selected with a red arrow. Below the modal, there is an **Assigned Roles** section with a list of roles, including **Normal** which is also selected. A table lists roles with columns: **Assigned roles**, **Inherited roles**, **Type**, and **Location**.

	Assigned roles	Inherited roles	Type	Location
<input type="checkbox"/>			User	zeus.com > Users
<input checked="" type="checkbox"/>			User	zeus.com > Users
<input type="checkbox"/>			User	zeus.com > Users
<input type="checkbox"/>			User	zeus.com > Users
<input type="checkbox"/>			Security Group	zeus.com > Users
<input type="checkbox"/>			Security Group	zeus.com > Users
<input type="checkbox"/>			Security Group	zeus.com > Users
<input type="checkbox"/>			Security Group	zeus.com > Users
<input type="checkbox"/>			Security Group	zeus.com > Users

このようにして、役割定義に従って、Web レポートへのアクセス権を付与します。

Windows アップグレード後の LDAP 統合

Windows BigFix を V9.1 にアップグレードしても、既存の環境に対する BigFix V9.0 の Active Directory ソリューションの互換性は保たれます。Web レポートと LDAP 統合の新規機能に切り替えるには、以下の手順を実行します。

1. Web レポートにログインします。
2. 「**ユーザーの管理**」から、すべての Active Directory ユーザーを削除します。
3. BES Web Report Server サービスを Active Directory アカウントから Local System アカウントに変更します。
4. HKLM\Software\WOW6432Node\BigFix\Enterprise Server\BESReports 内の UseLegacyADLogin 値を 1 から 0 に変更します。
5. BES Web Report Server サービスを再開します。
6. コンソールから、Active Directory を追加するか、「**ツール**」 > 「**LDAP ディレクトリーの追加**」を選択して LDAP を追加します。
7. Web レポートにログインし、「**ユーザーの管理**」から Web レポート役割を LDAP ユーザーおよびグループに割り当てます。詳しくは、「[Web レポートの役割を LDAP ユーザーまたはグループに割り当てる \(##### 9\)](#)」を参照してください。

表示される LDAP エントリー数の設定

Web レポートで表示される LDAP エントリーのデフォルトの数は 1000 です。Web レポート内で表示される LDAP エントリーの最大数を変更する場合は、以下の手順を実行します。

Windows システムの場合:

1. BES Web Report Server サービスを停止します。
2. Regedit を実行します。
3. HKEY_LOCAL_MACHINE\Software\BigFix\Enterprise Server\BESReports キー (32 ビットの Windows システムの場合) または HKEY_LOCAL_MACHINE\Software\Wow6432Node\BigFix\Enterprise Server\BESReports (64 ビットの Windows システムの場合) の下で、REG_SZ キーワード LDAPSearchMaxResults を作成し、それを Web レポートで表示する LDAP エントリーの数に設定します。
4. BES Web Report Server サービスを再開します。

Linux システムの場合:

1. /var/opt/BESWebReportsServer/beswebreports.config 構成ファイルを開きます。
2. 以下のように、セクション [Software\BigFix\Enterprise Server\BESReports] に LDAPSearchMaxResults を追加します。

```
LDAPSearchMaxResults = <max_number_LDAP_entries>
```

ここで、<max_number_LDAP_entries> は、Web レポート内で表示される LDAP エントリーの最大数です。

注: LDAPSearchMaxResults キーワードに割り当てられた値は、ユーザーの照会とグループの照会に適用されます。例えば、LDAP 2000 ユーザーと 5000 グループを定義して、LDAPSearchMaxResults = 1000 を設定した場合、ユーザーおよびグループについての照会で、最大で 1000 ユーザーと 1000 グループが表示されます。

SAML 統合

V9.2.6 以降、BigFix は、Web レポートと Web UI コンポーネントに対して、LDAP を基盤とした SAML ID プロバイダー経由の SAML V2.0 認証をサポートしています。このサポートを使用して、Common Access Card (CAC)、Personal Identity Verification (PIV) カード、またはその他の要素を使用した BigFix の二要素認証を強制できます。この構成は、ID プロバイダーのログイン URL から Web ベースのシングル・サインオン認証方法を使用します。ログオンしているユーザーは、再びログインする必要なく、SAML V2.0 認証をサポートしているコンポーネントに自動的にリダイレクトされます。

この構成を実装する場合、LDAP オペレーターは、通常の Web レポートや Web UI のログイン・ページではなく、IDプロバイダーのログイン URL からログインしなければなりません。BigFix コンソールへのアクセスには、この機能拡張による影響はありません。

SAML V2.0 認証のサポートについて詳しくは、LDAP オペレーター用の SAML V2.0 認証の有効化 (ページ) および <https://www.ibm.com/developerworks/community/wikis/home?lang=en#!/wiki/Tivoli%20Endpoint%20Manager/page/SAML%20V2.0%20Authentication%20Support> を参照してください。

NT ドメインとの互換性

このトピックに記載されている情報を参照すると、以下の場合に、ユーザー ID を使用して、割り当てられた役割で Web レポートにログインできます。

- ユーザー ID が NT ドメインと Active Directory の両方で定義されている。
- NT 認証に使用されたドメイン名が、Active Directory で指定されたドメイン名と異なる。
- BigFix 環境で Active Directory を Web レポートと統合した。

すべての条件に当てはまる場合は、Web レポート・コンポーネントがインストールされているシステムで以下の構成手順を実行します。

Windows システムの場合:

1. レジストリーを開きます。
2. 選択:

```
HKLM -> Software -> Wow6432Node -> BigFix -> Enterprise
Server -> BESReports
```

3. 以下のように、ファイル・コンバーターを指定します。

```
NTDomainFilePath = FullPathConversionFile
```

ここで、*FullPathConversionFile* は、ドメイン名に適用する必要がある各ドメイン名変換の行を含むファイルへのパス名で、例えば、以下のようになります。

```
my_NT_Domain|my_LDAP_domain
```

4. Web レポート・サービスを再始動します。


Linux システムの場合:

1. 構成ファイル `/var/opt/BESWebReportsServer/beswebreports.config` で、`[Software\BigFix\Enterprise Server\BESReports]` の下にファイル・コンバーターを指定します。

```
NTDomainFilePath = FullPathConversionFile
```

ここで、*FullPathConversionFile* は、ドメイン名に適用する必要がある各ドメイン名変換の行を含むファイルへのパス名で、例えば、以下のようになります。

```
my_NT_Domain|my_LDAP_domain
```

 **注:** ファイルの各行が、Windows システムで使用されているものと同じタイプの改行 (CRLF) で必ず終了するようにしてください。

2. Web レポート・プロセスを再始動します。

上記の手順を完了した後、ユーザーは NT ドメイン資格情報 (例えば、*my_user@my_NT_domain.com*) を使用してログインし、Web レポートに正常にアクセスできます。

第 2 章. プログラムの使用


Web レポート・インターフェースは非常に単純で直観的です。以下のチュートリアルで示すように、わずか数分間で、条件が限定されたレポートを作成し、そのレポートを印刷または電子メールで送信することができます。以下では、このプログラムの機能の範囲について理解を深められるように、Web レポートのいくつかの最も一般的な機能の概要について段階的に説明します。説明は簡潔ですが、ここではプログラムの機能の大部分を扱いません。

初回のログイン

BigFix サーバーが実行されているオペレーティング・システムに応じて、Web レポートへのログイン・タイプは異なる場合があります。

Windows で実行されている Web レポートにログインするには、ローカル・ブラウザを使用して次のようにローカル・ホストをポイントします:`http://localhost/webreports` そのうえで、Web レポートの最初のユーザー ID を定義します。ユーザー ID を定義した後は、リモート・ブラウザを使用できます。

Linux で実行されている Web レポートにログインするには、インストール時に定義した BigFix 管理者のユーザー ID とパスワードを使用します。このユーザー ID を使用して、リモート・ブラウザで Web レポートのアドレスを指定できます。例: `http://HostnameWebReportsServer/webreports`

 **注:** BigFix が SAML V2.0 認証を使用できるようにした場合、LDAP オペレーターは URL `https://<bigfix_server>:8080` (8080 は Web レポートが使用するポート番号) の Web レポートにログインし、その認証は ID プロバイダーによって管理されます。詳しくは、BigFix ユーザーの観点から見た変更内容 (#####) を参照してください。

Web レポートの開始

Web レポートは、「スタート」メニューから使用できるスタンドアロン・プログラムです。コンソール内から、「ツール」>「Web レポートを起動」を選択して開始すること

もできます。インターフェースは3つのメイン・セクションに分割されています。各セクションにアクセスするには、ウィンドウの上部にあるナビゲーション・バーの項目をクリックします。

Web レポート・プログラムに最初にログインすると、いくつかのオプションを含むスタートアップ・ウィンドウが表示されます。



メイン・ウィンドウには、少なくとも2つのアイコンが表示されます。

- **星印付き:** このオプションは、自分が星印を付けた重要なレポートの一覧を表示します。
- **自分で作成:** このオプションは、自分が個人的に作成したレポートの一覧を表示します。

これ以外に、以下のアイコンが表示されることがあります。

- **ドメインのアイコン:** これらのアイコンは、選択されたドメインに関連付けられた Web レポートの一覧を表示するために選択できます。「エンドポイント保護」または「セキュリティー設定」などです。

ウィンドウの上部には、検索ボックスおよび2つのユーザー選択項目が表示されます。

- **コンピューターの検索:** 右上にある検索ボックスを使用すると、名前、IP アドレス、OS、CPU、最終レポート時刻に基づいて、コンピューターを選択できます。

- **環境設定:** ユーザーの個人ログインのために、開始スプラッシュ・ページおよび各ページ上に出力する結果の数などの環境設定を変更できます。詳しくは、「[環境設定の変更 \(##### 34\)](#)」を参照してください。
- **ログアウト:** プログラムを終了するには、これをクリックします。

この下には、タブ形式の 3 つのメイン・セクション・ヘッダーがあります。

- **データの検索:** このオプションを使用すると、BigFix クライアント、Fixlet メッセージ、タスク、アクション、オペレーターなどに基づいてデータをフィルタリングして表示できます。このオプションを使用して、独自のカスタム・レポートおよび図形グラフを作成することもできます。詳しくは、第 3 部「[検索](#)」を参照してください。
- **「レポート一覧」:** このオプションは、使用可能なすべてのレポート (組み込みレポートとカスタム・レポート) を表示します。レポートをフィルタリングし、レポートの表示設定を変更し、レポートの出力のスケジュールをセットアップすることができます。詳しくは、第 4 部「[レポート](#)」を参照してください。
- **管理:** このオプションを使用すると、スケジュール・アクティビティ、データベース設定、およびユーザー・データベースを管理できます。詳しくは、「[プログラムの管理](#)」を参照してください。

「検索」および「レポート」のヘッダーは、Web レポートの主要な機能を表します。

「**データの検索**」を使用すると、さまざまなフィルターを指定してデータを表示できます。理想的なデータ・セットになるように焦点を絞り込んだ後で、それをレポートとして保存しておく、マウスを数回クリックするだけでそのレポートを再使用またはカスタマイズできます。

作成したレポートは、「**レポート一覧**」内に表示され、簡単に選択できます。お気に入りのレポートを作成およびカスタマイズするときには、この一覧から選択します。

本書の以下の各セクションでは、このプログラムを使用して、特定の企業ネットワークおよびポリシーに焦点を合わせてカスタマイズされたレポートを作成する方法について説明します。

データの表示

ユーザーが最初に行ってみることは、Web レポートが BigFix データベースから集計したデータを表示することでしょう。これを行うには、以下のステップを実行します。

1. 上部にあるタブ・バーから「データの検索」をクリックします。



2. デフォルトの「コンピューター」レポートが表示されます。

 The screenshot displays the 'Computers' report page. At the top, there are navigation links: '| Computers | Content | Actions | Operators | Unmanaged Assets | Custom |'. Below these are 'Export to CSV :: Printable Version ::' and a 'Save Report' button. A 'Filter' section allows users to refine results, with a dropdown set to 'Computer' and a 'Search Properties' input field. The main content area is titled 'Computers' and contains a table with columns for 'Computer Name', 'IP Address', 'OS', and 'CPU'. The table lists various devices and their specifications.

Computer Name	IP Address	OS	CPU
PocketPC-WM_tyler_corr1	172.16.30.119	Windows Mobile 6.0 5.2.1616	930 MHz ARM version 4
QAADX51-1	192.168.105.129	AIX 5.1	380 MHz PowerPC_604e
QAADX52-1	192.168.107.115	AIX 5.2	400 MHz PowerPC_POWER3
qaai61-1	192.168.107.251	AIX 6.1	1500 MHz PowerPC_POWER5
QABES	192.168.104.37	Win2003 5.2.3790	2700 MHz Xeon
QABES-EXTRELAY	10.10.10.90	Win2003 5.2.3790	2400 MHz Xeon
qacentos48x64-1	192.168.106.235	Linux CentOS 4.8 (2.6.9-89.ELsmp)	2400 MHz Core 2
qacentos48x86-1	192.168.106.241	Linux CentOS 4.8 (2.6.9-89.ELsmp)	2400 MHz Core 2
qacentos54x64-1	192.168.106.249	Linux CentOS 5.4 (2.6.18-164.el5)	2400 MHz Core 2
qacentos54x86-1	192.168.105.233	Linux CentOS 5.4 (2.6.18-164.el5)	2400 MHz Core 2
QAESX302-1	192.168.107.118	VMware ESX Server 3.0.2 (2.4.21-47.0.1.ELvminx)	1800 MHz Pentium 4
qaesx350-1	192.168.104.63	VMware ESX Server 3.5.0 (2.4.21-58.ELvminx)	2400 MHz AuthenticAMD
QAFC085-1	192.168.105.243	Core 2 Duo E6600	2400 MHz AuthenticAMD

この重要なレポートを 1 回クリックするだけで表示できます。上部にあるリンクを使用して、Fixlet の「コンテンツ」、「アクション」、「オペレーター」などの他のデータ・セットを検索できます。

レポートの上には「フィルター」セクションもあります。次のトピックでは、焦点を絞り込むためのフィルターの使用方法について説明します。

データのフィルタリング

「フィルター」セクションは、データの検索およびレポートの作成のためのキー・コンポーネントです。効果的なフィルタリングを行うと、最も重要なデータのセグメントのみを重点的に表示できます。フィルターは、関連レポートを作成するために非常に重要です。

例えば、Windows コンピューターのみを表示するには、以下のようにコンピューターをフィルタリングします。

1. 上部にあるタブ・バーから「データの検索」をクリックします。



2. デフォルトの「コンピューター」レポートが表示されます。データベース内のすべてのコンピューターが表示されます。

The screenshot shows the 'Filter' section with a rule: Computer OS contains win. Below it is a table of computers with columns: Computer Name, IP Address, OS, CPU, and Last Report Time.

Computer Name	IP Address	OS	CPU	Last Report Time
ZKR2	192.168.2.110	Win2008R2 6.1.7600	1900 MHz Intel(R) Xeon(R) CPU E5502 @ 1.87GHz	Wednesday, January 19, 2011 11:05:23 PM
EMSPD01	192.168.107.197	Win2003 5.2.3790	2400 MHz Xeon	Wednesday, January 19, 2011 11:17:17 PM
QABES	192.168.104.37	Win2003 5.2.3790	2700 MHz Xeon	Wednesday, January 19, 2011 11:20:00 PM
QABES-EXTRELAY	10.10.10.90	Win2003 5.2.3790	2400 MHz Xeon	Wednesday, January 19, 2011 10:36:09 PM
QABES-IPV6	192.168.107.168	Win2008 6.0.6001	2400 MHz Intel(R) Xeon(R) CPU E5620 @ 2.40GHz	Wednesday, January 19, 2011 11:09:18 PM
QABES-WR1	10.3.10.122	Win2008R2 6.1.7600	2400 MHz Xeon	Wednesday, January 19, 2011 11:03:28 PM
QABES-WR2	10.3.10.118	WinXP-2003 5.2.3790	2400 MHz Xeon	Wednesday, January 19, 2011 11:19:40 PM
QAWIN2000X86-2	10.3.10.107	Win2000 5.0.2195	2400 MHz Xeon	Wednesday, January 19, 2011 11:16:35 PM
QAWIN2000X86-3	10.3.10.110	Win2000 5.0.2195	2400 MHz Xeon	Wednesday, January 19, 2011 11:08:00 PM
QAWIN2003IT-1	192.168.106.4	Win2003 5.2.3790	1300 MHz Itanium 2	Wednesday, January 19, 2011 11:18:26 PM
QAWIN2003X64-1	10.3.10.109	Win2003 5.2.3790	2400 MHz Xeon	Wednesday, January 19, 2011 11:08:11 PM
QAWIN2003X64-2	10.3.10.108	Win2003 5.2.3790	2400 MHz Xeon	Wednesday, January 19, 2011 11:01:19 PM

3. 「コンピューター」というプルダウン・メニューの横のボックス内でクリックします。プルダウン・メニューが開くので、ここで、ネットワーク内で定義されている多数のコンピューターのプロパティの1つを選択できます。
 - a. メニューから「OS」を選択するか、OSと直接入力し、Enter キーを押します。
 - b. 演算子のリストを示す別のプルダウンが開きます。「以下を含む」を選択します。
 - c. テキスト・ボックスが開きます。win と入力して、レポートを Windows コンピューターのみに絞り込みます。

注: 必要なプロパティを検索して選択するためのもう 1 つの方法として、プロパティの名前の一部を入力することもできます。検索を絞り込むために、以下の例で説明するように、^ 文字および \$ 文字を使用することができます。

「OS」プロパティを検索するには (完全一致)、以下を入力します。

```
^OS$
```

また、「サブネット・アドレス」という名前のプロパティを検索するには (完全一致)、以下を入力します。

```
^Subnet Address$
```

先頭が「前回」のすべてのプロパティを検索するには、以下を入力します。

```
^Last
```

末尾が「時刻」のすべてのプロパティを検索するには、以下を入力します。

```
Time$
```

注: パッチ 9 以降では、プルダウン・メニューの横のボックスに 1000 を超えるプロパティは表示されません。

4. 「**フィルターの適用**」 ボタンをクリックして、フィルターの影響の概要を素早く表示します。

レポートの保存

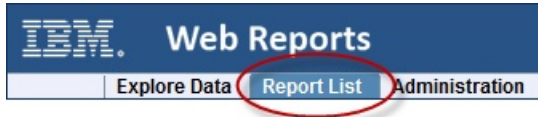
([データのフィルタリング \(ページ 22\)](#)で説明したように) 一覧をフィルタリングして、必要な情報のみを抽出した後で、フィルターを固有のレポートとして保存できます。ウィンドウの上部にある「**レポートを保存**」ボタンをクリックし、条件が限定されたレポートの名前を指定します。



指定した名前はレポート一覧に追加され、作成者としてユーザー名のラベルが付けられます。

レポートの表示

1. 上部にあるタブ・バーから「レポート一覧」をクリックします。



2. レポートの一覧が表示されます。

Name	Labels	Author	Visibility	Schedule
<input type="checkbox"/> ☆ Action List			Public	No
<input type="checkbox"/> ☆ Analysis List			Public	No
<input type="checkbox"/> ☆ BigFix AntiPast Detection Report			Public	No
<input type="checkbox"/> ☆ BigFix Firewall Dashboard	Endpoint Protection		Public	No
<input type="checkbox"/> ☆ Computer Compliance Detail	Security Configuration		Public	No
<input type="checkbox"/> ☆ Computer Compliance Summary	Security Configuration		Public	No
<input type="checkbox"/> ☆ Computer Properties List			Public	No
<input type="checkbox"/> ☆ Cool Facts - QA Support External Site			Public	No
<input type="checkbox"/> ☆ Core Protection Module - Action Fail Report	Endpoint Protection		Public	No
<input type="checkbox"/> ☆ Core Protection Module - Health Status Report	Endpoint Protection		Public	No
<input type="checkbox"/> ☆ Core Protection Module - Top 25 Most Recent Spyware	Endpoint Protection		Public	No
<input type="checkbox"/> ☆ Core Protection Module - Top 25 Most Recent Viruses	Endpoint Protection		Public	No
<input type="checkbox"/> ☆ Core Protection Module - Virus Outbreak Status	Endpoint Protection		Public	No
<input type="checkbox"/> ☆ Daily Power Statistics by Computer			Public	No
<input type="checkbox"/> ☆ Historical Power State			Public	No
<input type="checkbox"/> ☆ Internationalization			Public	No
<input type="checkbox"/> ☆ Model Power Savings	Systems Lifecycle		Public	No

関連付けられたレポートを表示するには、リンクのいずれかをクリックします。

次のレポートはデフォルトで使用可能です。

- アクション・リスト
- 分析リスト
- コンピューターのプロパティ一覧 (Computer Properties List)
- 未解決の脆弱性一覧 (Open Vulnerabilities List)
- オペレーティング・システムの配布
- オペレーター・リスト
- 概要
- 最近のアクションからの 10 個の Fixlet の進行状況

- 最近の関連する 10 個の Fixlet の進行状況
- 一定期間にわたる脆弱性トレンド

3. ウィンドウの左側にあるボックスを使用すると、レポートをラベルおよび作成者でフィルタリングできます。これにより、不要なレポートを非表示にして、簡潔なレポート一覧を表示できます。指定するには、フィルターの前にあるチェック・ボックスをクリックします。複数のフィルターは論理和演算されます。

このセクションには、いくつかの便利な機能があります。詳しくは、「レポート一覧」メイン・ページを参照してください。

グラフの作成

多くのデータ・ビューおよびレポートは、データをグラフィカル形式で表示できます。

「データの検索」またはレポート一覧から、グラフを使用できる場合は、フィルター・セクションのすぐ下にあるセクション内に表示されます。

Analysis List*

Export to CSV :: Printable Version :: Save Report As

Filter Save Filter Load Filter Clear

Results match 31 conditions.

Content Visibility is Visible add clause - +

and Content Type is Analysis add clause - +

and Content Progress is Not Activated add clause - +

Apply Filter

Charts Add Historical Chart

Content

Edit Columns

Progress	Name	Sitename	Activated By (Analysis)	Activation Time (Analysis)
Not Activated	Adobe Product Detection (Windows)	BES Inventory and License Test	<none>	<none>
Not Activated	Application Information (SIX)	BES Inventory and License Test	<none>	<none>
Not Activated	Application Information (H4-LX)	BES Inventory and License Test	<none>	<none>

基本的なグラフには、「通常」と「履歴」の 2 種類があります。

1. リンクをクリックして、新規グラフを作成します。1 つのレポートに複数のグラフを付加できます。
2. 履歴グラフのタイトルを入力し、「**グラフの作成**」をクリックします。

Configure Chart

Title: Analysis History

Time Span

Start date: End date:

Earliest Date: Latest Date:

12:00 AM 12:00 AM

Group By: Hour Day Week

Create Chart Cancel

3. グラフが即時に生成されます。



グラフは、膨大なデータ・リストから単純なグラフィックを抽出できるため、多忙な管理者にとって非常に便利です。

電子メールのセットアップ

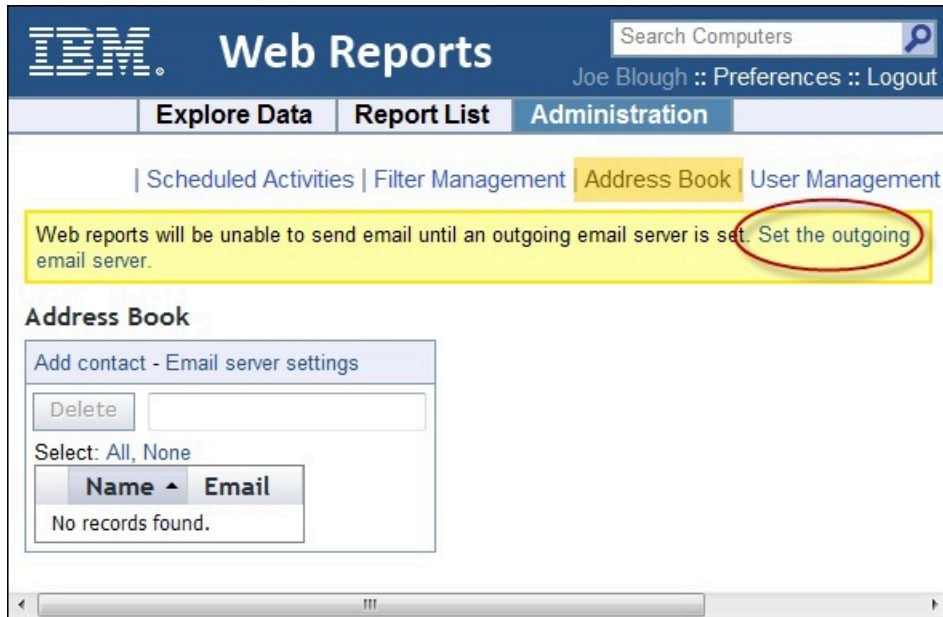
一般的なニーズの1つは、レポートをオペレーターまたは管理者にメールで送信することです。こうすると、オペレーターまたは管理者は、時間に余裕のあるときに BigFix ネットワークのさまざまな側面を簡単に調べることができます。以下のように電子メール・アカウントおよびサーバーをセットアップします。

1. 上部にあるタブ・バーから「管理」をクリックします。



2. サブタブから「アドレス帳」をクリックします。

3. 送信 SMTP サーバーをまだ設定していない場合は、このことを知らせる黄色のメッセージ内のリンクをクリックします。



4. SMTP サーバー名を入力します。

(オプション) SMTP サーバーで認証が必要な場合は、SMTP サーバーのユーザー名およびパスワードを入力します。使用される認証方式は以下のとおりです。

- PLAIN
- ログイン
- DIGEST-MD5
- CRAM-MD5

指定されたユーザー名とパスワードは、EmailServerUser および

EmailServerPassword という名前の Web レポート設定にそれぞれ保存されます。

FIPS モードの場合、次の認証方式を使用するように SMTP サーバーを構成することはできません。

- CRAM-MD5 のみ
- DIGEST-MD5 のみ
- CRAM-MD5 と DIGEST-MD5 のみ

SMTP サーバー・ポートを入力します。値は 1 から 65535 の間でなければなりません。パッチ 10 にアップグレードする前は、この値はハードコード化され、25 に設定されていました。

SMTP 接続を TLS にアップグレードするかどうかを、関連するチェック・ボックスにチェックを付けることで指定します。

SMTP サーバーをテストしてから保存します。

The screenshot shows the IBM Web Reports Administration interface. The 'Administration' tab is selected, and the 'Address Book >> Email Server Settings' page is displayed. The form includes the following fields and controls:

- Email SMTP server:
- Email SMTP server username (optional):
- Email SMTP server password (optional):
- Email SMTP server port:
- Upgrade SMTP to TLS:
- Buttons: Save, Test

5. 「連絡先の追加」というラベルの付いたリンクをクリックして、名前をアドレス帳に追加します。

The screenshot shows the IBM Web Reports Administration interface with the 'Address Book' tab selected. A blue notification bar at the top states 'Successfully updated email server settings.' Below this, the 'Address Book' section is visible, showing a 'Delete' button and a 'Select: All' option. An 'Add Contact' dialog box is open, displaying the following information:

- Name: Joe Blough
- E-mail: Joe@bigcorp.com
- Buttons: Add, Cancel

A mouse cursor is pointing at the 'Add' button in the dialog box.

6. 連絡先の追加を続行します。連絡先をアドレス帳から削除する必要がある場合は、名前の前にあるボックスにチェック・マークを付け、「削除」ボタンをクリックします。

Web レポートからの電子メールの送信をセットアップしました。

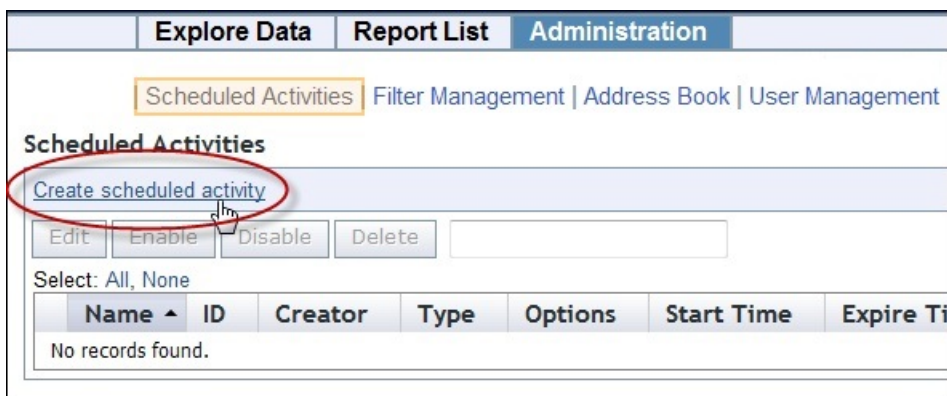
レポートのスケジュールの設定

電子メール・サーバーをセットアップし、アドレス帳に連絡先を取り込んだ後で、レポートをスケジュールし、レポートを自分自身または別のオペレーターに電子メールで送信することができます。

1. 上部にあるタブ・バーから「管理」をクリックします。



2. 「スケジュール・アクティビティー」をクリックし、「スケジュール・アクティビティーの作成」リンクをクリックして、カスタム・イベントを作成します。



3. リンク先のページで、イベントのトリガーを作成し、トリガーするアクションを指定することができます。

4. 開始時刻のデフォルトは現在の時刻です。多くの場合、この値をそのまま使用できます。
5. 「レポート言語」からレポートの言語を選択します。
6. 以下のセクションに入力します。
 - a. 「アクティビティ・レポート」セクションでは、スケジュールするレポートおよびそのフォーマットを選択します。プルダウン・メニューから、必要なレポートを選択します。
 - b. 「アクティビティ・トリガー」セクションでは、イベントをトリガーする方法を指定します。最も一般的な手法は、レポート (またはその他のアクティビティ) をトリガーする期間 (毎日または毎週など) を設定することです。しかし、他にも多くの便利な方法を使用してレポートをトリガーできます。これらの方法については、本書で後ほど説明します。
 - c. 「アクティビティ・アクション」セクションでは、トリガーするアクションを選択します。

Activity Actions:

Email [Edit]

To: joe@bigcorp.com

Joe Blough <joe@bigcorp.com>
 Ken <ken@bigcorp.com>
 May <may@bigcorp.com>
 Scott <scottcha@roadrunner.com>
 Sue <sue@bigcorp.com>

From: Joe Blough
 Subject: [BES System] Report Notification
 BigFix Weekly Report

Text:

Include report output
 Include link to current report
 Include link to archive report

通常、オプションは、レポートの電子メールでの送信のみです。これを行うには、「電子メール」チェック・ボックスをクリックし、アドレス帳から連絡先を追加し、電子メールで送信するレポートの件名行を設定します。

7. 完了したら、「送信」をクリックします。

これで、スケジュールどおりに送信またはアーカイブされるようにレポートおよびアラートをセットアップできます。

データ・ソースの追加

他の BigFix データ・ソースをレポートに追加できます。これにより、それぞれに数千台のコンピューターがある数百のオフィスを対象とする集計レポートを作成できます。Web レポート・サーバーで異なる FXF エンコード方式が使用されているデータ・ソースは集約できないことに注意してください。

集約データ・ソースのスキーマ・バージョンが同一であることを確認してください。以下の照会を実行することによって、すべての BFENT データベースのスキーマ・バージョンを確認できます。

```
select version from dbo.DBINFO
```


データ・ソースを追加するには、マスター・オペレーターの認証情報を指定する必要があります。これらの認証情報は、データ・ソースごとに 1 回のみ必要であり、保存されません。

新しいデータ・ソースを追加するには、以下の手順を実行します。

1. 管理者としてログインします。
2. 「管理」 > 「データ・ソース設定」 > 「新しいデータ・ソースの追加」 を選択します。



3. 「データ・ソースの追加」 ページが表示されます。

The screenshot shows the 'Add New Datasource' form. It has a blue header with the IBM logo and 'Web Reports'. Below it, a navigation bar has 'Administration' selected. A secondary navigation bar lists 'Scheduled Activities', 'Filter Management', 'Address Book', 'User Management', 'Datasource Settings' (highlighted with a red box), and 'Errors'. Below the navigation bar, there's a link: 'Tivoli Endpoint Manager Support provides additional information on how to configure datasources for aggregation.' The form itself has three main sections: 'Datasource Name:' with a text box containing 'Tokyo'; 'URL [?]:' with a text box containing 'tokyo.mycompany.org:52311'; and 'Master Operator Credentials [?]' with sub-fields for 'Username:' containing 'john_doe' and 'Password:' containing masked characters. At the bottom left, there are 'Submit' and 'Cancel' buttons.

データ・ソースの記述名を「データ・ソース名」に入力します。

4. 接続先にするルート・サーバーの URL を入力します。URL には、適切なポート番号も含める必要があります。
5. 「マスター・オペレーターの認証情報」を入力します。これらの認証情報は、1 回のみ使用され、保存されません。

データ・ソースの編集

データ・ソースを編集するには、以下の手順を実行します。

1. 管理者としてログインします。
2. 「管理」 > 「データ・ソース設定」 > 「編集」 を選択します。



3. 「データ・ソースの編集」 ページが表示されます。



接続先にするルート・サーバーの URL を入力します。URL には、適切なポート番号も含める必要があります。

注: データ・ソースの名前は変更できません。

4. URL を変更する場合は、マスター・オペレーターの認証情報を入力します。
5. 完了したら、「送信」をクリックします。

環境設定の変更

Web レポート・インターフェースの右上には、「環境設定」リンクがあります。



ユーザーの個人環境設定を編集するには、これをクリックします。

User Preferences

[Change password](#)

Splash page:

Number of results per page (10-1000):

Developer mode (disables automatic loading of custom reports)

1. プルダウン・メニューから新規ページを選択して、スプラッシュ・ページを変更します。開始スプラッシュ・ページに表示されるレポートを、デフォルトの「ドメイン・リスト」を含むレポートのリストの中から選択できます。
2. 通常、レポートを表示するときの行数は、1 ページあたり 50 行に制限されます。ここでその数を変更できます。
3. 開発モードでの実行のボックスにチェック・マークを付けて、カスタム・レポートの自動読み込みを無効にすることができます。
4. 「保存」をクリックして、環境設定を変更します。

Web レポートでの FIPS 暗号化の有効化

Web レポートがインストールされたら、FIPS 暗号化を使用して暗号化を行うように Web レポート・サーバーをセットアップすることができます。

FIPS 暗号化を有効にするには、以下の手順を実行します。

1. 「BigFix 管理」ドメインから、「コンピューター管理」フォルダーを開き、「コンピューター」ノードをクリックします。
2. Web レポート・サーバーを実行しているコンピューターを選択します。

3. 右クリック・コンテキスト・メニューから、「**コンピューター設定の編集**」を選択します。
4. 「**設定の編集**」ダイアログから「**追加**」をクリックします。
5. 「**カスタム設定を追加**」ダイアログで、設定名を次のように入力します。

_BESClient_Cryptography_FipsMode


この設定の値は、以下のとおりです。

必要な

クライアントが FIPS 暗号化を使用して暗号化を行うようにします。

なし

FIPS 暗号化は使用されません。

 **注:** クライアント設定 **_BESClient_Cryptography_FipsMode** は BES クライアントと Web レポート・コンポーネントのマストヘッドで指定した FIPS 設定を上書きします。値を「**なし**」に設定すると、BES クライアントと Web レポート・コンポーネントは FIPS ライブラリーを使用しません。値を **required** に設定すると、FIPS ライブラリーを使用します。

6. 「**OK**」をクリックして値を受け入れ、再度「**OK**」をクリックして設定を完了します。設定アクションを適用するには、秘密鍵パスワードを入力する必要があります。

ログインのロックアウトの設定

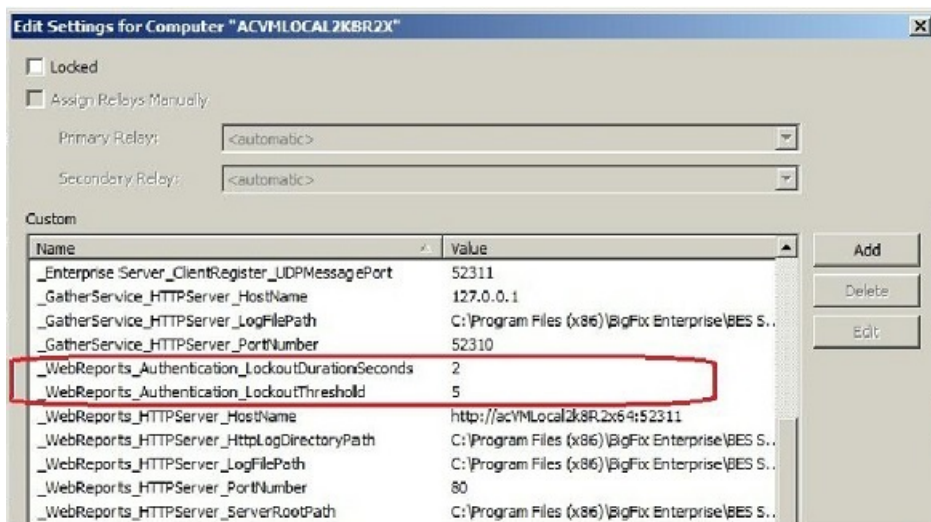
許可される無効な Web レポート・ログイン試行の回数を設定できます。この回数を超えると、アカウントがロックアウトされます。

ロックアウトされた場合は、ロックアウト期間が経過するまで待機してから、再度ログインを試行してください。

ロックアウトを設定するには、以下の手順を実行します。

1. ドメイン・パネルのナビゲーション・ツリーで「**コンピューター**」アイコンをクリックして、クライアント・コンピューターのリスト・パネルを開きます。
2. Web レポートのログインのロックアウトを設定するコンピューターを選択します。

3. 右クリックし、ポップアップ・メニューから「**コンピューターの設定を編集**」を選択します (または「**編集**」メニューから「**コンピューターの設定を編集**」を選択します)。「設定の編集」ダイアログが開きます。



4. 以下のキーワードを編集して、ロックアウト設定を変更します。

_WebReports_Authentication_LockoutThreshold

ユーザーがロックアウトされるまでに許容される無効なパスワード試行の回数。デフォルト値: 5

_WebReports_Authentication_LockoutDurationSeconds

ロックアウトしきい値に達した後に、ユーザーがロックアウトされる秒数。デフォルト値: 30

注: すべてのユーザーのロックアウト状態をリセットするには、Web レポート・サービスを再始動します。

第 3 章. 探査中

プログラムの「データの検索」セクションを使用すると、BigFix ネットワーク全体から収集したデータを表示し、データをフィルタリングし、レポートを作成できます。左上にある「データの検索」タブをクリックします。



ネットワークの状態を素早く確認できます。プログラムのこのセクションでは、グラフおよびレポートの両方を使用して、データを即時に視覚化できます。また、データ・セットが膨大な場合でも、データをフィルタリングして、簡潔で有用な情報を抽出できます。

カスタム・ビューを記録できます。いつでも「レポートを保存」ボタンを押して、フィルター、グラフ、およびレイアウトを保存できます。保存されたレポートは、「レポート一覧」に追加されます (レポート一覧は、すぐ右側にあるタブで使用できます)。こうしておくことで、カスタム・テンプレートを再使用して、ネットワークについての独自の情報内容を任意の時点で素早く取得できます。

データを検索するためのいくつかのオプションがあります。これらは、このページ上のサブタブに対応します。

- **コンピューター:** このオプションを使用すると、ネットワーク接続された BigFix クライアントのプロパティを調査し、リストをフィルタリングして、ある条件に特化したレポートを作成できます。
- **コンテンツ:** このオプションを使用すると、Fixlet メッセージ、ベースライン、タスク、および分析に基づいてコンテンツを調査し、条件が限定されたレポートを作成できます。
- **アクション:** このオプションを使用すると、ネットワーク内の任意の BigFix クライアント上で実行されたアクションをリストし、そのレポートを作成できます。
- **オペレーター:** このオプションを使用すると、BigFix オペレーターのサブセットをリストできます。
- **非管理資産:** このオプションを使用すると、プリンター、スキャナー、FAX などのすべての非管理資産の状態を調査できます。

- **カスタム:** このオプションを使用すると、フリー・フォームのリストおよびレポートを作成できます。

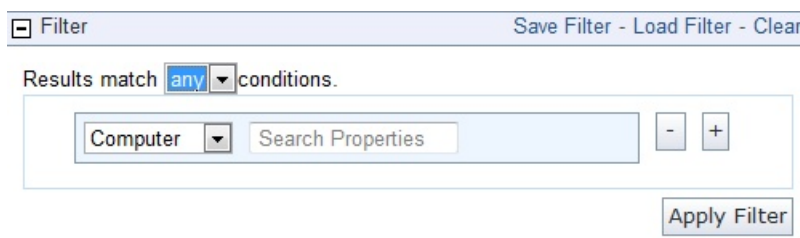
これらのオプションについては、このセクションで後ほど説明します。ただし、これらのオプションの多くは、Web レポートの中核的な利便性を代表する機能を共通して備えています。これらについては、以下のセクションで説明します。

フィルター

フィルターは、多くのレポートで重要な役割を果たします。一度にデータの 1 つの側面のみを表示できます。データ・フィールドを個別にフィルタリングして、表示されるデータを制限できます。この手法は、ファセット・ナビゲーション方式の 1 つであり、膨大なデータ・セットの量を削減して簡単に扱えるようにする強力な方法です。

「フィルター」インターフェースは、どこで表示される場合でもほとんど同じです。このセクションは、強力で効果的なフィルターを設計するために必要な情報について重点的に説明しており、本書の他の部分でも触れられます。

デフォルトのフィルターでは何も指定されないため、すべてのデータ・レコードがリストされます。



データのサブグループを表示するには、メニューをプルダウンして、「**コンピューター**」、「**コンテンツ**」、「**サイト**」、または以前に保存されているフィルターによってフィルタリングします。この選択項目により、フィルターの 2 次フィールドが決定します。例えば、特定のオペレーティング・システムがインストールされているコンピューターを表示できます。「**検索プロパティ**」というラベルの付いたボックス内でクリックし、「OS」と入力します。システムがプロパティを収集し、OS プロパティの存在を検査している間、動作が一時停止することがあります。

Filter Save Filter Load Filter Clear

Results match **all** conditions.

Computer OS contains win X

or contains linux X **add clause** - +

Apply Filter

フィルターに条件を追加するには、「**条件を追加**」というラベルの付いたリンクをクリックします。これらの条件を削除するには、それぞれに対応する「X」をクリックします。新規フィルターを追加するには、フィルターの右側にある正符号をクリックします。

Filter Save Filter Load Filter Clear

Results match **all** conditions.

Computer OS contains win X

or contains linux X **add clause** - +

and Computer CPU contains core **add clause** - +

Apply Filter

これらのフィルターは、「**すべて**」条件を選択した場合には論理積演算されます。「**いずれか**」条件を選択した場合には論理和演算されます。セットからフィルターを削除するには、フィルターの横の負符号をクリックします。

カスタム・フィルターがその後のコンピューター・レポートおよびグラフにどのように影響するかを確認するには、「**フィルターの適用**」ボタンをクリックします。

定義した後で、作業内容をカスタム名前付きフィルターとして保存する場合は、右上にある「**フィルターを保存**」リンクをクリックします。後で「**フィルターの読み込み**」リンクをクリックするか、これを条件プルダウン・メニューから選択すると、他の機会にこのフィルターを使用できます。

チャート

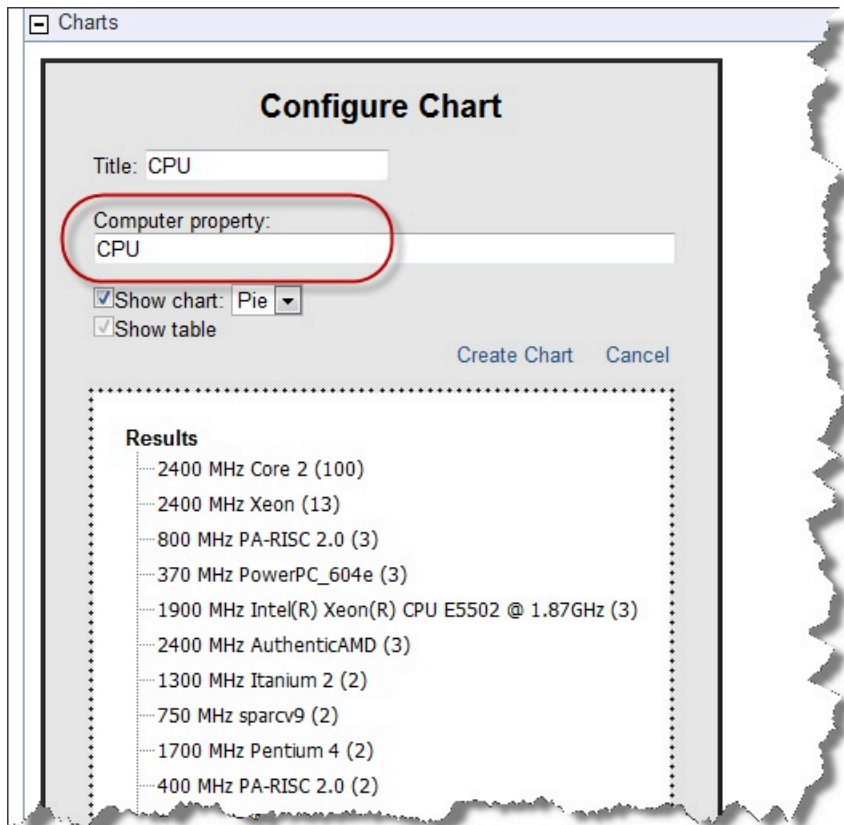
多くのレポートには、データを要約するグラフが含まれます。グラフは、詳細なリストの中に隠されている重要なトレンドを明確にするために役立ちます。データに応じて、マウ

スを数回クリックするだけで円グラフ、棒グラフ、または履歴トレンド・シートを作成できます。

グラフが使用可能な場合、インターフェースは「フィルター」インターフェースのすぐ下にあります。「**グラフの追加**」リンクをクリックします。



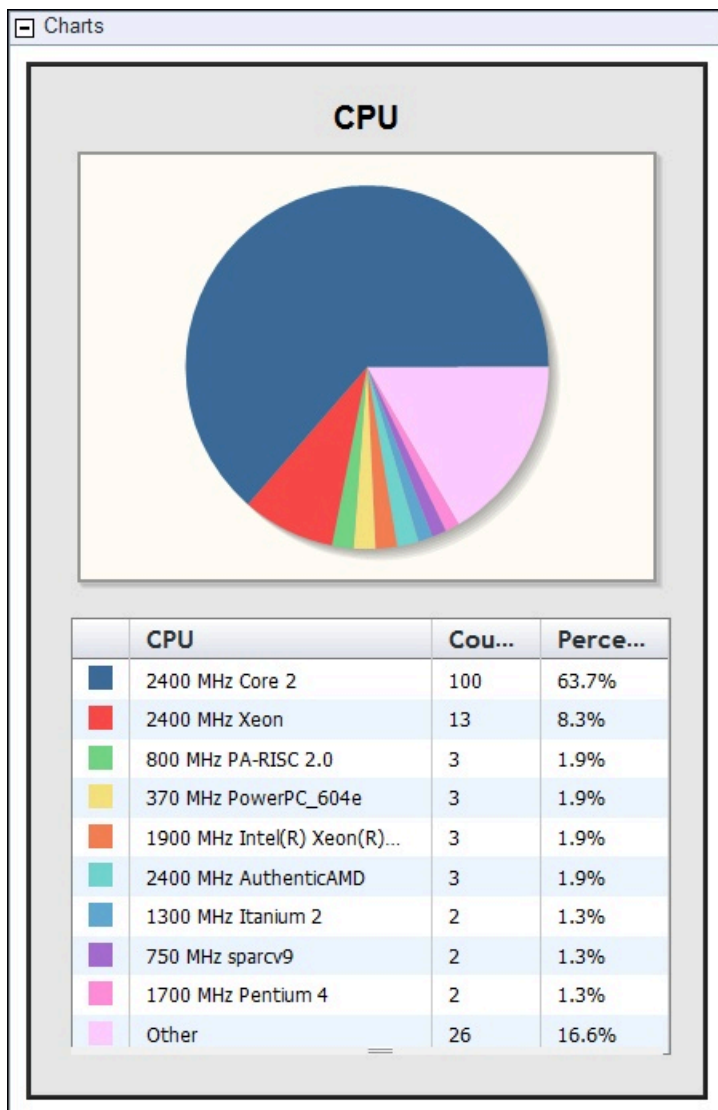
グラフ・ウィザードでは、対象のデータ・セットに応じて、適切なデフォルト・セットアップを実行します。コンピューターについてのグラフでは、ウィザードは、コンピューターのプロパティの入力を要求します。



ここでは、プルダウン・メニューを使用して、ネットワーク上の CPU についてのグラフを作成します。タイトルは、選択されたコンピューターのプロパティを反映して、自動的に入力されます。必要な場合には変更できます。標準的なグラフでは、その下にテーブルが表示されます。チェック・ボックスを使用して、グラフ、テーブル、またはその両方のどれを表示するかを指定します。

デフォルトの円グラフをそのまま選択しましたが、代わりに棒グラフを選択することも可能でした。ウィザードの下部にある点線で囲まれた枠の中で、レコードをグループ化して、データに対する追加の指示を与えることができます。

準備ができたなら、「**グラフの作成**」リンクをクリックします。



このグラフは、プルダウン・メニューから単一の項目 (CPU) を選択するだけで作成されました。

グラフの上にマウスを移動すると、ツールバーが表示されます。

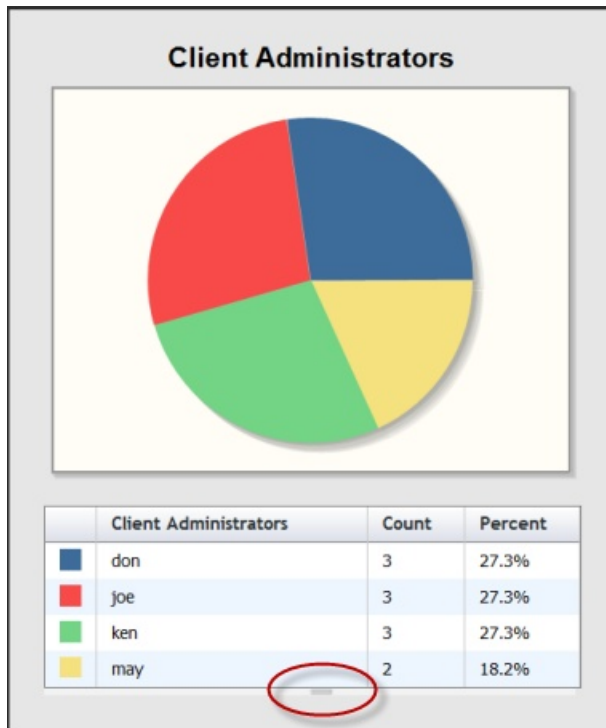


一番上のアイコンでは、現在のグラフを削除できます。レンチのアイコンでは、グラフを編集できます。

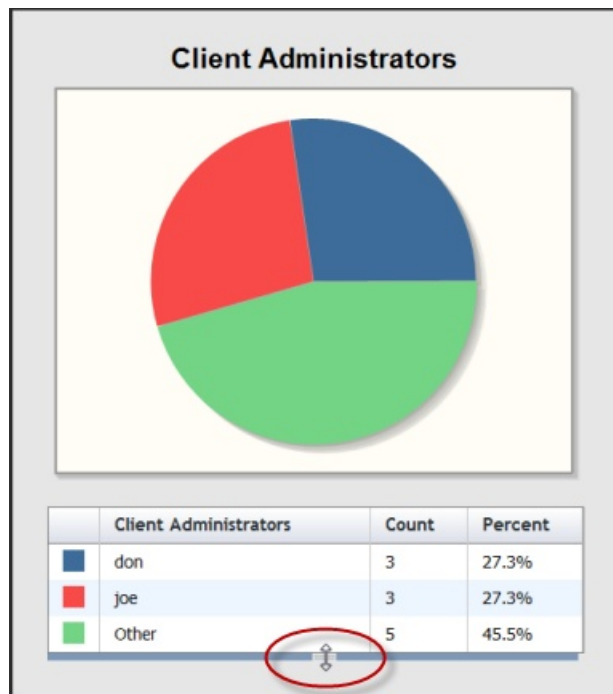
注: 作成後にグラフを移動させることはできません。

テーブルの省略

グラフが完成した後で、最後にもう 1 つの編集オプションを使用できます。リストの下部にある小さいハンドルを上下にドラッグして、リストの特定の項目を切り捨てることができます。



リストを変更すると、切り捨てられた項目が「その他」カテゴリーに合計され、変更を反映するようにグラフが動的に更新されます。



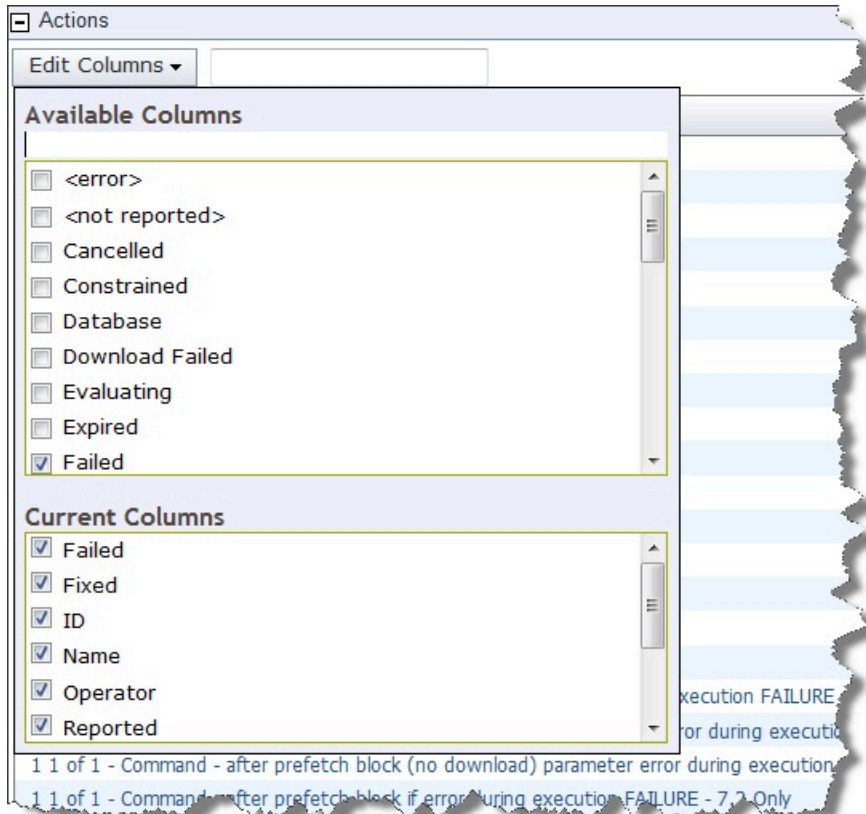
ここでは、Ken と May が省略され、「その他」カテゴリーに合計されます。UI の上部にあるリンクをクリックして、「**グラフの追加**」を続行できます。

列形式のレポート

このセクションは、「グラフ」セクションのすぐ下にあり、検討対象のデータ・セットの名前（「コンピューター」、「コンテンツ」、「アクション」など）が付けられます。

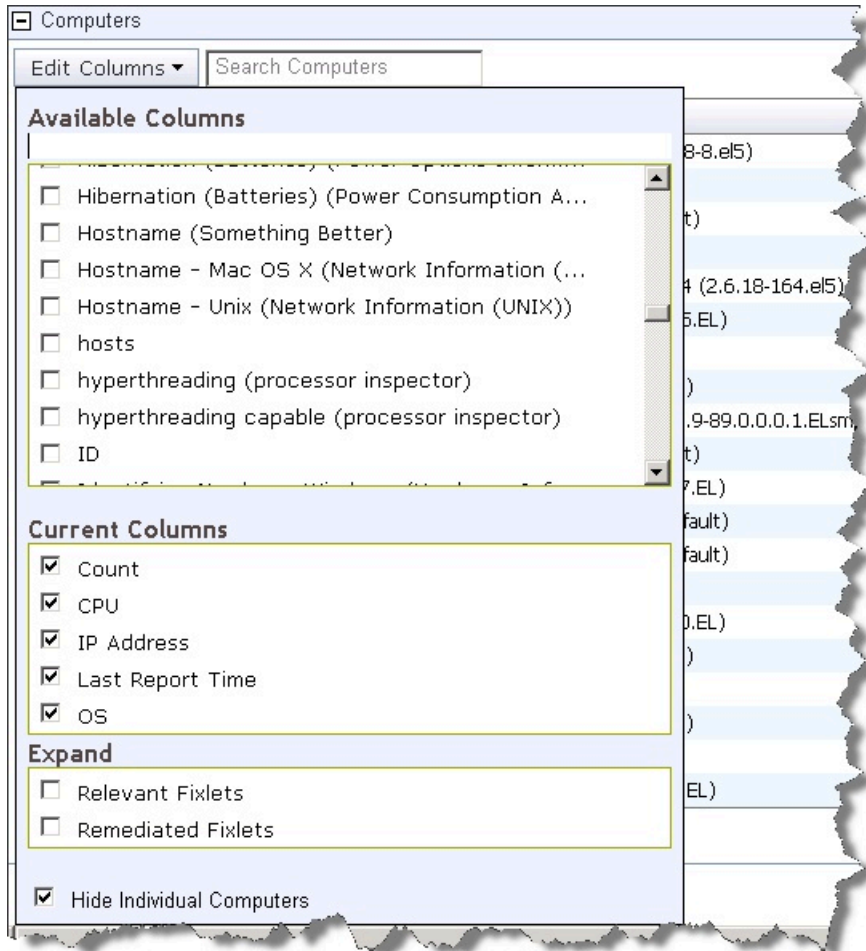
列の編集

「**列の編集**」ボタン（列形式のビューおよびレポートの上部にあります）をクリックして、レポート内に表示する列を変更します。列ヘッダーのメニューが表示されるので、ここで列を追加および削除して、最も少ない数の列で最も有用な情報を示すレポートを作成できます。



これは「アクション」レポートの例であるため、すべてのヘッダーは、「アクション」データベース内のフィールドを参照しています。「使用可能な列」ボックス内の項目にチェック・マークを付けると、その項目が「現在の列」ボックスに追加されます。項目をクリアすると、両方のボックス内でクリアされます。通常、「現在の列」ボックスのリストのほうが短く、ここで列のレイアウトを一目で確認できるため、「使用可能な列」の長いリストをスクロールしなくても済みます。

列のオプションは、何を表示するかによって異なります。「コンピューター」の場合は、より多くの列が使用可能です。



「展開」セクションを使用すると、関連する Fixlet メッセージまたは修正された Fixlet メッセージを「コンピューター」リストに追加できます。「個々のコンピューターを非表示」というチェック・ボックスがあり、これを選択すると、個々のコンピューター名の代わりにコンピューター数がリストされます。

「コンテンツ」の「展開」セクションを使用すると、適用可能なコンピューターおよび修正されたコンピューターをリストに追加できます。

列順序の変更

レポート内の列の順序を変更するには、列をクリックし、移動先の場所までドラッグします。列をドラッグすると、有効なターゲットが赤い線で示されます。

Operator	ID	Fixed	Failed	Source Site
joe	00-42	1	0	BES Support
joe	00-74	1	0	BES Support
joe	00-44	1	0	Master Action Site (TESTING)
joe	00-82	3	0	Master Action Site (TESTING)
joe	00-85	3	0	Master Action Site (TESTING)
joe	00-97	1	0	Master Action Site (TESTING)

<< first < prev Showing items 1 - 6 of 6 next > last >>

列の編集および移動は、データの検討や列形式のレポートの表示を行っている際に実行できるため、特定のニーズに合わせて出力をカスタマイズできます。変更内容を保持するには、完了後にレポートを保存します。

「コンピューター」

「コンピューター」タブをクリックして、デフォルトの「コンピューター」レポートを表示します。

Computer Name	IP Address	OS	CPU	Last F
2K8R2	192.168.2.110	Wn2008R2 6.1.7600	1900 MHz Intel(R) Xeon(R) CPU E5502 @ 1.87GHz	Wedne
EMSP TDC01	192.168.107.197	Wn2003 5.2.3790	2400 MHz Xeon	Wedne
fc40x86.ipv6bigfix.com	<none>	Linux Fedora Core 4 (2.6.11-1.1369_FC4)	2400 MHz Core 2	Wedne
ipv6ab51	192.168.2.101	AIX 5.1	370 MHz PowerPC_604e	Wedne
ipv6ab52.bigfix.com	192.168.2.102	AIX 5.2	370 MHz PowerPC_604e	Wedne
ipv6ab53.bigfix.com	192.168.2.103	AIX 5.3	370 MHz PowerPC_604e	Wedne
localhost.localdomain	10.3.10.123	Linux Red Hat Enterprise Server 5.4 (2.6.18-164.el5)	2400 MHz Core 2	Wedne
qaax52-1	192.168.107.115	AIX 5.2	400 MHz PowerPC_POWER3	Wedne
qaax61-1	192.168.107.251	AIX 6.1	1500 MHz PowerPC_POWER5	Wedne
qaax61-3	192.168.2.104	AIX 6.1	1700 MHz PowerPC_POWER5	Wedne
QABES	192.168.104.37	Wn2003 5.2.3790	2700 MHz Xeon	Wedne
QABES-EXTRELAY	10.10.10.90	Wn2003 5.2.3790	2400 MHz Xeon	Wedne

このページには、3つのセクションがあります。

- **フィルター**: フィルターを指定して、データベースの特定のサブグループのみを表示します。メニューをプルダウンして、「コンピューター」、「コンテンツ」、「サイト」、または以前に保存されているフィルターによってフィルタリングします。この選択項目により、フィルターの2次フィールドが決定します。例えば、指定されたプロパティを持つコンピューターのみを表示できます。

フィルターに条件を追加するには、「**条件を追加**」というラベルの付いたリンクをクリックします。これらの条件のいずれかを削除するには、「**X**」をクリックします。新規フィルターを追加するには、フィルターの右側にある正符号をクリックします。これらのフィルターは、「**すべて**」条件を選択した場合には論理積演算されます。「**いずれか**」条件を選択した場合には論理和演算されます。セットからフィルターを削除するには、負符号 (-) をクリックします。カスタム・フィルターがその後のコンピューター・レポートおよびグラフにどのように影響するかを確認するには、「**フィルターの適用**」ボタンをクリックします。

定義した後で、作業内容をカスタム名前付きフィルターとして保存する場合は、右上にある「**フィルターを保存**」リンクをクリックします。後で「**フィルターの読み込み**」リンクをクリックすると、他の機会にこのフィルターを使用できます。

- **グラフ**: 標準的なコンピューターのグラフは、円グラフまたは棒グラフです。[チャート \(##### 40\)](#)セクションで説明したように、任意のコンピューターのプロパティを選択してグラフ化できます。
- **コンピューター**: このセクションには、レポートのデータが含まれます。[列形式のレポート \(##### 44\)](#)セクションで説明したように、ニーズに応じて列を編集および再配列できます。

コンテンツ

「コンテンツ」タブをクリックして、デフォルトの「コンテンツ」ビューを表示します。

Progress	Name	Type	Sitename
No Applicable Computers	..xauthority file permissions - ADX 6.1	Fixlet	SCM Checklist for DISA STIG on ADX 6.1 Dev
No Applicable Computers	..xauthority file permissions - Redhat 5	Fixlet	SCM Checklist for DISA STIG on RHEL 5 Dev
No Applicable Computers	/etc/cron.allow Permissions - ADX 6.1	Fixlet	SCM Checklist for DISA STIG on ADX 6.1 Dev

BigFix のコンテンツは、Fixlet メッセージ、タスク、分析、およびベースラインから構成されています。必要な場合には、これらのカテゴリーを分離するフィルターを作成できます。例えば、「**コンテンツ・タイプがFixlet**」など。

すべての標準的なビューおよびレポートと同様に、列ヘッダーをクリックして、データをソートできます (ソートの方向を変更するには、再度クリックします)。表示する列の編集、フィルターの設定、およびグラフの作成を行うこともできます。

アクション

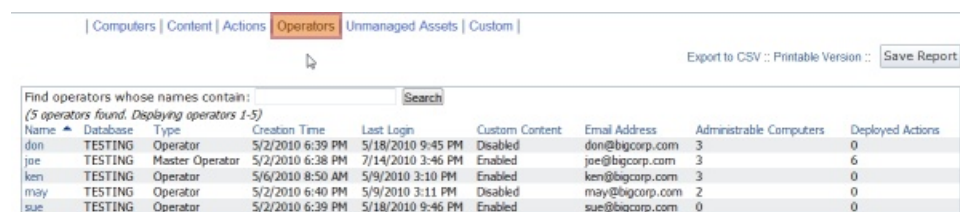
「アクション」タブをクリックして、デフォルトの「アクション」ビューを表示します。

Name	ID	Status	Source Type	Source Site
Change Multiple Settings	00-44	Expired	Custom	Master Action 5
Enable Application Usage Tracking: Adobe Acrobat	00-82	Expired	Custom	Master Action 5
Enable Application Usage Tracking: Microsoft Outlook	00-85	Expired	Custom	Master Action 5

アクションは、Fixlet またはタスク内で「アクション」リンクをクリックすると実行されます。アクションは、BigFix ネットワーク全体を通じて伝達され、実行中には「オープン」状態を示すマークが付けられます。アクションは、停止されたり、有効期限が切れたりすることもあります。標準的なビューには状態が含まれるため、アクションの進行状況を一定期間にわたって監視できます。

演算子

「オペレーター」タブをクリックして、デフォルトの「オペレーター」ビューを表示します。

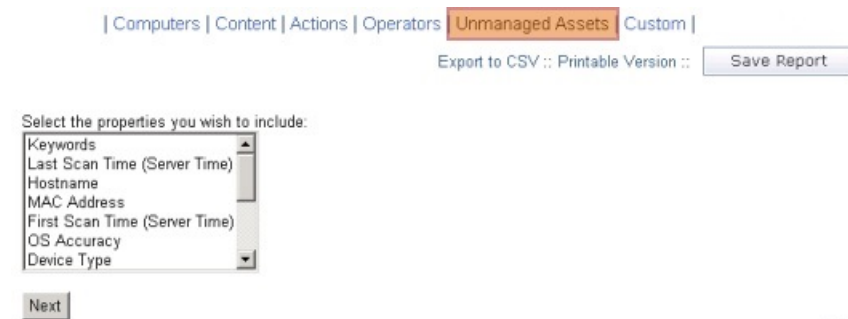


Name	Database	Type	Creation Time	Last Login	Custom Content	Email Address	Administrable Computers	Deployed Actions
don	TESTING	Operator	5/2/2010 6:39 PM	5/18/2010 9:45 PM	Disabled	don@bigcorp.com	3	0
joe	TESTING	Master Operator	5/2/2010 6:38 PM	7/14/2010 3:46 PM	Enabled	joe@bigcorp.com	3	6
ken	TESTING	Operator	5/6/2010 8:50 AM	5/9/2010 3:10 PM	Enabled	ken@bigcorp.com	3	0
may	TESTING	Operator	5/2/2010 6:40 PM	5/9/2010 3:11 PM	Disabled	may@bigcorp.com	2	0
sue	TESTING	Operator	5/2/2010 6:39 PM	5/18/2010 9:46 PM	Enabled	sue@bigcorp.com	0	0

「オペレーター」リストは非常に単純で直観的です。BigFix 環境のすべてのオペレーターのリストがあり、それぞれのタイプおよび管理権限が表示されます。このリストを編集することはできませんが、オペレーターの名前でフィルタリングすることはできます。

非管理資産

「非管理資産」タブをクリックして、ネットワーク内の非管理資産を表示します。



Select the properties you wish to include:

- Keywords
- Last Scan Time (Server Time)
- Hostname
- MAC Address
- First Scan Time (Server Time)
- OS Accuracy
- Device Type

Next

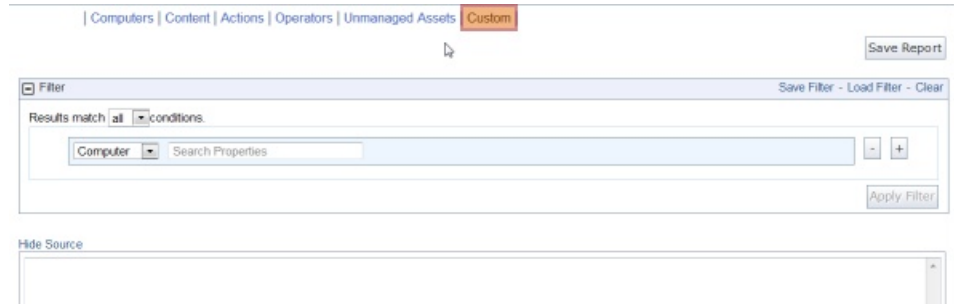
ネットワーク内の非管理資産が表示されたら、表示したいプロパティをクリックできます。Shift キーまたは Ctrl キーを押しながらクリックすることもできます。レポートを表示するには、「次へ」をクリックします。

Asset ID	Database Name	Source Name	Running Client	Device Type	IP Address	MAC Address	OS
281	qabes	NMAP	no	general purpose	192.168.105.78	00:08:D8:75:B2:5F	Linux 2.6.17 - 2.6.20
282	qabes	NMAP	no	general purpose	192.168.105.79	00:18:8B:77:EE:6F	Microsoft Windows Server 2003 SP1 or SP2

「非管理資産」レポートは、元のプロパティ・リスト内での選択項目を除いて、カスタマイズできません。

カスタム

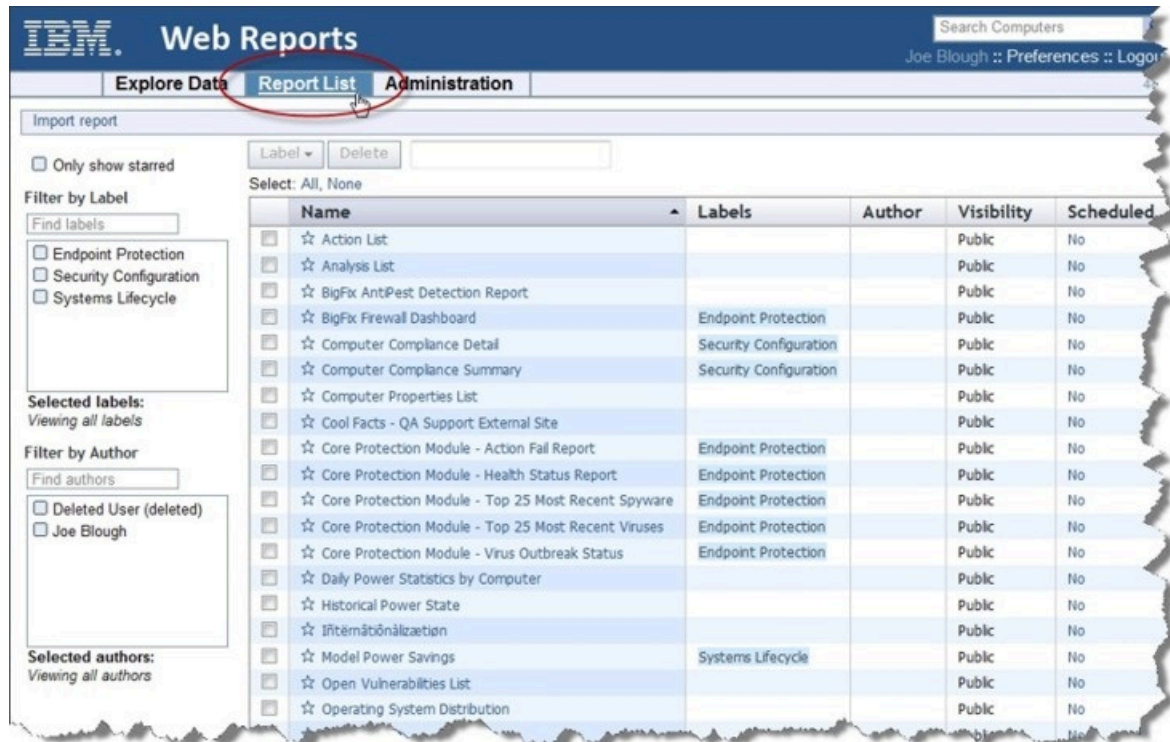
「カスタム」タブをクリックして、新規レポートを最初から作成します。



カスタム・レポートについて詳しくは、『付録』セクションの[カスタム・レポートの作成 \(\(ページ\) 85\)](#)を参照してください。独自のカスタム・レポートを作成するための詳しい方法については、本書では説明しません。「[セッション・インスペクター・ガイド](#)」と「[Web レポートおよびカスタム・レポート](#)」を参照してください。

第 4 章. レポート

プログラムの「レポート一覧」セクションには、上部にあるタブ・バーから該当するタブをクリックしてアクセスします。



The screenshot shows the IBM Web Reports interface. The 'Report List' tab is selected and highlighted with a red circle. The interface includes a navigation bar with 'Explore Data', 'Report List', and 'Administration' tabs. Below the navigation bar, there is a search bar for computers and a user profile for Joe Blough. The main content area features a table of reports with columns for Name, Labels, Author, Visibility, and Scheduled. The table lists various reports such as 'Action List', 'Analysis List', and 'BigFix AntPest Detection Report'. On the left side, there are filters for labels and authors, including options for 'Endpoint Protection', 'Security Configuration', and 'Systems Lifecycle'.

Name	Labels	Author	Visibility	Scheduled
☆ Action List			Public	No
☆ Analysis List			Public	No
☆ BigFix AntPest Detection Report			Public	No
☆ BigFix Firewall Dashboard	Endpoint Protection		Public	No
☆ Computer Compliance Detail	Security Configuration		Public	No
☆ Computer Compliance Summary	Security Configuration		Public	No
☆ Computer Properties List			Public	No
☆ Cool Facts - QA Support External Site			Public	No
☆ Core Protection Module - Action Fail Report	Endpoint Protection		Public	No
☆ Core Protection Module - Health Status Report	Endpoint Protection		Public	No
☆ Core Protection Module - Top 25 Most Recent Spyware	Endpoint Protection		Public	No
☆ Core Protection Module - Top 25 Most Recent Viruses	Endpoint Protection		Public	No
☆ Core Protection Module - Virus Outbreak Status	Endpoint Protection		Public	No
☆ Daily Power Statistics by Computer			Public	No
☆ Historical Power State			Public	No
☆ Internationalization			Public	No
☆ Model Power Savings	Systems Lifecycle		Public	No
☆ Open Vulnerabilities List			Public	No
☆ Operating System Distribution			Public	No

このページのいくつかの部分で、使用可能なレポートの表示をカスタマイズできます。

「レポート一覧」メイン・ページ

Import Report

「レポート一覧」ページの上にあるリンクを使用すると、レポートをインポートできます。新規パネルが開くので、ここで、インポートするレポートを参照したり、フォーマットと表示設定を指定したりできます。

Import Report

[Click here to check for new custom reports on the Tivoli Endpoint Manager Support web site.](#)

Filename:

Format: XML (*.beswrpt / *.webreport)
 HTML (*.ojo / *.besrpt)

Visibility: Public
 Private

- 「**ファイル名**」のテキスト・ボックスにファイル名を入力するか、ファイル・ブラウザを使用してレポートを探すことができます。
- 「**XML**」または「**HTML**」ファイルを入力できます。
- インポートされるファイルは、自分だけが表示できる「**プライベート**」ファイル、または誰でも使用できる「**パブリック**」レポートとして処理できます。
- 「**インポート**」ボタンをクリックして、選択されたレポートを読み込みます。

星印付きのみを表示

レポート一覧を星印付きレポートのみに制限するには、このボックスをクリックします。レポートを星印付きに設定するには、一覧内のレポート名の横の白抜きの星印をクリックします。星印が黄色で塗りつぶされます。星印を付けるレポートは、任意の枠組みに基づいて選択できます。多くのユーザーは、お気に入りのレポートまたは最もよく使用されているレポートに星印を付けます。レポート一覧全体を表示するには、ボックスのチェック・マークを外します。

ラベルでフィルター

レポートにラベルを付けるには、そのレポートのリンクの前にあるボックスをクリックし、「**ラベル**」プルダウン・メニューを使用して既存のラベルを割り当てます。ラベルでフィルタリングするには、「**ラベルでフィルター**」セクション内の該当するラベルの前にあるボックスをクリックします。複数のラベルを選択できます。ラベルは論理和演算されるため、選択されたラベルが1つでも含まれるレポートが表示されます。

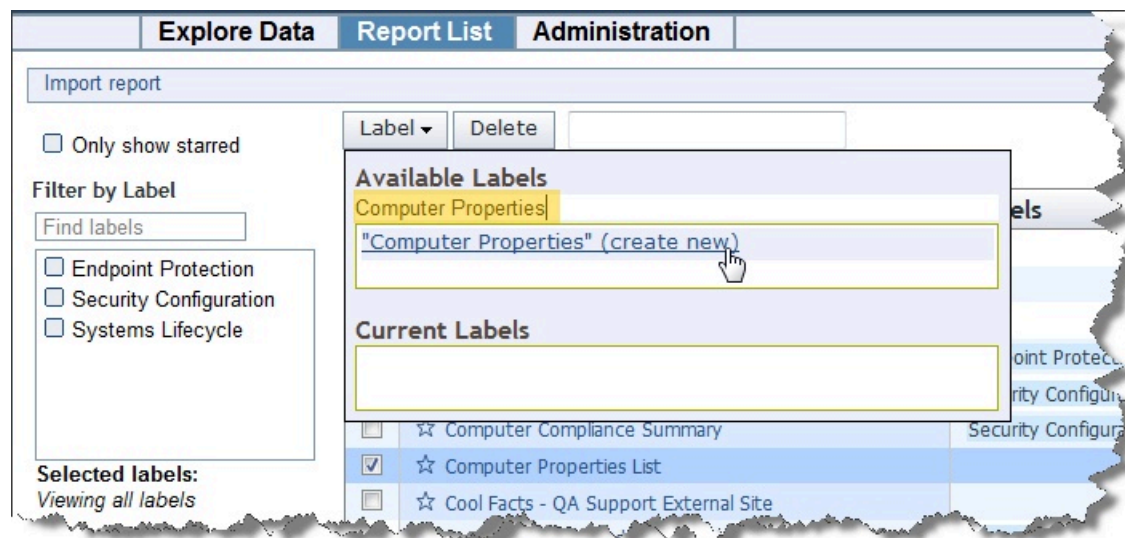
作成者でフィルター

ラベルでフィルタリングするのと同じ方法で、レポート一覧を作成者でフィルタリングできます。有効にする作成者の前にあるボックスをクリックすると、選択された作成者によって作成されたすべてのレポートがリストされます。

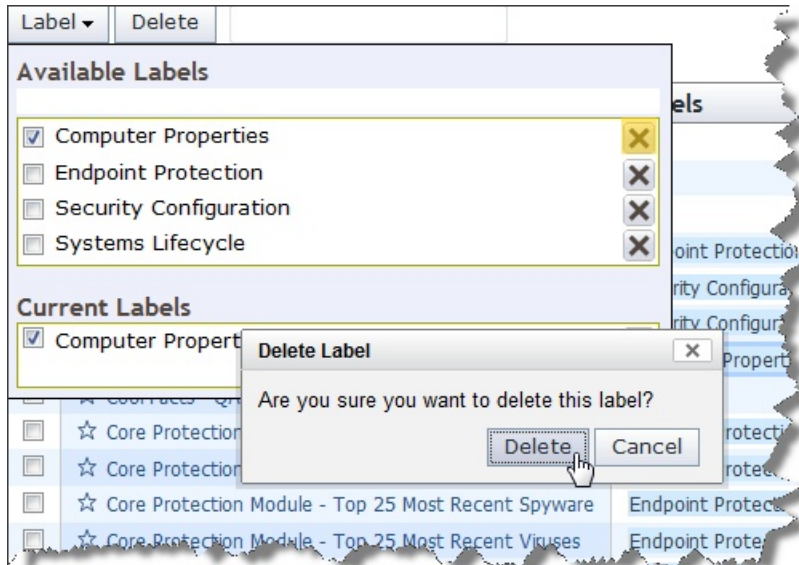
ラベルの追加、作成、および削除

任意のレポート一覧の横のボックスをクリックすると、「ラベル」ボタンが選択可能になります。このプルダウン・メニューから、選択されたレポートに付加するラベルを選択できます。レポートを複数のグループ内で選択できるように、複数のラベルを1つのレポートに追加できます。

新規ラベルを作成するには、既存の名前ではない名前を入力します。名前はリンク・テキストに変換され、下にあるボックス内に表示されます。



リンクをクリックして新規ラベルを作成すると、そのラベルがレポートに適用されます。ラベルを削除するには、ラベルの右側にある「X」ボタンを使用します。



削除

任意のレポート一覧の横のボックスをクリックすると、「削除」ボタンが選択可能になります。これをクリックして、指定されたレポートを一覧から削除します。

メイン・リスト

このリストには、レポートについての情報を示すいくつかの列があります。

- 選択:** この列には、チェック・ボックスがあり、1つの機能を複数のレポートに一度に適用できます。例えば、レポートを削除する場合は、該当するチェック・ボックスをクリックし、「削除」ボタンをクリックします。ラベルをレポートまたはレポートのグループに付加する場合も同様です。
- 星印:** レポート名のすぐ左側にあるこの列には、白抜き星印があります。クリックすると、星印が黄色で塗りつぶされ、レポートが星印付きとして強調表示されます。これらのレポートは、ページの左上にある「星印付きのみを表示」チェック・ボックスをクリックして、フィルタリングできます。
- 名前:** この列は、保存レポートの名前またはタイトルを示します。
- ラベル:** この列は、特定のレポートに割り当てられたラベルを示します。レポートには複数のラベルを割り当てることができ、左側にあるチェック・ボックスを使用すると、レポート一覧をラベルでフィルタリングできます。サイトによって配信された外


部レポートには、ドメイン・ラベルも付加されることがあります。この列には複数のラベルがあるため、列をソートすることはできません。


- **作成者:** この列は、このレポートを作成した Web レポート・ユーザーの名前を示します。
- **「表示設定」:** この列は、レポートがパブリックかプライベートかを示します。レポートの作成者である場合は、この列で、プルダウン・メニューからレポートの状態を変更することもできます。
- **スケジュール済み:** この列は、どのレポートがスケジュール済みかを示します。
- **最終更新日時:** この列は、レポートがその作成者によって最後に変更された日付を示します。

以下の各セクションでは、一般的に使用される個別のレポートについて説明します。

概要レポート

概要レポートには、ネットワークの全般的な状態および BigFix 環境の有効性を視覚的に表すグラフおよびテーブルが含まれています。各レポートのタイトルの横には、大括弧で囲まれた疑問符 **[?]** があり、これをクリックして追加情報を表示できます。

 **注:** グラフおよび表が含まれている概要レポートを印刷するには、PDF 版のレポートを使用してください。

 **重要:** ユーザーがレポートを表示するための十分な特権なしでログインしている場合、またはレポートがフィルタリングされている場合、レポートは無効です。ユーザーは、サーバー上のすべてのコンピューターに対する完全な権限を持たない限り、十分な特権を持つと見なされません。

以下の各セクションでは、概要レポートに表示されるそれぞれのグラフおよびテーブルについて説明します。

問題の総数

「**問題の総数**」グラフは、各コンピューターの関連する問題の数を加算し、問題をその重要度によってグループ化します。問題とは、ネットワーク内のいずれかのコンピューター

上の関連する Fixlet メッセージです。例えば、最初のコンピューターに 5 つの関連する Fixlet メッセージがあり、2 番目のコンピューターに 3 つの関連する Fixlet メッセージがある場合、それらのメッセージの一部が同じであっても、問題の総数は 8 です。

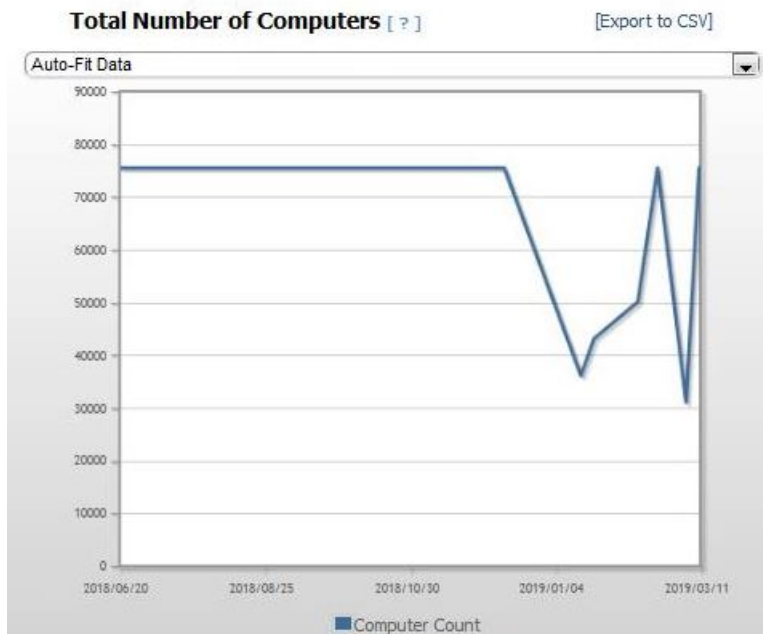
グラフの上にあるプルダウン・メニューから選択して、このグラフをさまざまな時間細分度に設定できます。「**自動調整データ**」オプションは、BigFix インストール済み環境の最大で過去 12 カ月分のデータをグラフ内で自動的にグループ化します。「**過去 7 日間**」は、データを日単位でグループ化し、過去 7 日分のデータを表示します。「**過去 30 日間**」は、データを日単位でグループ化し、過去 30 日分のデータを表示します。「**過去 26 週間**」は、データを週単位でグループ化し、過去 6 カ月分のデータを表示します。「**過去 52 週間**」も、データを週単位でグループ化し、過去 1 年分のデータを表示します。



棒の色分けは、それぞれに対応する問題の重要度を表します。それぞれの棒の高さは、特定の重要度の問題の数を表します。例えば、重要な問題を示す棒の開始位置が 300 で終了位置が 500 である場合、重要な問題の総数は 200 です。詳細を示すポップアップを表示するには、グラフ内の任意のデータ・ポイントにカーソルを移動します。

コンピューターの総数

「**コンピューターの総数**」グラフは、特定の期間に BigFix の管理下にあったコンピューターの数を表示します。このグラフを使用して、一定期間にわたる BigFix クライアントの追加デプロイメントをモニターできます。



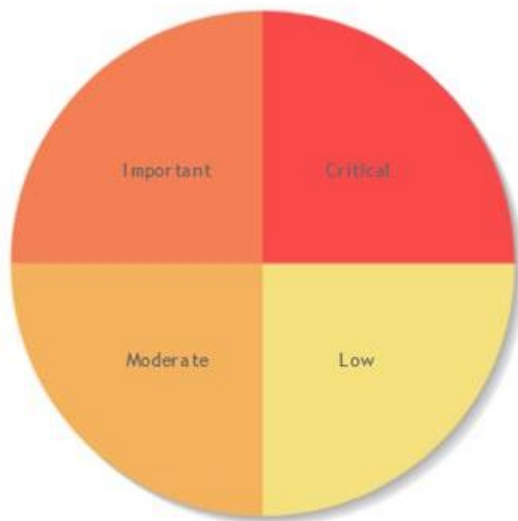
「問題の総数」グラフの場合と同様に、ユーザーが十分な特権なしでログインしている場合、このグラフは無効です。グラフの上にあるポップアップ・メニューから必要な時間目盛りを選択します。詳細情報を表示するには、特定のデータ・ポイントの上にカーソルを移動します。

コンピューターの脆弱性の状態

「**コンピューターの脆弱性の状態**」円グラフは、それぞれの最も重大な脆弱性に従ってコンピューターをグループ化します。

Computer Vulnerability Status [?]

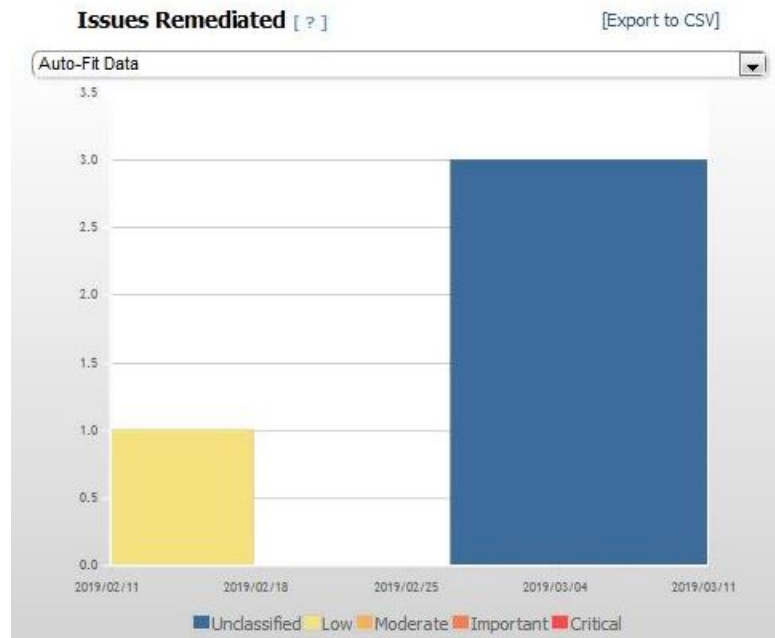
4 Computers Total

[\[Export to CSV\]](#)

あるコンピューターに「**きわめて重要**」な脆弱性がある場合、その他にどのような脆弱性があっても、そのコンピューターの状態は「**きわめて重要**」であると見なされます。あるコンピューターに「**きわめて重要**」な脆弱性はないが、「**重要**」な脆弱性がある場合、そのコンピューターの状態は「**重要**」であると見なされます。これは、ネットワーク全体の状態の概要を示します。脆弱性の円グラフは、最初の段階ではその大部分が赤 (きわめて重要) ですが、BigFix を継続的に使用すると緑 (脆弱性なし) になります。円グラフの扇形の上にカーソルを移動すると、それぞれの脆弱性状態のコンピューターの実数およびそれらがネットワーク・コンピューター全体に占めるパーセンテージが表示されます。

修正済みの問題

「**修正済みの問題**」グラフは、アクションへの応答として「**修正済み**」を返したコンピューターの数を示します。アクションの時間セグメントは、アクションの完了時刻ではなく開始時刻によって決定します (完了時刻は、後続の時間セグメントに属することがあります)。このグラフは、BigFix が企業システム全体で脆弱性を検出および修正する過程での修復適用の概要を示します。



これは履歴グラフです。グラフの上にあるポップアップ・メニューから時間目盛りを選択します。このグラフは、修正済みの問題の重要度を表すために色分けされた棒を表示します。カーソルを使用して、データを強調表示できます。

全体統計

「全体統計」テーブルは、ネットワークについての重要な事実を表示します。

Overall Statistics

Total Number Of Computers:	79	Relevant Fixlets Per Computer (average):	162.77
Total Number Of Fixlets:	29756	Total Number Of Fixlet Sites:	48
Total Number Of Tasks:	3792	Total Number Of Analyses:	237
Total Number Of Actions:	990	Mean Time To Remediate:	No information.

- **コンピューターの総数**: BigFix クライアントの現在の数。
- **コンピューター 1 台あたりの関連する Fixlet 数**: コンピューター 1 台あたりの関連する Fixlet メッセージの平均数 (関連する問題の総数を、コンピューターの総数で除算した数値)。
- **Fixlet の総数**: BigFix システム上に存在する Fixlet メッセージの現在の数。Web レポートがネットワーク内の複数のデータベースを監視している場合、Fixlet メッセージの数は、すべてのデータベース内のすべての Fixlet メッセージの総和に対応します。
- **Fixlet サイトの総数**: BigFix システムが現在サブスクライブしているサイトの総数。

- **タスクの総数:** BigFix ネットワーク上の関連するタスクの現在の総数。
- **分析の総数:** BigFix システム上に存在する分析の現在の総数。
- **アクションの総数:** BigFix システムによってこれまでに実行されたアクションの現在の総数。
- **平均修正時間:** すべてのコンピューター上ですべての関連する問題が修正されるまでにかかった平均時間。問題は、アクション以外の方法によって修正されることもあります。例えば、ユーザーはコンピューターを手動でアップデートして、関連する問題を修正できます。

検出された上位 10 の危機的/重要な問題

「検出された上位 10 の危機的/重要な問題」レポートは、ネットワーク内で現在影響しているコンピューターの数が多い Fixlet メッセージを表示します。

Top 10 Critical / Important Issues Detected

Name	Source Severity	Affected Computers	Patch Completion
1. Version of Dbmslpn.dll May Cause Handle Leak on BES Client/Server Components	Important	10	0.00%
2. Updated BES Client Now Available! (Version 7.0.1.356) - WinNT/2000/2003/XP	Important	8	52.94%
3. MS07-012: Vulnerability in Microsoft MFC Could Allow Remote Code Execution - Windows XP/2003 (x64) (v2, re-released 6/12/2007)	Important	6	0.00%
4. MS06-078: Vulnerability in Windows Media Format Could Allow Remote Code Execution - Windows Media Player 6.4 (re-released 7/10/2007)	Critical	5	0.00%
5. MS07-031: Vulnerability in the Windows Schannel Security Package Could Allow Remote Code Execution - Windows XP SP2	Critical	5	0.00%
6. MS07-035: Vulnerability in Win 32 API Could Allow Remote Code Execution - Windows XP SP2	Critical	5	0.00%
7. MS07-034: Cumulative Security Update for Outlook Express and Windows Mail - Windows XP SP2	Important	5	0.00%
8. MS06-068: Vulnerability in Microsoft Agent Could Allow Remote Code Execution - Windows XP SP2	Critical	4	0.00%
9. MS07-008: Vulnerability in HTML Help ActiveX Control Could Allow Remote Code Execution - Windows XP SP2	Critical	4	0.00%
10. MS07-009: Vulnerability in Microsoft Data Access Components Could Allow Remote Code Execution - Windows XP SP2	Critical	4	0.00%

[Show Progress of Top 10 Critical / Important Issues](#)

この一覧には、4 つの列があります。

- 「名前」列は、Fixlet メッセージの名前を示します。
- 「ソースの重要度」列は、各共通 Fixlet の重要度を示します。
- 「影響を受けるコンピューター」列は、現在関連する Fixlet メッセージを持つコンピューターの数を表示します。Fixlet の一覧は、「影響を受けるコンピューター」の数によってソートされます。
- 「パッチの完了」列は、一覧内の Fixlet に影響されたことがあるコンピューターの総数のうち、修正されたコンピューターの数占めるパーセンテージです。

上位 10 の最も一般的な問題の一覧の下には、「上位 10 の危機的/重要な問題の進行状況の表示」リンクがあり、これをクリックすると、「データの検索」で表示できる進行状況レポートが開きます。

コンピューターのプロパティ一覧 (Computer Properties List)

このレポートは、BigFix クライアント・コンピューターの特定のプロパティの一覧を提供します。このレポートは、リストされた多くのレポートと同様に「データの検索」から派生したものであり、固有のフィルターおよびグラフが含まれます。これらはユーザーの便宜のために提供されていますが、マウスを数回クリックするだけで独自のフィルターおよびグラフを再作成することもできます。

Computer Name	BIOS	CPU	OS	Free Space	RAM	Total Size of S:	Web Browser
PocketPC-WM_Tyler_1	The operato	310 MHz ARM version 4	Windows Mobile 6.0 5.2.1616	156 MB	57 MB	197 MB	ieplnko.exe 6.0
Q4AIX01-1	<nil/>	380 MHz PowerPC_004e	AIX 5.1	54 MB	512 MB	80 MB	The operator 'versio
Q4AIX02-1	<nil/>	400 MHz PowerPC_POWER3	AIX 5.2	21 MB	1024 MB	64 MB	The operator 'versio
qas01-1	<nil/>	1500 MHz PowerPC_POWER5	AIX 6.1	32 MB	1752 MB	64 MB	The operator 'versio
Q4EES	<unknown>	2700 MHz Xeon	Win2003 5.2.3790	330262 MB	16384 MB	1420235 MB	ieplnko.exe 7.0.6000
Q4EES-EXTRELAY	09/22/09	2400 MHz Xeon	Win2003 5.2.3790	3906 MB	256 MB	8181 MB	IEEXPLORE.EXE 6.0.2
qacentos4x86-1	<nil/>	2400 MHz Core 2	Linux CentOS 4.8 (2.6.9-89.EL)	3404 MB	256 MB	7433 MB	The operator 'versio
qacentos4x86-1	<nil/>	2400 MHz Core 2	Linux CentOS 4.8 (2.6.9-89.EL)	3713 MB	256 MB	7433 MB	The operator 'versio
qacentos54x86-1	<nil/>	2400 MHz Core 2	Linux CentOS 5.4 (2.6.18-164)	5437 MB	512 MB	8803 MB	The operator 'versio
qacentos54x86-1	<nil/>	2400 MHz Core 2	Linux CentOS 5.4 (2.6.18-164)	4178 MB	256 MB	7315 MB	The operator 'versio
Q4EES03	<nil/>	2400 MHz Core 2	Linux CentOS 5.4 (2.6.18-164)	4178 MB	256 MB	7315 MB	The operator 'versio

「レポート一覧」から「コンピューターのプロパティ」一覧を選択します。フィルターを選択して、リストのサイズを小さくすることができます。ヘッダーは、BIOS 日付、CPU タイプ、空きハード・ディスク・スペース、オペレーティング・システム、メモリー、ユーザー名などの重要なコンピューターのプロパティを示します。これらのプロパティは、すぐに使用可能な BigFix クライアントの標準プロパティです。しかし、コンソールから、関連式を使用して新規のコンピューターのプロパティを作成できます。これらのプロパティもここで選択可能です。

未解決の脆弱性一覧 (Open Vulnerabilities List)

このレポートは、現在の関連する Fixlet メッセージを表示します。このレポートをフィルタリングして、少なくとも 1 つの適用可能なコンピューターがある Fixlet メッセージのみを表示することもできます。

Progress	Name	SiteName	Applicable	Deployed Action Count
75%	Inaccurate Power Monitoring Statistics	BES Power Management	3	0
0%	Renetall BES Client Logging Service	BES Support	2	0
50%	BES Quick Reference - Production	BES Support	1	0
87%	BES Relays Have Incorrect Clocks	BES Support	1	2
80%	BES Clients Have Incorrect Clock Time	BES Support	10	4
50%	BigFix Firewall - Improper Status of BigFix F	BigFix Firewall	1	0
0%	Dropped Operating System Support	kar_lhe's Operator Site (qabas)	1	0
0%	Client File Cache Test - Setup	kar_lhe's Operator Site (qabas)	79	0
0%	Client File Cache Test - Setup	kar_lhe's Operator Site (qabas)	70	0
0%	Client File Cache Test - Setup	kar_lhe's Operator Site (qabas)	79	0
83%	Updated BES Client Now Available! (Version	Master Action Site (qabas)	2	0
0%	Command - setting of client	Master Action Site (qabas)	79	5
0%	Command - add prefetch item (dynamic do	Master Action Site (qabas)	70	5
0%	Command - enable gathering	Master Action Site (qabas)	79	5
0%	Command - pause while (for 5 seconds)	Master Action Site (qabas)	70	5
0%	FF - Utility - Setup	Master Action Site (qabas)	79	0
0%	Command - script FAILURE - Unix and WIN	Master Action Site (qabas)	64	3
16%	Updated BES BES Client Now Available! (N	Master Action Site (qabas)	5	0
0%	Command - script64 - Windows64 Only	Master Action Site (qabas)	5	1
38%	test test notes	Master Action Site (qabas)	10	0

レポート一覧から「**未解決の脆弱性一覧 (Open Vulnerabilities List)**」を選択します。最初の列は、それぞれの脆弱性の進行状況を分かりやすく視覚化した表現です。さらに、このレポートは、名前、サイト名、適用可能なコンピューターの数、およびレポートを完了するための展開済みアクション数を示します。このレポートは、ネットワークを潜在的な危険にさらす可能性がある問題を追跡するために役立ちます。

その他のレポート

自分自身で作成するレポートに加えて、Web レポートにはいくつかの他のレポートがプリインストールされています。

- アクション・リスト
- 分析リスト
- オペレーティング・システムの配布
- オペレーター・リスト
- OS 脆弱性の要約。(このレポートは、いくつかの他の組み込みレポートおよびユーザー作成レポートと同様に、7.2 の「コンピューターのプロパティ」レポート・フォーマットで読み込まれます。このフォーマットのレポートを表示することはできませんが、このフォーマットの新規レポートを作成することはできません。)

- 最近のアクションからの 10 個の Fixlet メッセージの進行状況。(このレポートは、環境内の最近のアクションでの 10 個の Fixlet メッセージのみをリストするアドホック・フィルターを生成するため、特殊です。)
- 最近の関連する 10 個の Fixlet メッセージの進行状況。(上記と同様に、このレポートはアドホック・フィルターを生成します。)
- コンソール・オペレーターごとの脆弱性。(このレポートは 7.2 フォーマットです。)
- OS ごとの脆弱性。(このレポートは 7.2 フォーマットです。)
- 一定期間にわたる脆弱性トレンド。(これは特殊な履歴レポートであり、フィルタリングできません。)
- 一定期間にわたる平均脆弱性トレンド。(これは特殊な履歴レポートであり、フィルタリングできません。)

これらのレポートは、「レポート一覧」でクリックして、簡単に調べることができます。多くのレポートは、フィルターの使用、グラフの追加、および列の編集によって、さらにカスタマイズできます。

関連しない結果の表示

Web レポートはデフォルトでは、関連していないプロパティやもはや関連しないプロパティに <not reported> のマークを付けます。その代わりに、コンソールには、最新の取得結果を持つプロパティが常に表示されます。Web レポートにコンソールと同じタイプの情報を表示させる場合は、以下のように構成します。

1. HKLM\Software\Wow6432Node\BigFix\Enterprise Server\BESReports の下の HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Wow6432Node レジストリー・セクションで、ShowNotRelevantResults レジストリー・キーを作成します。
2. ShowNotRelevantResults の値を 1 に設定します。
3. レジストリーの変更後、Web レポート・サービスを再始動します。

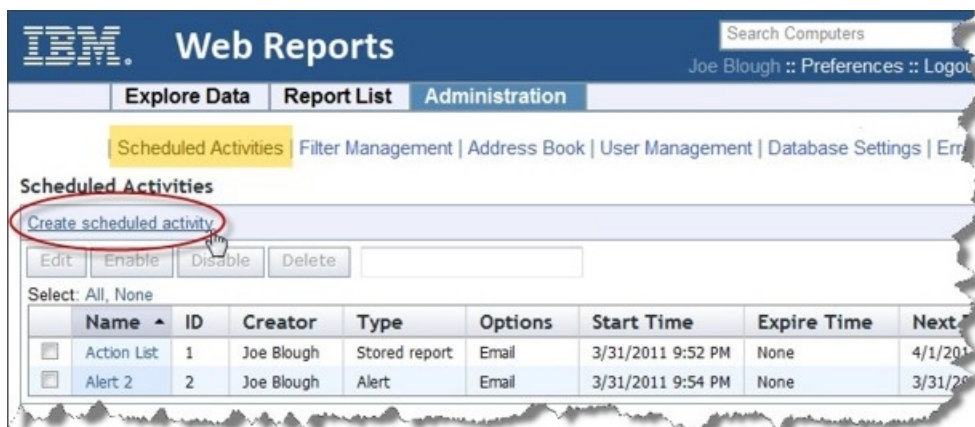
第 5 章. プログラムの管理

プログラムの「管理」セクションを使用すると、アクティビティ、フィルター、アドレス、ユーザー、およびデータベースを管理できます。以下では、これらの機能について説明します。ウィンドウの上部にある「管理」タブをクリックします。



スケジュール・アクティビティ

「スケジュール」セクションを使用すると、特定の時点になるか特定の条件が満たされたときに、レポートを実行できます。レポート結果は、自分宛に電子メールで送信したり、後で表示するためにアーカイブしたりできます。これにより、例えば、きわめて重要な Fixlet メッセージの自動更新を電子メールで受信したり、監査レポートを定期的にバックアップしたりできます。



このページを開くと、現在のスケジュール済みレポートの一覧が開きます。一覧にスケジュール・アクティビティを追加するには、「スケジュール・アクティビティの作成」をクリックします。

作成リンクの下には、いくつかのボタンがあります。これらは、下にある一覧内で1つ以上のアクティビティを選択するまで、ぼかし表示されています。以下のボタンがあります。

- **編集:** スケジュール・アクティビティのプロパティを編集できます。
- **有効化:** 選択されたアクティビティをスケジュールどおりに実行できます。以前に無効化したアクティビティを再度アクティブ化するために使用されます。
- **無効化:** 再度有効化されるまでアクティビティが実行されないようにします。これにより、アクティビティを実際には実行しないでその機能を保持できます。
- **削除:** 選択された (チェック・マークが付けられた) アクティビティを削除します。

一覧内の項目を個別にクリックして選択できます。一覧の上部にあるリンクを使用し、**「すべて」** または **「なし」** を選択することもできます。

一覧には、以下のようないくつかの列があります。

- **名前:** アクティビティの名前。基礎となるレポートから派生します。
- **ID:** 各アクティビティの作成時に割り当てられる増分番号。
- **作成者:** アクティビティ作成者の名前。
- **種類:** 種類 (レポートまたはアラート)。
- **オプション:** アクション (電子メール、アーカイブ、またはカスタム) を指定します。
- **開始時刻:** アクティビティの開始時刻。通常は、作成された時刻です。
- **有効期限:** 設定されている場合、アクティビティの終了時刻。設定されていない場合、有効期限は無制限であり、この列には **「なし」** が表示されます。
- **次の時刻:** アクティビティが無効化されていない限り、アクティビティが次に実行される時刻。
- **期間:** スケジュール・アクティビティが実行される間隔。これは、1分から2年の間の任意の期間です。

スケジュール・アクティビティの作成

スケジュール・アクティビティは、指定されたスケジュールどおりにレポートまたはアラートを作成します。インターフェースには4つのセクションがあり、**時間範囲**、**アク**

ティビティー・レポート、スケジュールのアクティビティー・トリガー、および実行されるアクティビティー・アクションを指定します。

アクティビティーをスケジュールするには、以下の手順を実行します。

1. 「管理」 > 「スケジュール・アクティビティー」 をクリックし、「スケジュール・アクティビティーの作成」 リンクをクリックします。
2. 要求された作成ページから、スケジュール・アクティビティーの時間範囲を選択します。

Start time: Jul 20 2010 at 18 : 33
 Expire time: --- -- ---- at -- : --

この設定は、スケジュールが有効である時間範囲を定義します。「開始時刻」および「有効期限」から構成されています。デフォルトの開始時刻は現在です。有効期限を選択しない場合、アクティビティーの有効期限は無制限です。

3. 「アクティビティー・レポート」ボックスで、以下を指定します。

Activity Report:

Type:
 Report Action List
 Format: HTML PDF CSV

- a. レポートの種類(「レポート」または「アラート」)を選択します。レポートは、詳細なグラフィック/表形式出力を生成します。アラートは通常、レポートを電子メールとして送信します。
 - b. プルダウン・メニューから保存レポートを選択します。メニューには、アクセスできるすべてのパブリックおよびプライベートのレポートが含まれています。
 - c. レポートのフォーマットとして HTML または CSV のいずれかを選択します。Web レポート内で PDF の生成が有効だった場合は、PDF フォーマットも使用可能です。
4. 「アクティビティー・トリガー」ボックスで、以下を指定します。

Activity Triggers:

<input checked="" type="radio"/> Generate report every: 1 Days
<input type="radio"/> Generate report on every refresh (currently every 15 seconds)
<input type="radio"/> Generate report once
<input type="checkbox"/> Match Relevance conditions
<div style="border: 1px solid gray; height: 40px; width: 100%;"></div>
<input type="checkbox"/> [Test]
<input checked="" type="radio"/> Generate report when relevance is true
<input type="radio"/> Generate report when relevance becomes true
<input type="radio"/> Generate report when answer changes
<input checked="" type="checkbox"/> Send email/store archive only when report has changed
<input type="checkbox"/> Include trigger information

- a. **作成:** レポートの作成頻度を「指定間隔」、「データ更新ごと」、「一回」の中から選択します。
 - b. **関連条件を一致:** レポートを実行するために必要な関連条件がある場合はその条件を入力します。
 - c. レポートが変更された場合にのみレポートを電子メールで送信またはアーカイブするかどうかを選択します。
 - d. トリガー基準をレポート自体に埋め込むには、「トリガー情報を含める」というラベルの付いたボックスにチェック・マークを付けます。
5. 「アクティビティ・アクション」ボックスで、以下を指定します。

Activity Actions:

Email [Edit]

To:

From: May <may@bigcorp.com>

Subject: [IBM Endpoint Manager] Report Notification

Text:

Include report output
 Include link to current report
 Include link to archive report

Archive

Limit the number of archives stored

Only keep archives for Days
 Limit archives to MB
 Only keep entries

Customized Executable [?]

Executable:

Arguments:

- a. レポートの送信先を「電子メール」で選択します。件名行および付属するテキストを入力します。ボックスにチェック・マークを付けて、レポートの出力、レポートへのリンク、アーカイブへのリンクをそれぞれ含めるかを指定します。
- b. レポートをアーカイブするかどうかを「アーカイブ」で選択します。アーカイブの数を制限できます。各アーカイブを期間、ディスク・スペース、またはエントリーの数に基づいて制限できます。
- c. カスタマイズした実行ファイルを、アクティビティの実行時にトリガーされるよう指定できます。カスタマイズした実行可能ファイルは、正しいディレクトリに配置する必要があります。Windows Web レポート・サーバーでは、デフォルト・パスは次のとおりです:C:\Program Files\BigFix Enterprise\BES

Server\BESReportsData\CustomExe。Linux Web レポート・サーバーでは、デフォルト・パスは /var/opt/BESReportsServer/BESReportsData/CustomExe です。

実行可能ファイルは、Web レポート・サービスのユーザーとしてシェルを通じて実行されます。バックグラウンドで実行され、ユーザー・インターフェースはありません。プルダウン・メニューから実行可能ファイルを選択します。実行可能ファイルに可変情報を渡すことができるいくつかの予約語があります。

<activityname>

スケジュール・アクティビティ名を渡します。

<reportfile>

生成されるレポート・ファイルを渡します。

<activitycreator>

アクティビティ作成者の名前を渡します。

6. 「送信」をクリックします。

アクティビティをスケジュールしました。アクティビティは「スケジュール・アクティビティ」リスト内に表示され、スケジュールするために選択したレポートの名前が付けられます。

フィルターの管理

フィルターは、レポートをカスタマイズするために使用されます。これにより、データベースの特定のサブセットを重点的に表示できます。カスタム・フィルターを保存しておくと、そのフィルターを他のレポート内で再使用できます。その後、このインターフェースから、カスタム・フィルターを表示および削除したり、カスタム・フィルターの状態（「プライベート」または「パブリック」）を変更したりできます。

「管理」タブの「フィルター管理」オプションをクリックします。既存のフィルターのリストが表示されるので、ここでフィルターを変更できます。フィルターの作成者だけでなく、すべての管理者が、このリスト内のすべてのフィルターを編集または削除したり、フィルターの表示設定を変更したりできます。

Explore Data		Report List		Administration	
Scheduled Activities		Filter Management		Address Book User Manag	
Delete	Make Public	Make Private	Search Filters		
Select: All , None					
	Name	Creator	Last Modified	Visibility	
<input type="checkbox"/>	Athlon CPUs	Joe Blough	Friday, April 01, 2011 12:50:00 PM	Private	
<input type="checkbox"/>	Intel CPUs	Joe Blough	Friday, April 01, 2011 12:42:07 PM	Private	
<input type="checkbox"/>	Win OS	Joe Blough	Friday, April 01, 2011 12:42:23 PM	Private	

「削除」、「パブリックに設定」、または「プライベートに設定」ボタンを使用するには、フィルターの前にあるチェック・ボックスをクリックします。検索文字列を指定して、フィルターのリストを絞り込むこともできます。

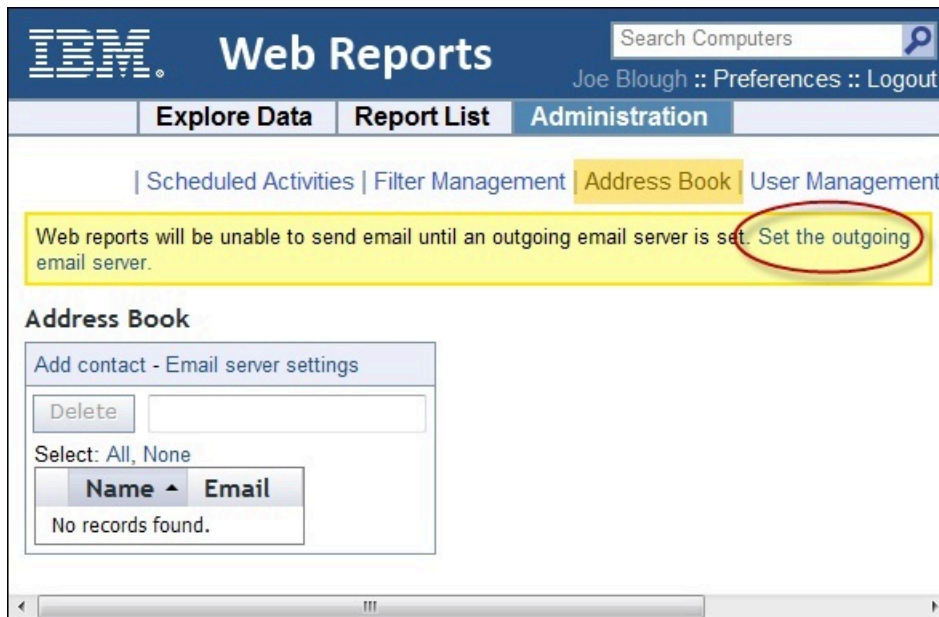
注: 既存のレポートの一部であるフィルターを削除する場合は、そのレポートの解釈が変更され、予期されたよりも大きいリストが生成されることがあります。

アドレス帳

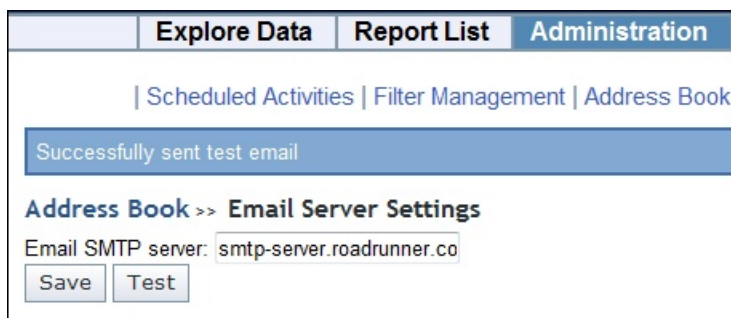
「アドレス帳」セクションを使用すると、電子メール・サーバーの設定を構成し電子メール・アドレスのリストを編集することができます。

「管理」タブの「アドレス帳」オプションをクリックして、アドレス帳を管理します。

電子メールの設定をまだ構成していない場合は、警告ボックスが開くので、ここで送信電子メール・サーバーを指定できます。



アドレス帳の上にある「電子メール・サーバーの設定」リンクをクリックすると、いつでも設定ウィンドウに戻ることができます。電子メールの設定を編集できるのは、Web レポート管理者のみです。このページには、2つのボタンがあります。



- **保存:** 電子メールの設定を保存します。
- **テスト:** テスト・メッセージを送信して、電子メール・サーバーの設定を検査できます。

サーバーのアドレスを保存すると、アドレス帳に戻ります。新しい連絡先をアドレス帳に追加するには、次のようにします。

1. 「連絡先の追加」をクリックします。ポップアップ・ダイアログから、名前および電子メール・アドレスを入力します。
2. 「追加」ボタンをクリックして、連絡先情報を保存します。

- このページではアドレスを削除することもできます。名前の横のボックスにチェックを入れ、「削除」ボタンをクリックします。

アドレス帳をセットアップしました。このアドレス帳を使用して、スケジュール・アクティビティをリスト上の任意のユーザーに送信できます。

ユーザー管理

「**ユーザーの管理**」ページを使用すると、Web ユーザーのプロパティを追加、削除、および編集できます。各ユーザーは、複数の役割を持つことができます。ユーザーがログインすると、そのすべての役割が論理和演算され、アクセス許可を合併することによってユーザーの状態が決定します。すべての役割を合併しても管理者状態が付与されない場合は、「ユーザーの管理」セクションは表示されません。管理者特権がある場合は、「**管理**」タブの「**ユーザーの管理**」オプションをクリックします。

Successfully created user "Sue".

User Management

Create user - Manage roles - Global user options

Assign roles ▼ Delete

Select: All, None

	Login ▲	Name	Assigned roles
<input type="checkbox"/>	Bill	Bill Wiggleton	Normal
<input type="checkbox"/>	Joe	Joe Blough	Administrator
<input type="checkbox"/>	Sue	Susan Swearington	Read-only

「ユーザーの管理」ページでは、ユーザーの「**ログイン**」、「**名前**」、および「**割り当てられた役割**」がテーブル内にリストされます。

このページには、その他のリンクがあります。

- **ユーザーの作成:** 「ユーザーの作成」ページが開きます。名前、ログイン、パスワードの入力およびユーザー役割の定義を求められます。詳しくは、[ユーザーの作成 \(##### 74\)](#)を参照してください。

- **役割の管理:** ユーザーに割り当てる役割を定義および管理できます。詳しくは、[役割の管理 \(##### 75\)](#)を参照してください。
- **グローバル・ユーザー・オプション:** すべてのユーザーによって共有されるいくつかの管理パラメーターを設定できます。詳しくは、[グローバル・ユーザー・オプション \(##### 77\)](#)を参照してください。

新規ユーザーを作成すると、ユーザーがリストに追加されます。各項目の前にあるボックスにチェック・マークを付けることができます。チェック・マークを付けると、「**役割の割り当て**」および「**削除**」ボタンが選択可能になります。その後、ユーザーのグループに新規役割を割り当てたり、ユーザーのグループを削除したりできます。

「ログイン」列内のリンクをクリックして、ユーザーを**編集**することもできます。詳しくは、[ユーザーの編集 \(ページ\) 79](#)を参照してください。

ユーザーの作成

このページは、「**管理者**」 > 「**ユーザーの管理**」 > 「**ユーザーの作成**」から使用できます。**名前、ログイン、パスワード**の入力および**ユーザー役割**の定義を求められます。

The screenshot shows the 'Create User' form within the 'Administration' section. The form has the following elements:

- Navigation tabs: Explore Data, Report List, Administration (selected).
- Sub-navigation: | Scheduled Activities | Filter Management | Address Book
- Section: User Management >> Create User
- Fields:
 - Full name: Norman Hunter
 - User logon name: Norm
 - Password: ••••••
 - Confirm password: ••••••
- Role: Normal (dropdown menu) with a 'Create new role' link.
- Button: Create user

組み込みの**役割**は以下のとおりです。

管理者: 最上位の特権を付与します。追加ユーザーの作成、アクティビティのスケジュール、およびデータベース構成の設定の権限があります。

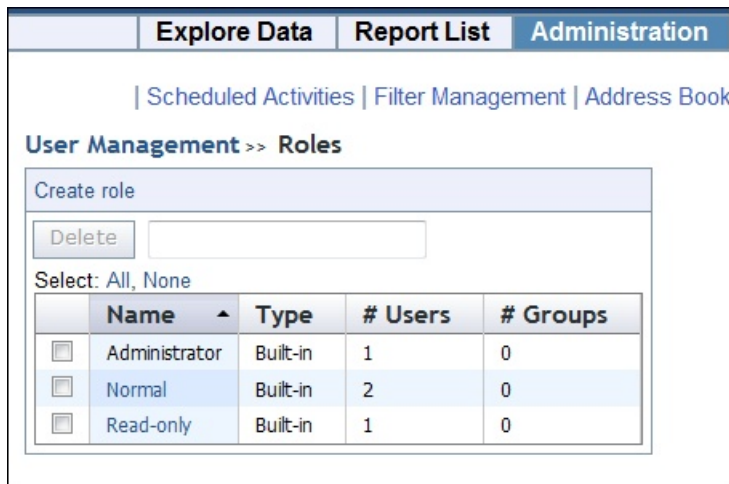
標準ユーザー: 通常の特権を付与します。ユーザーはデータを表示できますが、他のユーザーの作成またはデータベース構成の設定の権限はありません。

読み取り専用: ユーザーによるパブリック・フィルターおよびレポートの編集を制限します。

必要な情報を入力し、「**ユーザーの作成**」をクリックします。

役割の管理

このページは、「**管理**」 > 「**ユーザーの管理**」 > 「**役割の管理**」から使用できます。このページで、ユーザーに割り当てる役割を定義および管理します。



役割を削除するには、役割の左側にあるボックスをクリックし、「**削除**」をクリックします。

以下の3つの組み込み役割があります。

管理者

最上位の特権を付与します。追加ユーザーの作成およびデータベース構成の設定の権限があります。

標準ユーザー

通常の特権を付与します。ユーザーはデータを表示できますが、他のユーザーの作成、データベース構成の設定、またはアクティビティのスケジュールの権限はありません。

読み取り専用

ユーザーによるパブリック・フィルター、レポート、ラベルなどの作成または変更 (つまり、他のユーザーに属するまたは表示されるすべてのオブジェクトの編集) を制限します。「読み取り専用」役割を持つユーザーは、プライベート・カスタム・レポートのみを作成、保存、および編集できます。

独自のカスタム役割を定義して、さまざまな権限および適用範囲を付与するには、「**役割の作成**」リンクをクリックします。

役割の作成

このページは、「**管理**」 > 「**ユーザーの管理**」 > 「**役割の管理**」 > 「**役割の作成**」から使用できます。付与したい特定のアクセス許可のみを持つ新規役割を作成できます。その後、この役割は役割のリストに表示されるので、リストからこの役割を選択して適切なユーザーに割り当てることができます。

User Management >> Manage Roles >> Create Role

Name:

Allow editing of public filters, reports, and labels.

Allow creating and saving of custom content.

Restrict view with a filter Restrict view by console user

Filter

Results match conditions.

役割には名前が必要です。また、アクセス許可を定義するためのいくつかのチェック・ボックスがあります。

パブリック・フィルター、レポート、ラベルの編集を許可する。この定義済み役割にこれらのオブジェクトに対する編集アクセス許可を含める場合は、このボックスにチェック・マークを付けます。

カスタム・コンテンツの作成と保存を許可する。この役割によるコンテンツ作成を許可する場合は、このボックスにチェック・マークを付けます。

フィルターで表示を制限。この役割が表示できる情報を制限するフィルターを使用するには、このボタンをクリックします。このボタンをクリックすると、フィルター・パネルが

開きます。ここで、この役割がデータのサブセットのみを表示できるように、コンピューターまたはコンテンツに適用されるフィルターを作成できます。

コンソール・ユーザーによる表示を制限。 リストから 1 人のユーザーを選択するには、このボタンをクリックします。これにより、1 人の特定のユーザーのための役割を作成できます。このボタンをクリックすると、コンソール・ユーザーのリストが開くので、ここから名前を選択できます。

上記の例は、Windows コンピューターへのアクセスのみに制限された Windows 管理者を作成します。定義が完了したら、「**役割の作成**」をクリックします。

グローバル・ユーザー・オプション

このページは、「**管理者**」 > 「**ユーザーの管理**」 > 「**グローバル・ユーザー・オプション**」から使用できます。すべてのユーザーによって共有されるいくつかの管理パラメーターを設定できます。

Explore Data	Report List	Administration
Scheduled Activities Filter Management Address Book User Management Datasource Settings Errors		
User Management >> Global User Options		
Allow non-admin users to:		
<input checked="" type="checkbox"/> Create and view scheduled activities		
<input type="checkbox"/> View custom reports created by other non-admin users (Admin reports are viewable by everyone)		
<input checked="" type="checkbox"/> View all filters		
<input type="checkbox"/> View background error messages		
Activity Timeout Length:		
<input type="text" value="120"/>		
(default: 120 minutes. A value of 0 will disable the activity timeout.)		
Password Complexity Rule:		
<input data-bbox="203 1367 889 1394" type="text" value="(?!.*[[:lower:]])(?!.*[[:upper:]])(?!.*[[:digit:]]).{8,}"/>		
(default: (?!.*[[:lower:]])(?!.*[[:upper:]])(?!.*[[:digit:]]).{8,})		
Password Complexity Description:		
<input data-bbox="203 1472 1323 1499" type="text" value="Passwords must contain 8 characters or more, both uppercase and lowercase letters, and at least 1 digit."/>		
(default: Passwords must contain 8 characters or more, both uppercase and lowercase letters, and at least 1 digit.)		
Passwords Remembered:		
<input type="text" value="0"/>		
(default: 0. A value of 0 will disable the passwords remembered)		
<input type="button" value="Save"/>		

このインターフェースから、**管理者権限のないユーザー**および**コンソール・オペレーター**のユーザー権限を詳細化できます。特定のアクセス許可を追加および削除するには、該当するボックスにチェック・マークを付けます。以下のオプションがあります。

管理者権限のないユーザーに以下を許可します。

- **スケジュール・アクティビティの作成と表示。**これはデフォルトで設定されています。オフにした場合、管理者権限のないユーザーは、アクティビティのスケジュールを表示できません。
- **他の管理者以外のユーザーが作成したカスタム・レポートの表示。**これはデフォルトでオンに設定されます。管理者が作成したカスタム・レポートは常に表示可能です。
- **すべてのフィルターの表示。**これはデフォルトでオンに設定されます。オフにした場合、管理者権限のないユーザーは、自分自身が作成したフィルターのみを表示できます。
- **隠れているエラー・メッセージの表示。**これはデフォルトではオフに設定されています。管理者権限のないユーザーにエラー・メッセージを表示する場合は、オンにします。

コンソール・オペレーターが制限したユーザーに以下を許可します。

- **すべてのオペレーターの表示。**これはデフォルトでオンに設定されます。オフにした場合、制限された Web レポート・ユーザーは、他のオペレーターを表示できません。
- **すべてのローカル分析の表示。**これはデフォルトでオンに設定されます。オフにした場合、制限された Web レポート・ユーザーは、他のマスター以外のオペレーターが作成した分析を表示できません。

パスワードの複雑性ルール:

- 許可されるパスワードの最小長および最大長を指定する**パスワードの複雑性**も定義できます。デフォルトでは、6文字から256文字のパスワードが許可されます。パスワードの複雑性ルールは、正規表現を使用して定義されます。
- ルールの下には、パスワードがこの範囲外である場合に出力されるテキストを指定します。

パスワード記憶:

- 古いパスワードを再利用する前にユーザー・アカウントに設定できる、一意の新規パスワード数を設定できます。

- デフォルト値はゼロ (0) です。この値を 0 に設定するとパスワード記憶が無効になります。

「保存」をクリックして、グローバル・オプションを記録します。

ユーザーの編集

ユーザー・アカウントを編集するときには、自分自身の設定を編集するか、他のユーザーの設定を編集するかによって、異なるオプションが表示されます。管理者としてログインしていない場合は、他のユーザーのアカウントを編集できません。ユーザーのパラメーターを変更するには、「ユーザー」タブを選択し、編集するユーザーの「ログイン」リンクをクリックします。



自分自身の設定を編集する場合は、管理者特権とは無関係に、以下のことを実行できます。

- **名前の変更。** 新規ユーザー・ログオン名を入力するには、このリンクをクリックします。
- **パスワードの変更。** 「パスワードの変更」ページを開くには、このボタンをクリックします。現在のパスワードを入力してから、新規パスワードを入力し、さらに確認入力します。
- **環境設定の変更。** 自分自身の個人デフォルトにのみアクセスでき、他のユーザーの個人デフォルトにはアクセスできません。これをクリックすると、ページの最上部にある「環境設定」リンクをクリックしたときと同じダイアログが開きます。

管理者としてログインし、自分自身以外のユーザーを編集する場合は、環境設定以外のすべてを変更できます。

データ・ソース設定

Web レポートが集計する情報の取得元のデータ・ソースを管理できます。「データ・ソース」セクションは、BigFix データ・ソースの管理に使用されます。これには、データ・ソース接続と設定の追加、削除、および編集が含まれます。

「管理」 > 「データ・ソース設定」をクリックします。



このページで、以下のリンクを選択できます。

- **無効化 (有効化):** データ・ソースを削除しないで、データ・ソースを集計から除外できます。こうしておくで、データ・ソースを後で再度有効化できます。
- **編集:** (行の左側にある) 選択されたデータ・ソースの設定を編集できます。詳しくは、「#####」を参照してください。
- **削除:** 選択されたデータ・ソースを Web レポートの集計から削除できます。データ・ソースを無視するが、データ・ソース接続情報を使用可能なままにするには、「無効化」をクリックして、データ・ソースを無効化できます。
- **新しいデータ・ソースの追加:** 新しいデータ・ソースを集計グループに追加できます。詳しくは、「#####」を参照してください。
- **データ・ソース・オプション:** データ・ソースのオプションを設定できます。このページにあるオプションは、「関連度の評価を無効にする」の 1 つです。

Disable relevance evaluation.

Disabling relevance will disable Custom Reports and any Scheduled Activities that run based on relevance.

デフォルトでは選択されていません。チェック・マークを付けた場合、カスタム・レポート内およびスケジュール・アクティビティー内のすべての関連度の評価は無効になります。「送信」をクリックして、オプションを設定します。

- **キャッシュ設定:** メモリー内のデータ・ソース・キャッシュについての情報を表示します。各データ・ソースのキャッシュがディスク上のファイルに最後に書き込まれた時刻を表示します。また、キャッシュを更新する頻度を変更することもできます。最後に、キャッシュをディスクに書き込むかどうか、および書き込む場合の頻度を指定するオプションもあります。

Refresh cache every seconds.

- **キャッシュの更新:** データ・ソース・キャッシュの完全更新を開始します。BigFix BES Web レポート・サーバー・サービスを再始動して、データ・ソース・キャッシュを削除することもできます。
- **エラーの表示:** Web レポート・システム内で発生したすべての最近のエラーを表示できます。通常、これらのエラーはバックグラウンドで発生し、データの整合性に影響することがあります。通常、これらは、データ・ソースとの接続問題またはその他の問題に関連します。これらのエラーを解決できるのは管理者のみです。
- **ローカル・データベースの設定:** ローカル・データベース DSN およびローカル BigFix レポート・サーバーを表示します。

注: Web レポートによる集約のために複数のデータ・ソースを定義し、各 BigFix root サーバーの LDAP ディレクトリーの名前が同じである場合、Web レポートへの LDAP ユーザーのログインはいずれかの BigFix root サーバーのみによって認証されます。正常にログインするために、どちらの BigFix root サーバーも起動しており実行されていることを確認してください。どちらかが (例えばメンテナンスのため) 停止している場合、LDAP ユーザーのログインは失敗します。

新しいデータ・ソースの追加

このページを使用すると、Web レポートによる集計のために新しいデータ・ソースを追加できます。

このページに到達するには、「管理」>「データ・ソース設定」>「新しいデータ・ソースの追加」を選択します。

The screenshot shows the IBM Web Reports interface. At the top, there's a navigation bar with 'Administration' selected. Below it, a sub-menu shows 'Datasource Settings' highlighted. The main content area is titled 'Datasources' and lists a 'TESTING' source with 'Disable', 'Edit', and 'Delete' actions. A red box highlights the 'Add New Datasource' link. Other options include 'Cache Settings', 'Refresh Cache', 'View Errors', and 'Local database settings' with a DSN of 'LocalBESReportingServer'.

The screenshot shows the 'Add New Datasource' form. It has three main sections: 'Datasource Name' with a text input containing 'Tokyo'; 'URL' with a text input containing 'tokyo.mycompany.org:52311'; and 'Master Operator Credentials' which includes 'Username' (john_doe) and 'Password' (*****). There are 'Submit' and 'Cancel' buttons at the bottom left.

データ・ソース名: この新しいデータ・ソースの記述名を入力します。

URL: 接続先にするルート・サーバーの URL を入力します。URL には、適切なポート番号も含める必要があります。

マスター・オペレーターの認証情報: マスター・オペレーターの認証情報を入力します。これらの認証情報は、1 回のみ使用され、保存されません。

データ・ソースの編集

このページでは、(行の左側にある) 選択されたデータ・ソースの設定を編集できます。

このページに到達するには、「管理」>「データ・ソース設定」>「編集」を選択します。

IBM. Web Reports

Explore Data | Report List | Administration

| Scheduled Activities | Filter Management | Address Book | User Management | **Datasource Settings** | Errors |

Datasources

TESTING Disable **Edit** Delete

Add New Datasource
 Datasource Options:

Cache Settings
 Refresh Cache

View Errors.

Local database settings:
 Local database DSN: LocalBESReportingServer

IBM. Web Reports

Explore Data | Report List | Administration

| Scheduled Activities | Filter Management | Address Book | User Management | **Datasource Settings** | Errors |

Datasource Name: TESTING

URL [?]

Master Operator Credentials [?]
 Username:
 Password:

URL: 接続先にするルート・サーバーの URL を入力します。URL には、適切なポート番号も含める必要があります。

注: データ・ソースの名前は変更できません。

マスター・オペレーターの認証情報: URL を変更する場合は、マスター・オペレーターの認証情報を入力します。

エラー

このページは、「管理」>「エラー」を選択すると使用できます。最後に実行されたアクションに基づいて現在のエラーが表示されます。

第 6 章. 上級者向けのタスク

このセクションで説明するタスクは、標準的なユーザーにとって必要になることはほとんどありませんが、上級者が特殊なカスタマイズ・ニーズに対処する場合には役立つことがあります。

Web レポート・ファイルの理解

Web レポートには、XML ラッパーを使用する汎用レポート・フォーマットがあります。コンテンツ・サイトからレポートを表示でき、新規レポートを追加、編集、または削除できます。

レポート・ファイルは、拡張子が `.beswrpt` または `.webreport` でなければならず、XML フォーマットで記述されます。形式は次のとおりです。

```
<BESWebReport>
<Name>Report Title</Name>
<Type>[TemplateReport] | [CustomReport] | [ExternalReport]</Type>
<URLParameters>param1=value1&amp;param2=value2</URLParameters>
<Data>Custom data or external URL</Data>
<SourcePage>Source Page in Web Reports</SourcePage>
</BESWebReport>
```

以下のように、`.beswrpt` ファイルでは、複数のレポートを 1 つの XML ファイルに含めることもできます。

```
<BESWebReports>
  <BESWebReport>

  </BESWebReport>
  <BESWebReport>
```

```
</BESWebReport>  
</BESWebReports>
```

大部分のタグは、内容を説明するような名前になっています。Name タグは、レポートのタイトルを指定します。URLParameters と Data は、Type タグに依存します。Type タグには、3つの文字列のいずれかを指定できます。

- TemplateReport
- CustomReport
- ExternalReport

これらの文字列では、大/小文字が区別されます。

カスタム・レポートの作成

このページでは、カスタム・レポートを作成できます。このようなレポートは、実際には、印刷可能なレポートを生成するコードです。通常、HTML および埋め込まれた関連コマンドと JavaScript コマンドから構成されています。このレポートをパブリックにするかプライベートにするかを選択できます。

製品の新規インストール済み環境の場合、カスタム・レポートのインポートまたは保存はデフォルトで無効になっていることに注意してください。カスタム・レポートをインポートまたは保存するには、製品管理者がキー AllowCustomReportCreation の値を 1 に設定する必要があります。また、非管理者ユーザーに対するカスタム・レポートのビューもデフォルトで無効になっています。どのユーザーでもカスタム・レポートを表示できるようにするには、製品管理者がキー AllowUserViewCustom の値を 1 に設定する必要があります。これらのレジストリー・キーは、インストール済み環境に応じて以下の場所で見つけることができます。

Windows オペレーティング・システムの場合:

```
HKLM\Software\WOW6432Node\BigFix\Enterprise Server\BESReports
```

Linux オペレーティング・システムの場合:

構成ファイル `/var/opt/BESWebReportsServer/beswebreports.config` の

[Software\BigFix\Enterprise Server\BESReports] セクション

これらのレジストリー・キーを変更した場合は、Web レポート・サーバーを再始動する必要があります。

カスタム・レポートを作成するには、次のようにします。

1. 「データの検索」 > 「カスタム」 を選択します。

The screenshot shows the BigFix web interface. At the top, there are tabs for 'Explore Data', 'Report List', and 'Administration'. Under 'Administration', there are links for 'Computers', 'Content', 'Actions', 'Operators', 'Unmanaged Assets', and 'Custom'. The 'Custom' link is highlighted with a red box. Below this is a 'Filter' section with a dropdown menu set to 'Computer' and a search box labeled 'Search Properties'. There is also a 'Hide Source' link.

2. 「フィルター」ボックスがあります。これを設定して、希望するデータのサブセットのみに基づいてカスタム・レポートが生成されるようにフィルターを適用します。
3. 完全なレポート要求を指定して、テキスト・ボックスに入力します。例えば、以下のように指定することにより、BigFix コンピューターの名前をリストできます。

```
<div>Computer Names</div>
  <?Relevance names of bes computers?>
```

注: 対応する XML ファイルでは、この情報は、Data タグの文字データ (CDATA) ブロック内に表示されます。

4. 希望する表示内容を指定した後で、「レポートを保存」ボタンをクリックして、カスタム・レポートを一覧に追加します。

一覧では、他のすべてのレポートと同様に、レポートの表示設定を変更し、レポートにラベルを付け、レポートをスケジュールすることができます。以下のセクションでは、XML を使用してカスタム Web レポートを作成する方法について詳しく説明します。

Web レポート XML

カスタム・レポートは、HTML、関連度、および JavaScript から構成され、XML ファイル内に埋め込まれます。

Data タグ内で、文字データ (CDATA) ブロックを使用して、完全なレポート要求を指定します。XML パーサーは CDATA ブロックをマークアップとして解釈するため、組み込まれている HTML または JavaScript をエスケープする必要はありません。追加情報を使用するために、URLParameters タグなどのオプション・パラメーター・タグを組み込むこともできます。

使用可能なパラメーターの具体的なセットについては、[BigFix サポート・サイト](#)を参照してください。

以下は、カスタム Web レポートの例です。

```
<BESWebReport>
  <Name>Example Custom Report</Name>
  <Type>CustomReport</Type>
  <URLParameters>computerID=computerRecord</URLParameters>
  <Data>
    <![CDATA[
      <div>Computer Names</div>
      <?Relevance names of bes computers?>
    ]]>
  </Data>
  <SourcePage>ExploreComputers</SourcePage>
</BESWebReport>
```

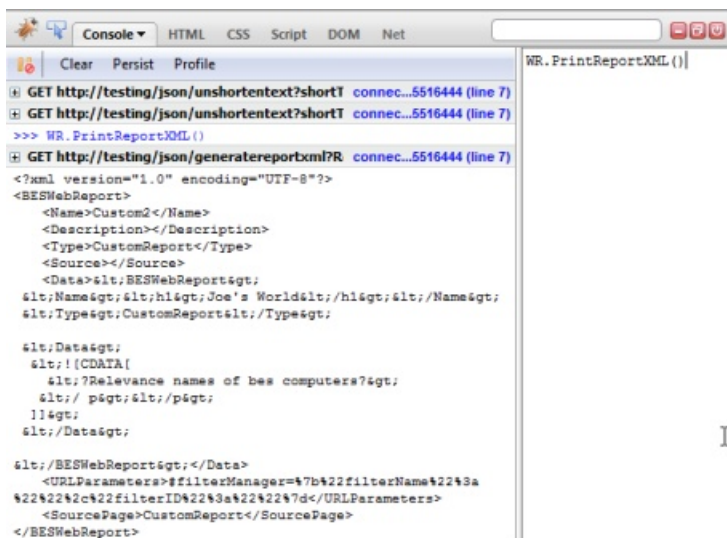
このレポートは、BigFix コンピューターの名前をリストします。

伝達のための移植可能レポートの作成

データを検索しているときには、いつでもレポートを保存できます。一般に、レポートを他のユーザーと共有する場合は、その表示設定を「レポート一覧」内で「パブリック」に設定できます。

しかし、サイト作成者である場合は、高度な手法を使用できます。ブラウザのアドレス・バーに表示されるのと同様に、URL の一部として、レポートの簡略説明が表示されることがあります。しかし、これは Internet Explorer の 2048 文字の長さ制限以内に収まるように設計された圧縮バージョンであり、移植可能ではありません。移植可能レポートを作成するには、以下の手順を実行します。

1. 「Web レポート」 ウィンドウの上部にある「データの検索」タブをクリックします。
2. 表示する列および適用するフィルターを構成します。
3. 「レポートを保存」 ボタンをクリックします。
4. JavaScript™ デバッガー (Firefox 用の Firebug など) を開きます。
5. デバッガーのコンソール領域に、コマンド **WR.PrintReportXML()** を入力します。



この例では、Firebug を使用します。WR.PrintReportXML は、現在のレポートの移植可能 XML バージョンを出力する埋め込み JavaScript です。

コード・サンプルを以下に示します。

```

<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<BESWebReport>
  
```



```

<Name>Example Report</Name>
<Type>TemplateReport</Type>
<Data></Data>
<URLParameters>#wr_computerTable=%22sort%3DR-Computer%2520
  Name%26dir%3Ddesc%26startIndex%3D0%26
  results%3D50%26c%3DR-Computer%2520Name%26c%3DR-IP%2520
  Address%26c%3DR-OS%26c%3DR-CPU%26c%3DR-Last%2520
  Report%2520Time%22</URLParameters>
<SourcePage>ExploreComputers</SourcePage>
</BESWebReport>

```

- この XML をテキスト・エディターにコピーし、拡張子 `beswrpt` を付けて保存します。

任意のコンテンツ・サイト内での伝達またはページへのインポートが容易な移植可能レポートを作成しました。レポートは、`URLParameters` タグに囲まれています。上記のサンプルでは、読みやすくするために改行が挿入されていますが、実際の XML は連続する 1 つのテキスト行です。

CSV ファイルへのアクティビティ・レポートのエクスポート

BigFix によって生成されたレポートのハードコピーを作成するには、そのレポートを CSV ファイルにエクスポートし、印刷します。

CSV レポート・ファイルを作成するには、「**管理**」>「**スケジュール・アクティビティ**」メニューから開いた「スケジュール・アクティビティの作成」ウィンドウで、それをアクティビティとしてスケジュールします。詳しくは、「[スケジュール・アクティビティの作成 \(\(ページ\) 66\)](#)」を参照してください。

CSV ファイルを使用して、レポート内の情報に基づいたグラフおよび統計を作成することもできます。

CSV ファイルにエクスポートされた Web レポートは、Excel と互換性のある CSV 形式です。Microsoft Excel によって数式として解釈される可能性のある文字を含む文字列 ("`+myfield`" など) は、以下の例に示すように、リテラル・ストリングに変換されます。

```
"=" "+myfield" "
```

このように処理される文字列は次のとおりです:+ (プラス)、- (マイナス)、/ (スラッシュ)、* (アスタリスク)、=(等号)。

PDF 文書へのアクティビティ・レポートのエクスポート


Web レポートは、印刷または電子メール送信のための PDF 文書を生成できます。PDF レポートを送信するには、スケジュール・アクティビティを作成または編集するときに PDF フォーマット・オプションを設定するか、レポートを PDF 文書としてエクスポートします。

Windows システムの場合

Windows プラットフォーム上の Web レポート・インストール済み環境にこの機能を追加するには、以下の手順を自動または手動で実行してください。

自動インストール

1. BigFix コンソールで、「**Fixlet とタスク**」をクリックします。
2. 以下のタスク ID を検索します。
 - タスク ID: 602: BES Web レポート: PDF レポートの有効化 - その 1 (2 部構成)
 - タスク ID: 603: BES Web レポート: PDF レポートの有効化 - その 2 (2 部構成)
3. これらのタスク内のアクションを実行して、PDF ジェネレーターを自動的にインストールします。

 **注:** Windows 2012 および 2012 R2 のオペレーティング・システムでは、これらのタスクでアクションを実行する前に、次のリンクで入手できる Microsoft のパッチをインストールする必要があります:<https://www.microsoft.com/en-us/download/details.aspx?id=48610>。

手動インストール

BESWebReportsServer サービスをホストしているサーバー上で、以下の手順を実行します。

1. Internet Explorer 7 以降がまだインストールされていない場合は、インストールします。
2. Internet Explorer 用 Flash Player をインストールします (x64 システムでも 32 ビット・バージョンをインストールします)。
3. システム・アカウント用に Internet Explorer の「信頼済みサイト」リストに Web レポート・ホストを追加します。
4. レジストリーで以下の手順を実行します。
 - a. Web レポート・ホストの完全修飾ドメイン名を指定して、以下にキーを追加します。

```
HKEY_USERS\[User account running Web Reports  
service]\Software\Microsoft\  
Windows\CurrentVersion\Internet Settings\ZoneMap\Domains
```

例えば、<http://bes.example.com> にある Web レポートにアクセスし、SYSTEM アカウントの下で Web レポートを実行する場合は、以下のキーを追加します。

```
HKEY_USERS\S-1-5-18\Software\Microsoft\Windows  
\CurrentVersion\  
Internet Settings\ZoneMap\Domains\bes.example.com
```

- b. **http** という名前の **REG_DWORD** 値を (追加したキーの下に) 追加し、この値を 2 に設定します。
 - c. **https** という名前の **REG_DWORD** 値を (追加したキーの下に) 追加し、この値を 2 に設定します。
5. ポート C:\Program Files\BigFix Enterprise\BES Server
\BESReportsData\ArchiveData__pdf\out.ps に出力する **BES Web Reports Printer** という名前の [PostScript ファイル・プリンター](#) を追加します。

 **注:** プリンター・ドライバーとして、Xerox Phaser 6180MFP-D PS をお使いください。ご使用になれない場合、https://hclpnpsupport.hcltech.com/csm?id=kb_article&sysparm_article=KB0023719 に記載の手順を適用してください。

6. GhostScript (バージョン 8.60) の 32 ビット (x86) バージョンを次の Web サイトからインストールします:<https://sourceforge.net/projects/ghostscript/files/GPL%20Ghostscript/8.60/gs860w32.exe>。
7. デスクトップのアイコン「マイコンピュータ」を右クリックします。
8. 「プロパティ」>「詳細設定」>「環境変数」を選択します。
9. 「システム変数」ペインの PATH 変数の最後に、以下のストリングを追加します。

```
C:\Program Files (x86)\gs\gs8.60\bin;
C:\Program Files (x86)\gs\gs8.60\lib;
```

10. 以下のレジストリー文字列値 (REG_SZ) を HKLM\Software\WOW6432Node\BigFix\Enterprise Server\BESReports 内に作成します。
 - PDFEnable: 1
 - PDFPrinterName: BES Web Reports Printer
 - PDFPostScriptPath: C:\Program Files (x86)\BigFix Enterprise\BES Server\BESReportsData\ArchiveData__pdf\out.ps
11. Windows を再始動して、PATH 変数を確実に更新します。

レジストリー設定

以下のすべての設定は、キー・レジストリー HKLM\Software\WOW6432Node\BigFix\Enterprise Server\BESReports の下にあります。

設定

- PDFEnable (PDF 生成を有効にするには、1 に設定します)
- PDFPostScriptPath
- PDFPrinterName

ロギング

- PDFLogPath

デフォルトのヘッダーおよびフッター

- PDFDefaultHeader
- PDFDefaultFooter

権限を持たないユーザーを使用したレポートのレンダリングおよび PDF の生成

- PDFUseUnprivileged (以下の値によって指定されたアカウントを使用するには、1 に設定します)
 - UnprivilegedUsername
 - UnprivilegedDomain
 - UnprivilegedPassword

タイムアウト設定

- PDFReportTimeout (単位: 分、デフォルト: 60)
- PDFPrintTimeout (単位: 分、デフォルト: 60)

Internet Explorer のレンダリング後の一時停止

- PDFPause (単位: 秒、デフォルト: 10、出力の前に Flash コンポーネントの初期化の時間を確保します)

Windows システムでの PDF 生成のロギング

ロギングを使用可能にするキーは、HKLM\Software\WOW6432Node\BigFix\Enterprise Server\BESReports の下の HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Wow6432Node セクションに格納されています。

以下の手順を実行して、PDF 生成のロギングを使用可能にします。

1. PDFLogPath レジストリー・キーを C:\webreportspdf.log に設定します。

2. インストールの実行後にサーバー・マシンが再始動されたことを確認してください。
3. 以下のレジストリー・キーに正しい値が設定されていることを確認してください。
 - PDFEnable は 1 に設定する必要があります。
 - PDFPostScriptPath は、インストール中に追加されたプリンターのポートと同じである必要があります。
 - PDFPrinterName は、インストール中に追加されたプリンターの名前と同じである必要があります。

Windows システムでの PDF 生成のトラブルシューティング

- 生成された PDF 内にグラフが表示されない場合は、Web レポート・サーバー・ボックス上の SYSTEM アカウントの下で実行されている Internet Explorer のセキュリティ設定が、Web レポート・ページをレンダリングできるように正しく設定されていることを確認してください。このタスクを実行するには、以下の手順を実行します。
 - **at** または **schtasks** コマンドを使用して、Internet Explorer を開きます。
 - Web レポートの「概要」ページにナビゲートします。
 - グラフが表示されることを確認します。表示されない場合は、セキュリティ設定を変更して、ActiveX プラグインおよび JavaScript を有効にします。
- Windows オペレーティング・システムで、PDF レポートを使用可能にした後にレポートを PDF としてエクスポートしようとする、作成された PDF に予想されるレポートが含まれず、代わりに以下のエラーが表示されます。

```
HTTPS Error: Content BlockedContent was blocked because
it was not signed by a valid securitycertificate.
For more information see 'Certificate Errors' in Internet
Explorer Help.
```

回避策:

Web レポートは、デフォルトでは、Local System として実行中に PDF ファイルを生成します。すべてのアカウントがブロックされないように、証明書をマシンに追加する必要があります。Internet Explorer で証明書を追加するには、以下のようになります。

1. オプション「**証明書をすべて次のストアに配置する**」を選択し、「**参照**」をクリックします。

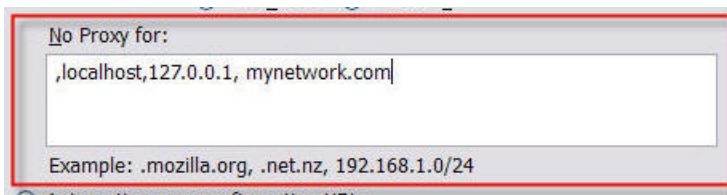
2. 「信頼されたルート証明機関」を選択し、「OK」をクリックします。場合によっては、「物理ストアを表示する」にチェック・マークを付けてから、「信頼されたルート証明機関」の下の「ローカル・コンピューター」を選択する必要があります。
3. インポートを完了します。

Linux システムの場合

Web レポートを Linux システムにインストールした場合、レポートを PDF 文書としてエクスポートするために追加コンポーネントをインストールする必要はありませんが、ご使用の環境に該当する場合は構成手順を実行する必要があります。

BigFix サーバーがプロキシ接続を使用してインターネットを介した通信を行っており、Web レポートをインストールした Linux システムでユーザーが Firefox を使用して Web レポートを実行する場合

システムの完全修飾ホスト名に対して Firefox ブラウザーが構成されていないことを確認します。例えば、ネットワーク・ドメインが mynetwork.com の場合、以下の画像で強調表示されているように Firefox の接続設定を構成してください。



DISPLAY 変数が DISPLAY=:0.0 以外の値に設定されている場合

`/etc/init.d/beswereports` ファイル内のエクスポート・ステートメントを手動で以下のように変更します。

1. 次のコマンドを実行して Web レポート・サービスを停止します。

```
/etc/init.d/beswereports stop
```

2. ファイル `/etc/init.d/beswereports` を編集します。

3. **DISPLAY** 変数を、使用する X サーバーを正しくポイントするように設定します。
4. ファイルを保存します。
5. 次のコマンドを実行して Web レポート・サービスを再始動します。

```
/etc/init.d/beswereports start
```

Linux システムで設定されている runlevel が 5 でない場合

runlevel を変更して 5 に設定するか、xvfb を使用します。
xvfb を使用する場合は、以下の手順を実行してください。

1. オプションのチャンネルを以下のようにしてセットアップします。

```
rhnc-channel --add --channel=rhel-x86_64-server-optional-6
```

2. 以下のようにパッケージをインストールします。

```
yum install xorg-x11-server-Xvfb.x86_64  
yum install gstreamer-plugins-base-XXX  
yum install urw-fonts-XXX
```

ここで、XXX は、インストールされるパッケージの特定のバージョン番号に応じて異なります。例: `gstreamer-plugins-base-0.10.36-10.e17.x86_64`。ご使用のシステムで以下のコマンドを実行することにより、それらのパッケージの現行のフルネームを取得できます。

```
rpm -qa | grep urw-fonts  
rpm -qa | grep gstreamer
```

3. PDF のエクスポートを管理するスクリプトを以下のように変更します。
 - a. `/var/opt/BESWebReportsServer/BESReportsData/BESExe/wkhtmltopdf.sh` スクリプトを編集します。
 - b. 以下を付加します。

```
xvfb-run -a -s "--screen 0 1024x768x16"
```


追加する場所は、以下のステートメントの前です。

```
/var/opt/BESWebReportsServer/BESReportsData/BESExe/
wkhtmltopdf
--enable-plugins --use-xserver --javascript-delay 5000
--no-stop-slow-scripts $optionalparms $arg1 $arg2
```

これによって、次のように一意のコマンド行となります。

```
xvfb-run -a -s "--screen 0 1024x768x16" /var/opt/
BESWebReportsServer/BESReportsData/
BESExe/wkhtmltopdf --enable-plugins --use-xserver --
javascript-delay 5000
--no-stop-slow-scripts $optionalparms $arg1 $arg2
```

c. スクリプト・ファイルを保存します。

PDF の生成時に、Flash のレンダリングが遅くなる場合

PDF の生成で、表示が 5 秒よりも長くかかる場合、Web レポートが PDF にエクスポートするのは、5 秒経過する前に使用可能であったデータのみです。この制約を回避するには、以下のようにして遅延を大きくします。

1. `/var/opt/BESWebReportsServer/BESReportsData/BESExe/wkhtmltopdf.sh` スクリプトを編集します。
2. 以下のステートメントで `--javascript-delay` に割り当てられている値を大きくします。

```
/var/opt/BESWebReportsServer/BESReportsData/BESExe/
wkhtmltopdf
--enable-plugins --use-xserver --javascript-delay 5000
--no-stop-slow-scripts $optionalparms $arg1 $arg2
```

この値はミリ秒単位で表されており、5000 ミリ秒がデフォルト値です。

3. スクリプト・ファイルを保存します。

生成する PDF に含まれるグラフが正しく表示されるために Adobe Flash Player が必要な場合

Web レポートのコンポーネントがインストールされているシステム上で Adobe Flash Player が使用可能であることを確認してください。Adobe Flash Player がインストールされていない場合、PDF の作成時に、Adobe Flash Player のインストールを求めるメッセージが表示され、その PDF はグラフなしで生成されます。Adobe Flash Player をインストールした後、Web レポート・サーバー・プロセスを再始動して、Adobe Flash Player を使用可能にします。

Linux システムでの PDF 生成のロギング

wkhtmltopdf の呼び出しからの出力を収集および確認するには、wkhtmltopdf からの標準出力と標準エラー出力をファイルにリダイレクトします。リダイレクトを実行する前に、[Web レポートのロギング \(\(ページ\) 109\)](#)で説明されているように Web レポートのロギングを使用可能にしたことを確認してください。

以下の手順に従って、リダイレクトを実行します。

1. スクリプト `/var/opt/BESWebReportsServer/BESReportsData/BESExe/wkhtmltopdf.sh` のバックアップ・コピーを作成します。
2. 次の行を変更してスクリプトを更新します。

```
/var/opt/BESWebReportsServer/BESReportsData/BESExe/wkhtmltopdf
--enable-plugins --use-xserver --javascript-delay 5000
--no-stop-slow-scripts $optionalparms $arg1 $arg2
```

この行を次のように変更します。

```
/var/opt/BESWebReportsServer/BESReportsData/BESExe/wkhtmltopdf
--enable-plugins --use-xserver --javascript-delay 5000
--no-stop-slow-scripts $optionalparms $arg1 $arg2
1>/tmp/pdfout.txt 2>&1
```

このようにして、標準出力と標準エラー出力を wkhtmltopdf から `/tmp/pdfout.txt` ファイルにリダイレクトします。

レポート出力の PDF ファイルへのエクスポート

レポートを PDF としてエクスポートするように Web レポートを構成した場合、「レポート一覧」パネルからレポートを実行すると、レポート出力ウィンドウの右上隅に「PDF にエクスポート」項目が表示されます。これをクリックして、Web レポートがインストールされているシステム上に、レポートの出力を PDF ファイルで保存します。カスタマイズされたレポートは PDF ファイルにエクスポートできないことに注意してください。

PDF ヘッダーおよびフッター

「スケジュール・アクティビティの作成」ダイアログで、アクティビティ・レポートの形式として「PDF」を選択してから、以下のダイアログを開いて PDF ファイルを印刷できます。

The screenshot shows the IBM Web Reports Administration interface. The main navigation bar includes 'Explore Data', 'Report List', and 'Administration'. Under 'Administration', there are links for 'Scheduled Activities', 'Filter Management', 'Address Book', 'User Management', and 'Datasource Settings'. The 'Start time' is set to Oct 8, 2014 at 15:15. The 'Expire time' is set to --- -- --- at --:--.

The 'Activity Report' dialog is open, showing the following configuration options:

- Type: Report (selected) / Action List
- Format: HTML PDF CSV
- PDF Header:
- PDF Footer:

注: Linux で実行される Web レポート・サーバーは、ヘッダーとフッターの非 ASCII 文字をサポートしません。

「PDF ヘッダー」および「PDF フッター」で、以下のコードを入力して、タイトル、URL、日付などに関する情報を指定できます。

&w ウィンドウ・タイトル

&u ページ・アドレス (URL)

&d 「コントロールパネル」の「地域の設定」で指定された短い形式の日付

- &D 「コントロール パネル」の「地域の設定」で指定された長い形式の日付
- &t 「コントロール パネル」の「地域の設定」で指定された形式の時刻
- &T 24 時間形式の時刻
- &p 現在のページ番号
- &P ページの総数
- && 単一のアンパーサンド (&)
- &b 前にあるテキストと後にあるテキストを別々のセクションに分離します。例: left &b
center &b right
- text カスタム・テキスト (印刷コードと組み合わせて使用できます)

⚠ 重要: Linux で実行される Web レポート・サーバーは、Internet Explorer 固有であるため、ヘッダーとフッターの印刷コードはサポートしません。

Web レポート用の HTTPS の構成

バージョン 9.5 以降、Web レポート・アプリケーションはデフォルトで HTTPS をサポートしています。

旧バージョン (デフォルトで HTTP をサポートするバージョン 9.2 など) からアップグレードする場合、またはインストール時に作成された証明書を企業の証明書に置き換える場合は、HTTPS を手動で構成する必要があります。

秘密鍵が格納された証明書ファイルを使用するか、2 つの別個のファイル (証明書用のファイルと秘密鍵用のファイル) を使用して、HTTPS を使用するように Web レポートを構成できます。Windows システムまたは Linux システムで Web レポートを手動で構成するには、以下の手順を実行します。

1. ご使用のシステムに OpenSSL をインストールするか、入手できる最新のバージョンにアップグレードします。
2. OpenSSL コマンド行ツールが使用可能であることを確認します。
3. 会社の情報と Web レポート・サーバーの情報を使用して [証明書署名要求を作成 \(####
101\)](#) します。
4. **いずれかを選択:** [自己署名証明書を生成する \(##### 102\)](#) か [認証局に証明書を要求 \(##### 103\)](#) します。

5. 証明書とプライベート・キーを組み合わせたファイルか、別個のファイル (証明書用のファイルとプライベート・キー用のファイル) を指すように [Web レポートの HTTPS レジストリー設定 \(##### 104\)](#) を更新します。

コンソールを使用せずに手動で、Web レポートが HTTPS で機能するように構成することもできます。追加情報については、[Windows システムでの HTTPS の手動カスタマイズ \(\(ページ\) 107\)](#) および [Linux システムでの HTTPS の手動カスタマイズ \(\(ページ\) 108\)](#) を参照してください。

証明書署名要求 (CSR) の作成

1. 証明書を登録するには、以下のような有効な構成ファイルが必要です。

```
[ req ]
default_bits = 4096
default_keyfile = keyfile.pem
distinguished_name = req_distinguished_name
attributes = req_attributes
prompt = no
output_password = bigfix

[ req_distinguished_name ]
C = US
ST = California
L = Emeryville
O = BigFix
OU = Development
CN = Common
emailAddress = admin@bigfix.com

[ req_attributes ]
challengePassword = bigfix
```

2. Common を Web レポート・サーバーの完全修飾ドメイン名で置き換えます。

3. 以下のコマンドを使用して証明書要求 `cert.csr` を作成します。

```
openssl req -new -config "c:\mynewconfig.conf" > cert.csr
```

これにより、`keyfile.pem` という名前のプライベート・キーも生成されます。

4. プライベート・キー・ファイル `keyfile.pem` からパスワードを削除し、以下のコマンドを使用して新規プライベート・キー (`nopwdkey.pem`) を生成します。

```
openssl rsa -in keyfile.pem -out nopwdkey.pem
```

自己署名証明書の生成

自己署名証明書 (`cert.pem`) を証明書要求ファイル (`cert.csr`) から生成するには、以下の手順を実行します。

1. 証明書署名要求 (`cert.csr`) を作成します。
2. 以下のコマンド (365 日間有効) を使用して、プライベート・キー・ファイル (`nopwdkey.pem`) と証明書要求ファイル (`cert.csr`) から証明書ファイル (`cert.pem`) を作成します。

```
openssl x509 -in cert.csr -out cert.pem -req -signkey nopwdkey.pem -  
days 365
```

⚠ 重要: 以下のステップでは、プライベート・キー・ファイルと署名証明書ファイルを組み合わせる方法を説明しています。Web レポートの HTTPS 構成でこれらのファイルを別に指定する場合は、以下のステップをスキップして、『[Web レポートでの HTTPS のカスタマイズ \(##### 104\)](#)』を参照してください。

📌 注: プライベート・キーがパスワードで保護されていない場合に限り、BigFix Inventory および License Metric Tool 用に生成されたキーのペアを Web レポートにも使用できます。

3. プライベート・キー・ファイルの `nopwdkey.pem` をメモ帳などのテキスト・エディターで開きます。
4. その内容をコピーして、以下の例のように `cert.pem` の証明書の下に貼り付けます。

```
-----BEGIN CERTIFICATE-----
```

```

...
-----END CERTIFICATE-----
-----BEGIN RSA PRIVATE KEY-----
...
-----END RSA PRIVATE KEY-----

```

ここで、... はテキストを表しています。

5. 「[Web レポートでの HTTPS のカスタマイズ \(##### 104\)](#)」の説明に従い、Web レポート・サーバー上の `cert.pem` で、証明書パスのレジストリー設定を確認します。

認証局に対する証明書の要求

ブラウザが暗黙的に信頼する証明書を使用して HTTPS Web レポートを暗号化するには、以下のように [Verisign](#) などの信頼できる認証局 (CA) に対して署名証明書を要求します。

1. [証明書署名要求 \(CSR\) を作成します。 \(##### 101\)](#)
2. `.csr` ファイルを認証局 (CA) に転送します。認証局が、ご使用のサーバーに対して署名証明書 (ブラウザが信頼する証明書) を発行します。認証局には、トラスト・チェーン全体を含む `.pem` ファイルとして証明書を発行するように依頼してください。

⚠ 重要: 以下のステップでは、プライベート・キー・ファイルと署名証明書ファイルを組み合わせる方法を説明しています。Web レポートの HTTPS 構成でこれらのファイルを別に指定する場合は、以下のステップをスキップして、『[Web レポートでの HTTPS のカスタマイズ \(##### 104\)](#)』を参照してください。

注: プライベート・キーがパスワードで保護されていない場合に限り、BigFix Inventory および License Metric Tool 用に生成されたキーのペアを Web レポートにも使用できます。

3. 署名証明書ファイルを受け取ったら、それを Microsoft のデフォルトの証明書処理機能にはインポートしないでください。
4. パスワード (`nopwdkey.pem`) を削除したプライベート・キー・ファイルを開いて、その内容をクリップボードにコピーします。
5. 署名証明書ファイルを Notepad++ などのテキスト・エディターで開きます。

6. ステップ 4 でコピーした内容を署名証明書ファイルに追加します。これは、最終的な内容の例です。

```
-----BEGIN CERTIFICATE-----  
...  
-----END CERTIFICATE-----  
-----BEGIN RSA PRIVATE KEY-----  
...  
-----END RSA PRIVATE KEY-----
```

ここで、... はテキストを表しています。

7. パブリック証明書とプライベート・キーを含む変更後の .pem ファイルを保存します。
8. このファイルをご使用のサーバーに保管して、Web レポートをセットアップする際に参照します。

Web レポートでの HTTPS のカスタマイズ

認証局からの信頼できる SSL セキュリティー証明書およびキーがある場合、この証明書とキーを使用してトラステッド接続を使用可能にするように、BigFix Web レポート・コンピューターを構成できます。

手順を完了して、以下のタスクを実行します。

- セキュア通信を使用することを指定します。
 - SSL 証明書ファイルおよび秘密鍵ファイルを配置する場所を指定します。
 - SSL ポート上で HTTPS 接続を listen し、クライアントを HTTPS にリダイレクトする HTTPS ポート番号を定義します。
1. BigFix コンソールから「コンピューター」タブを選択します。
 2. Web レポートを実行するコンピューターを選択し、「コンピューター設定の編集」を選択します。
 3. **_WebReports_HTTPServer_UseSSLFlag** の設定を探します。存在する場合は、新たに作成せずに、その値を編集して 1 にし、HTTPS を有効にします。この設定が存在しない場合は追加します。

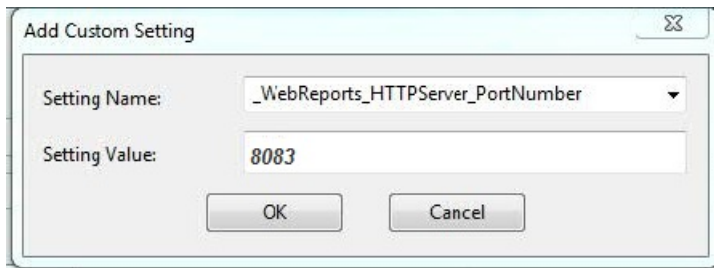
⚠ 重要: 秘密鍵ファイルと証明書ファイルを組み合わせた場合は、次のステップをスキップして、**_WebReports_HTTPServer_SSLSertificateFilePath** 設定のみを設定してください。

4. **_WebReports_HTTPServer_SSLPrivateKeyFilePath** の設定を探します。この設定が存在する場合は、2つ目を作成せずに、その値を、サーバーの秘密鍵が格納されている秘密鍵 (.pvk ファイル) の絶対パス名に変更します。この秘密鍵にパスワードを設定することはできません。この設定が存在しない場合は追加します。
5. **_WebReports_HTTPServer_SSLSertificateFilePath** の設定を探します。この設定が存在する場合は、2つ目を作成せずに、その値を .pem ファイルの絶対パス名に変更します。このファイルには、サーバーの証明書と秘密鍵の両方が格納される場合もあれば、証明書だけが格納される場合もあります。この設定が存在しない場合は追加します。

.pem ファイルが標準の pem ファイル形式になっていることを確認してください。証明書は、サーバーから接続するクライアント (ブラウザー) に渡されます。これらのクライアントは、証明書の情報を示すダイアログをユーザーに表示します。証明書が、信頼性要件をすべて満たす場合、ブラウザーはユーザーが介入しなくても接続します。証明書がブラウザーの信頼性要件を満たしていない場合、接続を続行するかどうかを尋ねるダイアログがユーザーに表示されます。ユーザーは、証明書に関する情報にアクセスすることができます。信頼された証明書とは、Verisign などの信頼できる認証局によって署名され、正しいホスト名を持ち、期限切れになっていない証明書のことです。

注: これらの設定は、Web レポート・コンピューターのキー **HKLM/Software/WoW6432Node/BigFix/EnterpriseClient/Settings/Client** の下にあるレジストリーに保管されます。

6. **_WebReports_HTTPServer_PortNumber** の設定を探します。存在する場合は、新たに作成せずにその値を編集して、使用するポート番号にします。存在しない場合は、以下のように追加します。



7. SSL が有効な場合は、以下の設定で転送ポートを定義します。
 - **_WebReports_HTTPRedirect_Enabled** を 1 に設定する
 - **_WebReports_HTTPRedirect_PortNumber** を、HTTP 接続を listen し、クライアントを HTTPS にリダイレクトするポートに設定する
8. Web ブラウザー要求用の TLS12 を要求するため
に、**_WebReports_HTTPServer_RequireTLS12** を探します。存在する場合は、新たに作成せずに、その値を編集して 1 にします。Web レポート・コンポーネントは、ローカルの設定やマストヘッドの設定に関係なく、BigFix サーバーと通信する際に必ず TLS 1.2 を使用します。

⚠ 重要: 1.2 より前のバージョンの TLS を使用することは推奨されません。

9. **BES Web レポート・サーバー・サービス**を再始動します。
 - Windows の場合は、「サービス」を開いて「**BESWebReports**」を選択し、「操作」メニューで「再起動」をクリックします。
 - Linux の場合は、プロンプトで次を実行します。`service beswebreports restart`
または `/etc/init.d/beswebreports restart`

[Linux システムでの HTTPS の手動カスタマイズ \(\(ページ\) 108\)](#)および[Windows システムでの HTTPS の手動カスタマイズ \(\(ページ\) 107\)](#)で説明されているように、セキュア通信は手動の手順を使用して設定することもできます。

Windows システムでの HTTPS の手動カスタマイズ

信頼できる SSL 証明書 (.pem ファイル) を用意したら、Web レポートを実行するコンピューター (通常はサーバー) に配置し、以下の手順を実行します。

1. **regedit** を実行し、`HKEY_LOCAL_MACHINE\Software\BigFix\EnterpriseClient\Settings\Client` (x32 システムの場合) および `HKEY_LOCAL_MACHINE\Software\Wow6432Node\BigFix\EnterpriseClient\Settings\Client` (x64 システムの場合) を見つけます。

HTTPS フラグ用、SSL 証明書のロケーション用、HTTPS ポート番号用、 および HTTPS へのリダイレクト用のサブキーを追加または変更する必要があります。
2. **クライアント**のサブキー `_WebReports_HTTPServer_UseSSLFlag` を作成します (まだ存在しない場合)。
3. **値**と呼ばれるキー `_WebReports_HTTPServer_UseSSLFlag` の文字列値 (reg_sz) を作成し、それを 1 に設定して HTTPS を有効にします。
4. **クライアント**のサブキー `_WebReports_HTTPServer_SSLSertificateFilePath` を作成します (まだ存在しない場合)。
5. **値**と呼ばれるキー `_WebReports_HTTPServer_SSLSertificateFilePath` の文字列値 (reg_sz) を作成し、それを SSL 証明書 (cert.pem) の絶対パス名に設定します。
6. **クライアント**のサブキー `_WebReports_HTTPServer_PortNumber` を作成します (まだ存在しない場合)。
7. **値**と呼ばれるキー `_WebReports_HTTPServer_PortNumber` の文字列値 (reg_sz) を作成し、それを、使用するポート番号 (通常 443) に設定します。
8. **クライアント**のサブキー `_WebReports_HTTPRedirect_Enabled` を作成します (まだ存在しない場合)。
9. **値**と呼ばれるキー `_WebReports_HTTPRedirect_Enabled` の文字列値 (reg_sz) を作成し、それを 1 に設定して HTTPS へのブラウザー・リダイレクトを有効にします。
10. **クライアント**のサブキー `_WebReports_HTTPRedirect_PortNumber` を作成します (まだ存在しない場合)。
11. **値**と呼ばれるキー `_WebReports_HTTPRedirect_PortNumber` の文字列値 (reg_sz) を作成します。その値は、HTTP 接続を listen し、クライアントを HTTPS にリダイレクトするためのポートの番号に設定します。
12. **BESWebReports** サービスを再始動します。

Linux システムでの HTTPS の手動カスタマイズ

信用された SSL 証明書 (.pem ファイル) を用意したら、Web レポートを実行するコンピューターに配置し、関連するファイル内のキーワードをカスタマイズします。

- besclient.config: Web レポートとともにクライアントがインストールされている場合
- beswebreports.config: Web レポートのみがインストールされている場合

使用するポート番号を定義するには、以下をカスタマイズします。

```
[Software\BigFix\EnterpriseClient\Settings\Client
\_WebReports_HTTPServer_PortNumber]
value = 443
```

SSL 証明書 (cert.pem) の絶対パス名を定義するには、以下をカスタマイズします。

```
[Software\BigFix\EnterpriseClient\Settings\Client
\_WebReports_HTTPServer_SSLCertificateFilePath]
value = /tmp/CERT/cert.pem
```

HTTPS を有効化するには、以下をカスタマイズします。

```
[Software\BigFix\EnterpriseClient\Settings\Client
\_WebReports_HTTPServer_UseSSLFlag]
value = 1
```

HTTP 接続から HTTPS 接続へのクライアント・リダイレクトを有効にするには、以下をカスタマイズします。

```
[Software\BigFix\EnterpriseClient\Settings\Client
\_WebReports_HTTPRedirect_Enabled]
value = 1
```

HTTP 接続を listen し、クライアントを HTTPS にリダイレクトするポートの番号を定義するには、以下をカスタマイズします。

```
[Software\BigFix\EnterpriseClient\Settings\Client
```

```
\_WebReports_HTTPRedirect_PortNumber]  
value = portnumber
```

Web レポートのロギング

ログ・ファイルを設定することで、Web レポートの使用状況を追跡できます。

Windows では

Web レポート・メッセージをログに記録するには、以下の手順を実行します。

1. regedit を実行して、HKEY_LOCAL_MACHINE\Software\BigFix
Enterprise Server\BESReports キーを見つけます。64 ビット・マシンの場合は、次のパスでWow6432Node の下を探さなければならない場合があります:HKEY_LOCAL_MACHINE\Software\Wow6432Node\BigFix Enterprise Server\BESReports。

Web レポートが使用するいくつかの変数およびパス名が表示されます。

2. LogOn という名前の新規 DWORD 値を作成し、この値を 1 に設定して、ロギングをオンにします。
3. LogPath という名前の新規文字列値を作成し、この値をログ・ファイルの絶対パス名に設定します (例: C:\fullpath\file.txt)。
4. LogFileSizeLimit という名前の新しい DWORD 値を作成し、この値をログ・ファイル・サイズ (バイト単位) に設定します。最小値は 1024000 (1 MB) です。この値を設定すると、アクティブなログ・ファイルに加えて最大 10 個の循環ログ・ファイルが維持されます (例えば、file.txt、file.txt_0、file.txt_1、...、file.txt_9)。
5. EnabledLogs という名前の新規文字列を作成して、次のいずれかのログ・レベルを指定します: debug|critical|memory|store_usage|all、ここで all はデフォルトです。

Linux の場合

Web レポート・メッセージをログに記録するには、以下の手順を実行します。

1. 構成ファイルを開きます。 `/var/opt/BESWebReportsServer/beswebreports.config`
2. [Software\BigFix\Enterprise Server\BESReports] セクションに、以下のように完全なログ・ファイル名を追加します。

```
LogPath = /var/log/WebReports.log
```

3. ロギングを使用可能にし、以下のキーワードを設定することでログ・レベルとログ・ファイル・サイズを定義します。

```
LogOn = 1  
EnabledLogs = all  
LogFileSizeLimit = file_size_in_bytes
```

各部の意味は以下のとおりです。

LogOn

ロギングを使用可能にするには 1 に設定します。ロギングを使用不可にするには 0 に設定します。

EnabledLogs

特定の Web レポート・メッセージのロギングを使用可能または使用不可にします。指定できる値は次のとおりです: `debug|critical|memory|store_usage|all`、ここで `all` はデフォルトです。

LogFileSizeLimit

ログ・ファイル・サイズをバイト単位で設定します。最小値は 1024000 (1 MB) です。この値を設定すると、アクティブなログ・ファイルに加えて最大 10 個の循環ログ・ファイルが維持されます (例えば、`file.txt`、`file.txt_0`、`file.txt_1`、...、`file.txt_9`)。デフォルト値は 100 MB です。ログ・ローテーションを無効化す

るには、`LogFileSizeLimit` を 0 に設定します。この設定では、未制御サイズのログ・ファイルが 1 つ生成されるだけであるため、推奨されません。

Web レポートを次回起動すると、指定されたファイルにセッションのログが保存されます。

Linux での一時ファイルの変更

Web レポート構成ファイルのパラメーターを設定することで、Linux Web レポートの一時ファイルのディレクトリーを指定することができます。

Linux の場合

Linux での一時ファイルのディレクトリーを指定するには、以下のステップを実行します。

1. Web レポート・コンポーネントを停止します。
2. 構成ファイルを開きます。 `/var/opt/BESWebReportsServer/beswebreports.config`
3. `[Software\BigFix\Enterprise Server\BESReports]` セクションに `TemporaryDirPath` という名前のパラメーターを追加します。
4. Linux Web レポートの一時ファイルのディレクトリーを指定します。
5. Web レポート・コンポーネントを再始動します。

これで、設定が構成されていない場合、Web レポートはデフォルトの一時ディレクトリー `/var/opt/BESWebReportsServer/BESReportsData/Temp` を使用するようになりました。

HTTP GET を使用した照会

HTTP GET を使用して、Web レポートを照会し、Web レポートにアクセスすることができます。Web レポート・プログラムの URL およびポートを指定し、必要なコマンドをブラウ

ザーのアドレス行に渡します。プログラムに既にログインしている場合は、以下の URL を指定して、メイン・ページにアクセスできます。

```
http://bigco.com:80/webreports?page=Main
```

BigFix 9.5 がインストールされている場合、メインページの URL は以下のとおりです。

```
http://bigco.com:80/webreports?page=Main
```

この例では、**bigco.com** がドメイン、**80** がデフォルトの BigFix ポート、**page=Main** がプログラム内のアクセス先を指定します。まだログインしていない場合は、**Username** と **Password** を同じ行で渡すことができます。

```
http://bigco.com:80/webreports?  
Username=myName&Password=myPassword&page=Main
```

BigFix 9.5 がインストールされている場合、URL は以下のとおりです。

```
http://bigco.com:8080/webreports?  
Username=myName&Password=myPassword&page=Main
```

SOAP を使用した照会

SOAP を使用して Web レポートにアクセスすることもできます。多くのクライアント・ライブラリーでは、Web サービス記述言語 (WSDL) ファイルの場所、メソッド名、およびメソッドに渡すパラメーターが必要です。WSDL ファイルは、Web レポートを使用して BigFix データベースを照会するために必要なネットワーク・エンドポイントを記述します。WSDL には、Web レポート・サーバーからアクセスできます。例:`http://server/webreports?wsdl`。

代わりに、BigFix インストール・ディレクトリー内のサンプル・ファイル `relevance.wsdl` を参照することもできます。この WSDL ファイルは、関連式を評価するために使用できる

`relevanceExpr` を定義します。BigFix Enterprise という名前のフォルダーに BigFix をインストールした場合、このファイルは次のディレクトリーにあります。

```
BigFix Enterprise\BES Server\BESReportsServer\wwwroot\soap
```


インストール用のレジストリーの場所は `HKLM\SOFTWARE\Wow6432Node\BigFix\Enterprise Server\BESReports\Paths` です。

このレジストリー・キーには、WSDL ファイルのパス名を含む `wsdl` という名前の文字列値があります。

要求には、`relevanceExpr` というラベルの付いたタグが含まれます。このタグには、BigFix コンピューターの関連式番号が格納されます。これは、WSDL ファイル内で定義される操作の 1 つです。

使用可能なメソッドには、以下のものがあります。

```
GetRelevanceResult( String relevanceExpression, String username, String
    password )
StoreSharedVariable( dashID, variableName, variableValue, [success/failure
    callback], [database id] )
DeleteSharedVariable( dashID, variableName, [success/failure callback],
    [database id] )
```

 **注:** Web レポートの管理者のみが `StoreSharedVariable` メソッドおよび `DeleteSharedVariable` メソッドを使用できます。

SOA クライアントから照会を送信するには、以下の BigFix http パスを指定します。

```
http://web_report_server/soap
```

ここで、`web_report_server` は Web レポート・サーバーのホスト名または IP アドレスです。

PERL

この PERL コードは、Web レポートのユーザー名、パスワード、および関連式の 3 つの引数を受け取る `SOAP::Lite` モジュールを使用し、呼び出しの結果を出力します。

```

use SOAP::Lite;
#arguments: [hostname] [username] [password] [relevance expression]
#hostname only, e.g. 'example.com' rather than 'http://example.com/
webreports'
my $host = $ARGV[0];
my $username = SOAP::Data->name('username' => $ARGV[1] );
my $password = SOAP::Data->name('password' => $ARGV[2] );
my $expr = SOAP::Data->name('relevanceExpr' => $ARGV[3] );
my $service = SOAP::Lite -> uri( 'http://' . $host . '/webreports?wsdl' )
-> proxy('http://' . $host );
my $result = $service -> GetRelevanceResult( $expr, $username, $password );
if( $result->fault ) {
print "faultcode: " . $result->faultcode . "\n";
print "faultstring: " . $result->faultstring . "\n";
}
else {
    foreach my $answer ( $result->valueof( "//GetRelevanceResultResponse/
a" ) ) {
        print $answer . "\n";
    }
}
}

```

未加工の SOAP 要求および応答のフォーマット

SOAP 要求の例を以下に示します。

```

<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<env:Envelope xmlns:env="http://schemas.xmlsoap.org/soap/envelope/" >
  <env:Body>
    <GetRelevanceResult xmlns="http://[webreportshostname]:[webreportsport]
/webreports?wsdl">
      <relevanceExpr>names of bes computers</relevanceExpr>
      <username>user</username>
    </GetRelevanceResult>
  </env:Body>
</env:Envelope>

```

```

    <password>password</password>
  </GetRelevanceResult>
</env:Body>
</env:Envelope>

```

SOAP 応答の例を以下に示します。

```

<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<env:Envelope xmlns:env="http://schemas.xmlsoap.org/soap/envelope/">
  <env:Body>
    <GetRelevanceResultResponse xmlns=http://[webreportshostname]:
[webreportsport]
    /webreports?wsdl">
      <a>Computer 1</a>
      <a>Computer 2</a>
      <a>Computer 3</a>
    </GetRelevanceResultResponse>
  </env:Body>
</env:Envelope>

```

この例に関連する式は、[リソース](#)で入手できます。詳しくは、BigFix 担当者にもお問い合わせください。

セッション・インスペクター

BigFix コンソールおよび Web レポートは両方とも、データベースの情報を効率的に表示するために、メモリー内のセッション・キャッシュを利用します。それぞれ別個の環境であるため、これらの 2 つのプログラムには、いくつかの大きな違いがあります。

BigFix コンソール

Fixlet 履歴インスペクターを保守しません。

BigFix Web レポート

Fixlet 履歴インスペクターを保守します。ただし、メモリー占有スペースを節約するために、バージョン 8.0 は低速で実行されます。

現行のインスペクターは、BigFix コンソール内でのみ機能するように設計されています。

現行のインスペクターは、機能しません。グローバルに表示される Fixlet メッセージは、何もローカルに表示される Fixlet メッセージは、何も処理するインスペクターは、アプリ 返ししません。

セッション間で整合性があります。

1 つの BigFix サーバーでのみ機能します。複数の BigFix サーバーにわたって機能します。

JavaScript **関連度**呼び出しは瞬間的です。JavaScript **関連度**呼び出しは HTTP 要求を生成するため、サーバーへの往復のペナルティが発生します。

Fixlet フィルター、コンピューター・グループ、コンピューター、Fixlet メッセージ、タスク、および分析へのリンクが有効です。Fixlet フィルターおよびコンピューター・グループへのリンクは#####。しかし、コンピューター、Fixlet メッセージ、タスク、および分析へのリンクは#####。

コンテンツ・サイトからの Web レポートの表示

Web レポートは、コンテンツ・サイトからレポートを表示できるレポート・フォーマットを受け入れます。したがって、Fixlet アクションまたはタスクによって、新規レポートを追加、編集、または削除できます。基本的なレポートには、「外部」、「テンプレート」、「カスタム」の 3 種類があります。レポート・ファイルは、拡張子 **.beswrpt** または **.webreport** の付いた有効な XML ファイルである必要があります。

Name タグは、レポート一覧内の同じ名前の列に対応します。

URLParameters タグと **Data** タグの内容、およびタグが存在するかどうかは、**Type** タグに依存します。Type タグには、TemplateReport、CustomReport、または ExternalReport の 3 つの文字列のいずれかを指定できます。大/小文字が区別されます。

.beswrpt ファイルでは、複数のレポートを単一の XML ファイル内に含めることもできます。

```
<BESWebReports>
  <BESWebReport>
```

```

.
.
.
</BESWebReport>
<BESWebReport>
.
.
.
</BESWebReport>
</BESWebReports>

```

外部レポート

外部レポートには、別のページ、サービス、またはレポート・エンジンを指す URL が含まれます。レポート・ファイルは、宛先の完全な URL を含む単純なラッパーです。外部レポートをインポートすると、他のすべてのレポートと同様に Web レポート一覧内に表示されます。外部レポートをクリックすると、ターゲット・ページがブラウザー内に読み込まれます。


この例では、外部レポートは、BigFix ホーム・ページを読み込みます。

```

<BESWebReport>
  <Name>Example External Report</Name>
  <Description>
    BigFix Home Page
  </Description>
  <Type>ExternalReport</Type>
  <Category>External Report</Category>
  <Source>HCL, Inc.</Source>
  <Data>
    http://www.ibm.com/software/tivoli/solutions/endpoint/
  </Data>

```

```
</BESWebReport>
```

 **注:** 埋め込み URL は絶対アドレスであり、http:// または https:// で始まる必要があります。

テンプレート・レポート

テンプレート・レポートは、外部レポートに似ていますが、URL のベースが Web レポート・サーバーであることが前提になっている点が異なります。これらのレポートは、ネイティブ Web レポートと基本的に同じです。このセクションは、本書の情報の完全性を維持するために記載されています。一般に、カスタム・レポートまたは外部レポートを使用すれば、テンプレート・レポートを使用する必要はありません。

このレポートには、Data タグは存在しません。代わりに、すべての情報は **URLParameters** タグ内で渡されます。

例えば、以下の問題評価レポートを作成できます。

```
<BESWebReport>
  <Name>Example Issue Assessment Report</Name>
  <Description>
    An example report. Runs the Issue Assessment report with specific
    Fixlets,
    BES Support/129 and BES Support/173.
  </Description>
  <Type>TemplateReport</Type>
  <Category>Issue Assessment</Category>
  <Source>HCL, Inc.</Source>
  <URLParameters>
    FixletParam=BES Support%2f129&amp;FixletParam=BES
    Support%2f173&amp;page=VAReport
  </URLParameters>
</BESWebReport>
```

HTML と同様に XML でも、URL パラメーターをエスケープする必要があります。